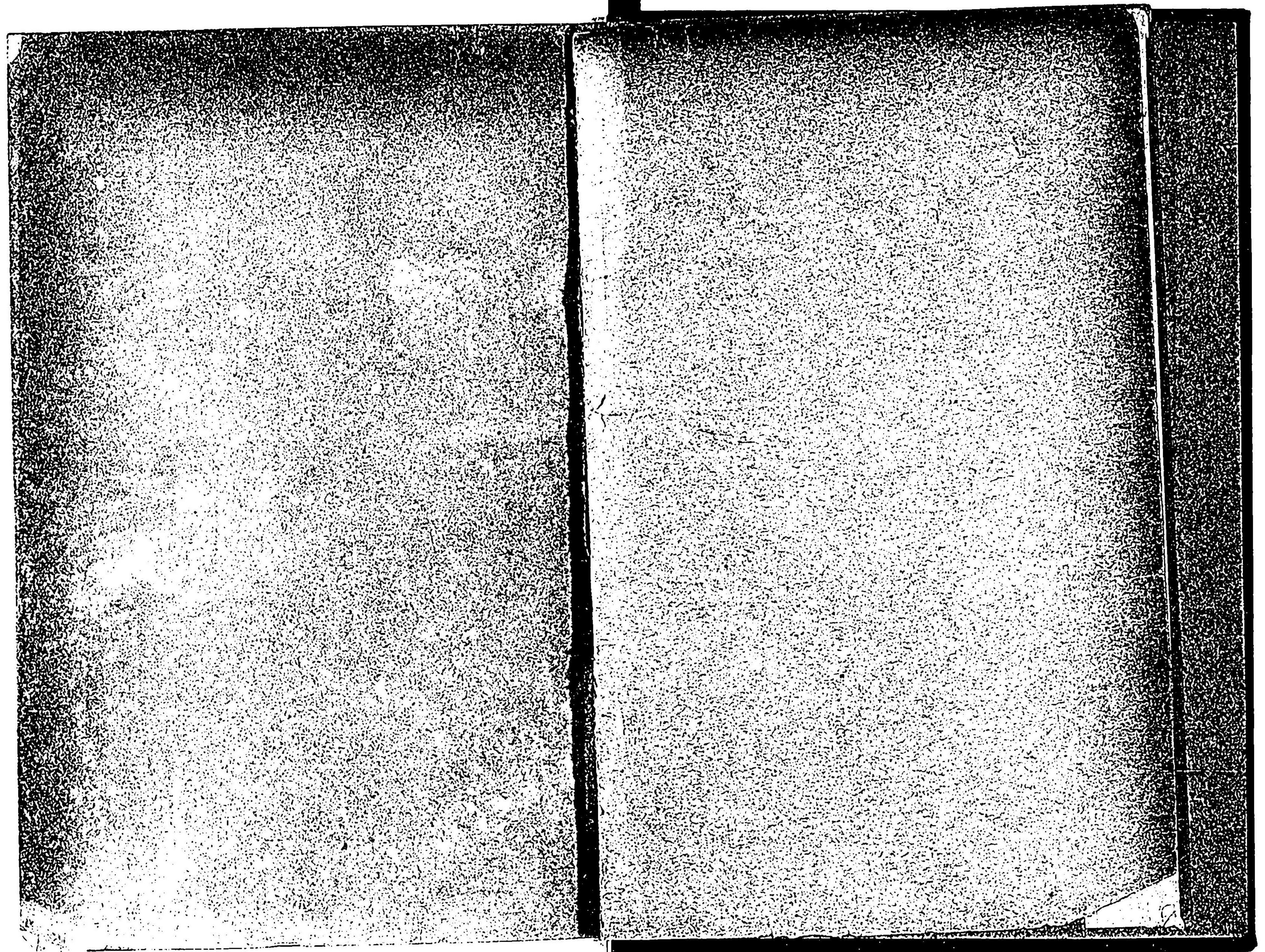


トクトク掘内謙吉纂著

喉科新書 上卷

春州堂藏版

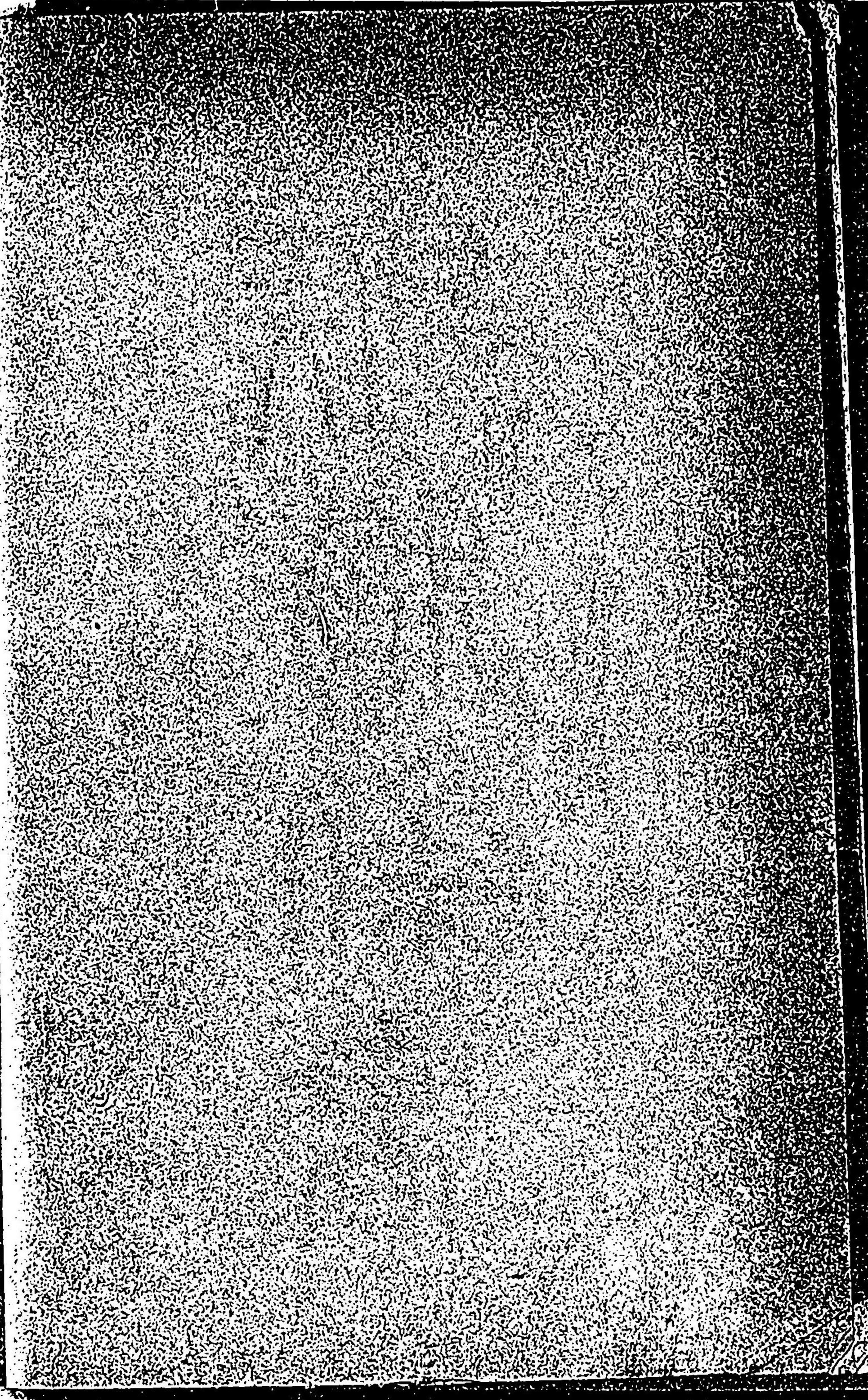


58-6

明
刻
書

石埭居士周署檢于星舫

同
泰



喉科新書

喉科新書

緒言

輓近本邦ノ醫學駿々トシテ進ミ其停止スル所ヲ知ラズ隨テ専門ノ醫士踵ヲ接シテ輩出シ各科ノ著書日ニ月ニ陸續出デ、枚舉ニ遑アラズト雖モ獨リ喉頭科ニ至テハ之ヲ專修スル者寥々トシテ辰星ノ如ク其書モ亦未ダ殆ト乏ナルヲ聞カズ僅ニ内外科中其一斑ヲ掲グルニ過ギズ豈遺憾ナラザランヤ余嚮ニ歐洲ニ遊ブヤ專ラ耳鼻咽喉科ヲ修メ歸朝シテ業ヲ開クコト茲ニ數年學淺ク驗深カラズ加フルニ文事ニ精カラズ固ヨリ高尚ナル學術ヲ舒スルノ器ニアラズ然レドモ世已ニ耳科學或ハ鼻科學ノ著アヲ以テ實地家

ヲ教テ益スル所少ナカラズ余モ又聊カ鑑ル所アリテ敢テ
淺學不文ヲ顧ズ先輩諸氏ノ所説ヲ引用シ微々タル自家ノ
經驗ニ照シ漸ク積テ一小冊子ヲ爲セリ固ヨリ章句體ヲ爲
サズ隨テ意義明晰ナラザル者蓋シ多カラシハ余ノ大ニ耻
ル所ナリ然レドモ今之ヲ空シク笈底ニ納メテ蠹魚ノ飽ヲ
恣ニセンモ亦遺憾ニ堪ヘザル所ナリ依テ斷然之ヲ剗削ニ
投シテ大方諸君ノ教ヲ待タントスト爾云フ

著者識

喉科新書上卷目次

第一編 總論

頁

喉頭學略史……………一

第一章 喉頭解剖及生理……………五

第一項 喉頭解剖上造構……………五

第二項 喉頭生理……………六

第二章 原因總論……………六

第三章 診法……………六

第一項 喉頭鏡檢查法……………六

第二項 直射光線照明法……………五

第三項 屈折光線照明法……………三

(一) レンズ及凹面鏡ノ併用……………六

(二) 人工光源……………七〇

(三) 電氣光線……………七三

第四項 喉頭照透法……………七四

第五項 氣管截開孔ヨリ行フ検査法……………七六

第六項 喉頭検査ノ技術……………八〇

第七項 喉頭検査法特有ノ難事……………八五

第八項 喉頭鏡検査ノ映像……………九三

第九項 喉頭検査法特異ノ改良……………九六

(甲) 頭首ヲ正直ニ保テ検査スル法……………九八

(乙) 頭首ヲ強ク反張シテ検査スル法……………九九

(丙) 頭首ヲ前屈シテ検査スル法……………一〇〇

(丁) 頭首ヲ傾斜セシメテ検査スル法……………一〇三

(戊) 頭首ヲ廻旋シテ検査スル法……………一〇三

第十項 喉頭及氣管直達検査法……………一〇三

第十一項 他ノ検査法(視診、觸診、聽診、探子検査法)……………一〇九

第四章 症候總論……………一一三

(一) 發音ノ障礙……………一一三

(二) 呼吸ノ障礙……………一二四

(三) 疼痛ノ感覺……………一二九

(四) 喉頭咳嗽……………一三〇

(五) 咯出物……………一三三

第五章 疾患試験法

一三三

第六章 治法總論

一三五

第一項 外局處療法

一三五

(い) 瀉血法

一三五

(ろ) 冷罨法

一三六

(は) 温罨法

一三六

(に) 誘導法

一三六

(ほ) 皮上電氣用法

一三七

第二項 内局處療法

一三八

(い) 藥物蒸氣ノ吸入法

一三八

(ろ) 氣狀體ノ吸入法

一三三

(は) 霏散吸入法

一三三

(に) 液性藥品ノ用法

一三七

(ほ) 固形藥用法

一四二

(へ) 喉頭内電氣療法

一四六

第三項 喉頭内外科手術

一五〇

(一) 喉頭刀

一五一

(二) 喉頭鑷子及鉗子

一五二

(三) 喉頭絞斷器

一五九

(四) 喉頭グイルロナーヌ

一五九

(五) 喉頭キユレツテ

一六〇

第四項 電氣燒灼法

一六三

第五項 喉頭及氣管外手術

一六六

第六項 喉頭狹窄ノ器械的療法

一七二

(一) 氣管截開術ヲ施サズシテ空管ヲ
挿入スル法……………一九三

(二) 氣管截開術後ノ正式擴張法……………二〇〇

(三) 喉頭截開術後ノ正式擴張法……………二〇六

第七項 喉頭局處麻醉法……………二三三

第八項 喉頭鏡及器械ノ清掃并ニ消毒法……………二三九

第九項 内用藥……………二三〇

第十項 飲食及生活法……………二三四

挿圖目次

第一圖 喉頭ノ軟骨ヲ右側ヨリ示ス圖(右甲状軟骨板ヲ去
リタル者)……………一〇

(一) 氣管 (二) 環狀軟骨 (三) 甲状軟骨 (四) 會厭軟骨 (五) 披裂
軟骨 (六) 聲帶部ニ於ケル彈力膜 (七) モルガニ―氏竇部ニ
於ケル彈力膜 (八) 假聲帶及ヒ其上部ノ彈力膜

第二圖 喉頭軟骨ヲ後方ヨリ示ス圖……………一〇

(一) 環狀軟骨 (二) 甲状軟骨 (三) 披裂軟骨 (四) サントリニ―
氏軟骨 (五) 會厭軟骨

第三圖 喉頭軟骨ヲ前面ヨリ示ス圖……………一三

(一) 氣管 (二) 環狀軟骨 (三) 中環狀甲状軟骨 (四) 甲状軟骨側
板 (五) 同中央板 (六) 會厭軟骨 (七) 甲状會厭軟骨

第四圖 喉頭前面ノ筋ヲ示ス圖……………二〇

- (一) 胸骨甲狀筋
- (二) 甲狀舌骨筋
- (三) 舌骨舌筋
- (四) 橫頸筋
- (五) 環狀甲狀筋
- (六) 頤舌筋
- (七) 下顎骨
- (八) 舌骨
- (九) 甲狀舌骨膜
- (十) 甲狀軟骨
- (十一) 環狀甲狀軟骨
- (十二) 環狀軟骨
- (十三) 氣管
- (十四) 食管
- (十五) 甲狀腺
- (十六) 胸骨
- (十七) 第一肋軟骨

第五圖 喉頭後面ノ筋ヲ示ス……………二一

- (一) 氣管
- (二) 後環狀氣管靱帶
- (三) 環狀軟骨板
- (四) 甲狀軟骨後緣
- (五) 會厭軟骨
- (六) 舌骨大角
- (七) 舌根
- (八) 甲狀舌骨膜
- (九) 舌骨會厭膜
- (十) 舌骨舌膜
- (十一) 中舌會厭靱帶
- (十二) 側舌會厭靱帶
- (十三) 咽頭會厭靱帶
- (十四) 錐狀喉頭筋
- (十五) 橫披裂軟骨間筋
- (十六) 斜披裂軟骨間筋
- (十七) 後環狀披裂筋
- (十八) 後環狀甲狀筋

第六圖 右側内甲狀披裂筋及ヒ其附近ノ筋ヲ内面ヨリ示ス圖……………二三

- (一) 環狀軟骨
- (二) 甲狀軟骨
- (三) 披裂軟骨
- (四) 會厭軟骨
- (五)

第七圖 聲帶中央部ノ横断面ヲ示ス圖……………二五

- 内甲狀披裂筋
- (六) 前庭擴大筋
- (七) 披裂軟骨膜筋(前庭縮小筋ノ一部)
- (一) 内甲狀披裂筋ノ纖維
- (二) 彈力組織
- (三) 粘膜炎下組織
- (四) 粘膜炎
- (五) 扁平上皮

第八圖 假聲帶ノ横断面ヲ示ス圖……………二六

- (一) 粘液腺
- (二) 粘膜炎
- (三) 頸毛上皮
- (四) 彈力組織
- (五) 血管

第九圖 喉頭内ヲ後方ヨリ示ス圖……………二八

- (一) 舌骨大角ノ遊離端
- (二) 甲狀軟骨後緣
- (三) 梨子狀竇
- (四) 環狀軟骨板
- (五) 同弓
- (六) 橫披裂間筋
- (七) 會厭軟骨
- (八) 披裂會厭壁
- (九) 假聲帶
- (十) 聲帶
- (十一) モルガニ一氏竇口
- (十二) 楔狀軟骨
- (十三) サントリニ一氏軟骨

第十圖 喉頭及ヒ甲狀腺ノ血管ヲ示ス圖……………三〇

- (一) 舌骨
- (二) 甲状軟骨
- (三) 環狀軟骨
- (四) 甲状腺
- (五) 錐體突
- (六) 氣管
- (七) 第一肋骨
- (八) 前斜角筋
- (九) 大動脈弓
- (十) 無名動脈
- (十一) 右總頸動脈
- (十二) 鎖骨下動脈
- (十三) 左總頸動脈
- (十四) 左鎖骨下動脈
- (十五) 外頸動脈
- (十六) 上甲状腺動脈
- (十七) 上喉頭動脈
- (十八) 上大靜脈
- (十九) 右無名靜脈
- (二十) 左無名靜脈
- (二十一) 内頸靜脈
- (二十二) 鎖骨下靜脈
- (二十三) 總顏面靜脈
- (二十四) 上甲状腺靜脈
- (二十五) 中甲状腺靜脈
- (二十六) 下甲状腺靜脈
- (二十七) 無對甲状腺靜脈

第十一圖 頭喉ノ後面血管及ビ神經ヲ示ス圖……………三五

- (一) 後鼻竇
- (二) 口蓋帆
- (三) 舌根
- (四) 咽頭會厭袋
- (五) 咽頭喉頭窩
- (六) 會厭軟骨
- (七) 食管
- (八) 歐氏管咽頭筋
- (九) 咽頭口蓋筋
- (十) 口蓋舉筋
- (十一) 橫披裂間筋及ビ斜披裂間筋
- (十二) 後環狀披裂筋
- (十三) 上喉頭神經
- (十四) 下喉頭神經
- (十五) 甲状腺動脈
- (十六) 左頸動脈
- (十七) 左鎖骨下動脈
- (十八) 下甲状腺動脈
- (十九) 無名動脈
- (二十) 右頸動脈
- (二十一) 右鎖骨下動脈
- (二十二) 内頸靜脈
- (二十三) 下

- 岩様部竇
- (一) 右無名靜脈
- (二) 左無名靜脈
- (三) 上大靜脈
- (四) 奇靜脈
- (五) 大動脈
- (六) 氣管及ビ氣管枝
- (七) 迷走神經
- (八) ヲキルリス氏副神經
- (九) 舌咽神經
- (十) 舌下神經
- (十一) 左
- 反廻神經
- (十二) 右反廻神經

- 第十二圖 聲門安靜位ヲ示ス圖……………三九
- 第十三圖 深呼吸時ニ於ケル聲門ノ位置ヲ示スノ圖……………四〇
- 第十四圖 發聲時ニ於ケル聲門ノ位置ヲ示スノ圖……………四一
- 第十五圖 假不全聲音ニ於ケル聲門ノ位置ヲ示スノ圖……………四二
- 第十六圖 假聲帶ノ相觸接シタル狀ヲ示スノ圖……………四三
- 第十七圖 喉頭鏡ノ圖……………五〇
- 第十八圖 「ミグノンランブラ」附シタル電氣喉頭鏡ノ圖……………五七
- 第十九圖 ヤコブソン氏電氣喉頭鏡ノ圖……………五八
- 第二十圖 マッケンジー氏集光器ノ圖……………六二
- 第二十一圖 額帶反射鏡ノ圖……………六三

第二十二圖 米式鋼鐵製撥條反射鏡ノ圖……………六四

第二十三圖 ベ、フレンケル氏喉科用ランプノ圖……………六八

第二十四圖 シエツヒ氏耳鼻喉科用フアントームノ圖……………九一

第二十五圖 キリアン氏喉頭検査法ノ圖……………一〇一

第二十六圖 キルスタイン氏直達喉頭鏡ノ圖……………一〇六

第二十七圖 同検査法ノ圖……………一〇七

第二十八圖 喉科用探子ノ圖……………一一一

第二十九圖 ローゼンベルグ氏メシトール吸入器ノ圖……………一三〇

第三十圖 喉科用毛筆、海綿探子、刀及ビ其支桿ノ圖……………一三八

第三十一圖 クラウゼー氏綿球支持器ノ圖……………一三九

第三十二圖 ハルテフェルト氏注入器ノ圖……………一四〇

第三十三圖 喉科用吹粉器ノ圖……………一四二

第三十四圖 同吹球ヲ附スル者ノ圖……………一四二

第三十五圖 カビエルスケゴットスタシ氏吹粉器ノ圖……………一四三

第三十六圖 オイレンブルグ氏喉科用電氣導子ノ圖……………一四七

第三十七圖 チームゼン氏重複導子ノ圖……………一四八

第三十八圖 喉頭諸筋電氣刺衝點ノ圖……………一四九

第三十九圖 (一) 喉科用刀ノ圖……………一五一

第四十圖 チユルク氏ノ喉頭鑷子ノ圖……………一五三

第四十一圖 シユレットル氏鑷子ノ圖……………一五四

第四十二圖 マツケンデー氏鑷子ノ圖……………一五五

第四十三圖 ユラツ氏喉頭鉗子ノ圖……………一五五

第四十四圖 ゴットスタイン氏喉頭鉗子ノ圖……………一五七

第四十五圖 喉頭絞斷器ノ圖……………一五八

第四十六圖 喉頭グイルロチヌノ圖……………一六〇

第四十七圖 クラウゼーヘーリング氏喉頭「キユレット」ノ圖……………一六一

第四十八圖 ゴットスタイン氏ノ重複「キユレット」ノ圖……………一六二

第四十九圖 喉科用電氣燒灼子ノ圖……………一六三

第五十圖	ホルトリニー氏電氣燒灼用把柄ノ圖	一六四
第五十一圖	シエツヒ氏通用柄ノ圖	一六五
第五十二圖	ゴットスタイン氏柄ノ圖	一六六
第五十三圖	トレンデレンブルグ氏栓塞管ノ圖	一六九
第五十四圖	ハーン氏栓塞管ノ圖	一七二
第五十五圖	クラエウスキー氏栓塞管ノ圖	一七四
第五十六圖	グスセンバウエル氏人造喉頭ノ圖	一八六
第五十七圖	ヒユテル氏人造喉頭ノ圖	一八七
第五十八圖	フオウリス氏人造喉頭ノ圖	一八八
第五十九圖	ラーベ氏人造喉頭ノ圖	一八八
第六十圖	クラウゼ氏人造喉頭ノ圖	一八九
第六十一圖	ペアン氏人造喉頭ノ圖	一九一
第六十二圖	シユレット氏硬護膜製カテーテルノ圖	一九五
第六十三圖	(一六三) オトワイアー氏喉頭插管器ノ圖	一九六

第六十四圖	シユレット氏亞鉛製擴張器ノ圖	二一三
第六十五圖	同氏短頸結節カテーテルノ圖	二一四
第六十六圖	同氏カテーテル固定鉗子ノ圖	二一四
第六十七圖	ステルク氏擴張カニューレノ圖	二一七
第六十八圖	シユレット氏三瓣擴張器ノ圖	二一七
第六十九圖	ダルハルト氏二瓣擴張器ノ圖	二一八
第七十圖	ミクリツ氏擴張用硝子管ノ圖	二二一
第七十一圖	ヘーリング氏喉科用注射器ノ圖	二二七

喉科新書上卷目次終

喉科新書上卷

ドクトル 堀内謙吉 纂著

第 一 編 總 論

喉頭學略史

○ 喉頭學略史

方今吾人が襲用スル喉頭鏡検査法ハ簡單僅少ノ器械ヲ以テ喉頭ノ
 内景ヲ審ニシテ隨テ診斷確實ニ局處療法及ビ外科的手術ノ巧妙ヲ極
 ムルヲ得ルニ至レリ而シテ其濫觴ヲ尋ヌルニ頗ル遠大ナリ
 抑々喉頭鏡検査法ノ考案タルヤ其起源發達ノ狀況及ビ之ニ從事セ
 ル者稍々其目的ヲ達セントシテ屢々失敗セシ所以ヲ研究スルハ學
 門上徒勞ニ屬ス可キニアラズ初メ喉頭内ニ生ジタル者ト推測セル
 腫瘍ヲ目視シテ之ヲ除去センガ爲メニ器械ヲ構造セシハ佛人
 Levert ニシテ前世紀千七百四十三年中既ニ此事在リ氏ハ研磨セル

○ 喉頭學略史

金屬板ヲ以テ腫瘍ニ向テ日光ヲ反射セシメ同時ニ腫瘍ノ映像ヲ板面ニ現ハサシメメントヲ企テシガ遂ニ其目的ヲ達スルコト能ハズシテ止ミス次デ鏡ト光線トヲ利用スル時ハ能ク喉頭内ヲ檢スルヲ得ベキノ說ヲ主唱シ此目的ニ於ケル器械ノ構造ヲ說述セシ者ハ獨逸國フランクフルト市ノ醫師 Bozzini ナリ(千八百廿五年)但シ其考案ハ當時ニ在テ醫師社會ノ贊同ヲ得ルコト少ナク且ツ維納市ノ醫科大學ニ於テハ其器械ノ良否ニ就テ討議ヲ凝ラシ遂ニ之ヲ排棄スベキヲ宣告スルニ至レリ又千八百廿五年 Cagniard de Latour 及ビ千八百廿七年ゲンフ市ノ Sen 亦之レガ試驗ヲ行ヘリト雖モ其成績ハ其ニ不良ナリシ爾後千八百廿九年倫敦市ノ Raddington ハ大小二個ノ鏡ヲ用ヒ其小鏡ハ喉頭ノ映像ヲ現ハスノ用ニ供シ大鏡ハ日光ヲ受ケテ之ヲ小鏡ニ反射スル具トナシ以テ稍々其目的ヲ達スルヲ得テ之ヲ聲門鏡 Glottiskopf ト名ケタリ此裝置ハ既ニ現今ノ喉頭鏡ト頗ル近似セシト雖モ亦杏林社會ノ採用スル所トナラズシテ速ニ忘却セラレ

聲門鏡

ガ
ル
シ
ア
氏
ノ
發
見

タリ其他千八百三十二年 Bernati, Troscau, Belloc 千八百三十八年 Reune. 千八百四十年 Sixon 千八百四十四年 Warden 等ハ續々輩出シ各々刻苦シテ試驗ヲ行ヒシガ悉ク皆失敗ニ歸シタリ但シ Warden ハ創メテ大ナルアルガンド燈ト三角柱狀鏡トヲ用ヒテ反射光線ヲ利用セシ人ナリ斯ノ如ク諸家大ニ苦心研究セシト雖モ未ダ以テ學門上及ビ實際上ニ益スル所ナカリシニ偶々倫敦ノ唱歌教師 Manuel Garcia ハ千八百五十四年小鏡ヲ口腔内ニ送り之ヲ軟口蓋ニ當テ以テ初メテ活人ノ喉頭内ヲ目視シテ聲音發生ノ狀及ヒ自然音假聲等ノ發スル理ニ付テ非常ノ功績ヲ收メタリ是實ニ喉頭鏡發見ノ鼻祖ト做スベキナリ然レドモ惜ムラクハ氏ノ發見ハ杏林社會ノ注目ヲ引クコト少ク且ツ Critzner ガ謂ヘル如ク氏ハ解剖家ニ非ズシテハ此ノ如キ卓越ナル爛眼ト秀拔ナル判斷力トヲ以テ解剖生理的ノ觀察ヲナセシハ眞ニ驚クニ堪ヘタリト雖モ一般ノ信用ヲ得ズ且ツ氏モ固ヨリ此發見ヲ以テ醫術上ニ利用スベキノ意ナカリシナリ次デ千八百五

チユルク氏鏡

十七年維納市ノ Turckハ Garciaノ此發見アルヲ知ラズシテ一種ノ鏡ヲ案出シ種々ノ試驗ヲ行テ頻リニ之ヲ實際ニ應用センコトヲ勉メタリ然ルニ其翌千八百五十八年 Czernakハ Turckノ試驗ニ從事スルヲ聞知シ遂ニ氏ノ鏡ヲ借用シテ自ラ試驗ヲ行ヒ以テ検査法ニ必要ナル全般ノ事項ヲ了得シ諸種ノ人身ニ之ヲ使用シ得ベキコトヲ確認シ且ツ日光ニ代フルニ人工反射法ヲ以テシ講演ニ著書ニ悉ク之ヲ主唱シテ其廣布ヲ謀リ遂ニ醫學上及ビ醫術上ニ於テ面目ヲ一新スルニ至リシハ實ニ千歳不朽ノ偉業ニシテ苟クモ斯道ニ從事スル者ハチユルク及ビツェルマツク二家ノ芳名ハ深く銘心シテ忘ルコト勿ルベシ

喉頭鏡検査法ノ發見以來斯ノ科ニ關スル業績ハ續々トシテ舉リ或ハ病理解剖上ニ或ハ診斷上ニ或ハ治療上ニ就テ益々其歩ヲ進メ今ヤ一大専門科トシテ獨立スルニ至レリ而シテ此發達ニ與テカアル者ハ Avellis, Brunns, Billroth, Chiali, Cozzolino, Fasano, B. Frankel, Preudenthal,

喉頭鼻科學寶鑑

Glasgow, Gottstein, Jacobson Kilian, Mackenzie, Massei, Navratil, Oertel, Onodi, Photiades, Rosenthal, Schnieglow, Schnitzler, Stoerk, Schröter 等ノ諸氏トス就中ブルンスハ内喉頭手術ニ於テピルロートハ喉頭剔出術ニ於テ各々功績ヲ現セリ又ペーブレンケルハ輒近千八百九十三年(喉頭鼻科學寶鑑 Archiv für Laryngologie und Rhinologieト名クル新誌ヲ公世シ益々斯科ノ發達ヲ謀リ之ニ依テ學者ノ研究ニ便シタリ其他英國佛國伊國等ニ於テモ爭テ斯科ノ雜誌ヲ發行シ他ノ専門醫學科ト提携シテ益々長足ノ進歩ヲ爲セリ我國ニ於テモ今ヤ斯科ヲ學ブ者續出シ歐米各國ノ諸先輩ト比肩スルノ日將ニ近クニ在ラントス

第一章 喉頭解剖及生理

第一項 喉頭解剖上構造

喉頭ハ氣管ニ連リテ氣息ノ通路トナリ又發音ノ器ニシテ其位置ハ

喉頭ノ位置

○喉頭解剖上構造

結喉

頸部ノ正中ヲ占メ男子ニ於テハ第五頸椎體ノ上縁ヨリ第七頸椎體下縁ノ間ニ在リ女子ニ於テハ稍々高ク第四及第五頸椎ノ椎間軟骨上縁ヨリ第七頸椎體上縁ノ間ニ位シ筋及彈力性帶ニヨリテ上ハ舌骨ニ繋リ下ハ氣管ニ聯ル後面ハ咽頭下部ノ前壁ヲ成シ更ニ其兩側ハ咽頭收縮筋ノ附着點トナル此部ノ上方ハ時トシテハ甲状軟骨上角若シクハ舌骨大角ノ著シク發育スルガ爲ニ長ク外後方ニ突出スルコトアリ斯ルモノニ在リテハ喉頭昇降シ(嚥下運動)或ハ喉頭ヲ後方ニ押壓スルニ際シテ椎骨ト軋スルガ故ニ一種ノ磨擦音ヲ發スルコトアリテ神經家ハ之ヲ以テ動モスレバ骨折或ハ他ノ喉頭病疾ニアラザルヤノ疑ヲ起シテ醫師ヲ勞スルコト間々之アリ

喉部ハ皮膚ノ直下ニ在ルヲ以テ直チニ目視シ且ツ觸知スルコトヲ得ベシ成年ノ男子ニ在リテハ其中央殊ニ著シク突起シテ所謂アダム氏葉又喉頭結節乃チ結喉ヲ形成ス是レ則チ甲状軟骨ノ左右兩板相集合シテ角度ヲ爲スニ因ルナリ此突起ハ春機發動ノ期ニ至リ始

甲状腺

メテ著シク現出スルモノトス但シ小兒及女子若シクハ老人ニ在テハ圓形ヲ呈ハス喉頭結節上部ノ中央ハ下方ニ向テ稍々凹陷ス乃チ上甲状軟骨截痕ナリ觸診スル時ハ容易ク認知スルヲ得ベシ又下部ハ圓錐靱帶ノ存スル所ニシテ僅ニ上方ニ向テ弓形ヲ呈スル淺窩アリ更ニ其下方ニハ環狀軟骨在リテ輕度ノ隆起ヲ示ス喉頭側面ノ下方ハ甲状腺側葉ヲ以テ掩フ而シテ其左右兩葉ハ氣管上端ノ前方ニ於テ相合シテ甲状腺峽ト名クル狹小ノ一片トナル但シ左右ノ側葉ハ必ズシモ同大ナラズ其尖端ハ鈍圓トナリテ時トシテハ甲状軟骨上角ノ基底ニ達スルコトアリ腺ノ表面ハ凹凸ニシテ平滑ナラズ又峽ハ左方若シクハ右方ニ偏倚スルコト屢々之アリ(左方ニ偏スルヲ多シトス)又此部ヨリ上方ニ向テ圓錐形ノ小腺葉ヲ生ズルコトアリ之ヲ甲状腺ノ錐體狀突起ト云フ此突起ハ時トシテハ頗ル長クシテ舌骨ニ達シ結締織ヲ以テ之ニ聯ルコトアリ斯ル者ニアリテハ喉頭ノ昇降ニ從テ甲状腺モ亦共ニ運動スルヲ見ル

副甲狀腺

錐體狀突起ハ時トシテハ峽トノ接際ニ於テ恰モ括斷セラレテ分離シ全ク孤立スルコトアリ之ヲ副甲狀腺ト云フ其他喉頭ノ側方ニハ貴要ナル大血管及神經通過ス其主ナル者ハ内頸動靜脈及迷走神經ナリ

喉頭ノ大小

喉頭ハ各人其大小ヲ異ニスト雖モ通例男子ニ在テハ女子ニ比スレバ稍々大ナリ則チ女子ノ喉頭ハ之ヲ男子ノ者ニ比スレバ大約二ト三トノ比例ヲナス又喉頭軟骨ハ女子ニ在テハ男子ニ比スレバ其質薄シ然レドモルシユカ氏ノ説ニ據レハ春機發動期ニ至ルマデハ男女共ニ異同ナシト云フ

喉頭軟骨ノ發育

喉頭軟骨ノ發育ハ大人ニ於テ左右不等ヲ爲スコト屢々之アリ例之ハ甲狀軟骨ノ如キハ其一板喉頭結節ノ部ニ於テ他ノ一板ヨリ甚タシク突起スルコトアリ又時トシテハ甲狀軟骨著シク一側ニ偏倚シ其半部甚タシク突隆シ之ニ反シテ他ノ半部ハ彎屈縮盛シテ恰モ外力ヲ以テ強壓陷沒セラレタルガ如キ觀ヲナス者アリ此ノ如キ發育

喉頭軟骨ノ數

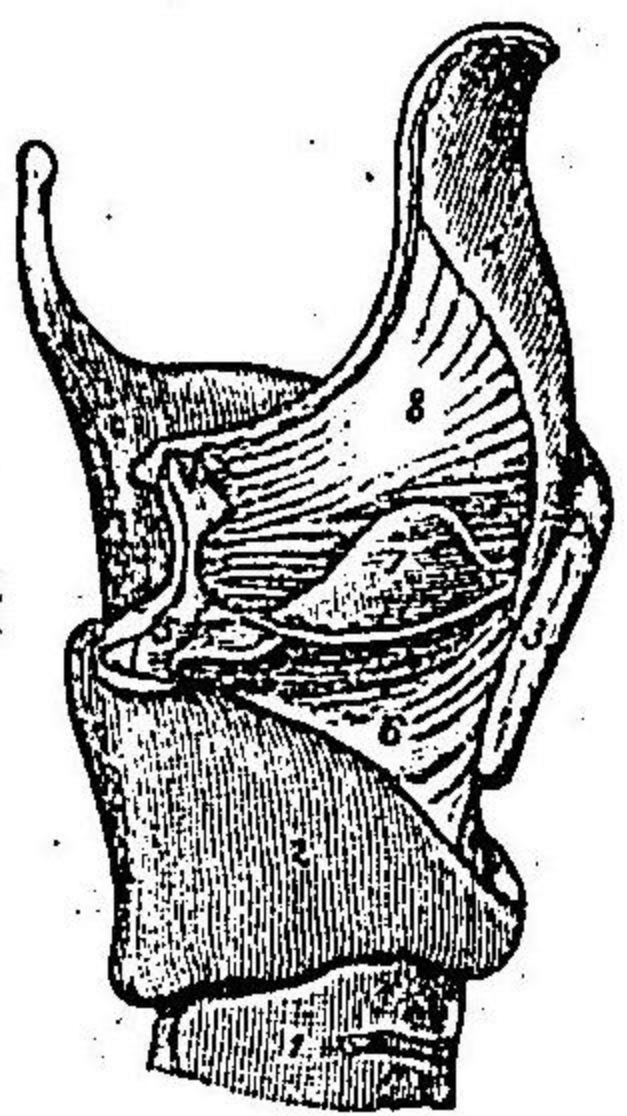
異狀ヲナス者ハ雷ニ外觀ノ美ヲ損フノミナラズ其甚ダシキニ至テハ喉頭内部ノ構造モ亦變異シテ彎屈側ノ梨子狀竇ハ狹小トナリ披裂會厭皺襞ハ固有ノ凹彎ヲ失フテ平坦トナリ會厭軟骨トノ接際ハ一部消失シモルガニ一氏竇ノ側壁ハ喉頭腔内ニ向テ翻轉膨出シ竇ハ變ジテ僅ニ淺窩ヲ遺シ眞聲帶ハ僅ニ喉頭ノ側壁ヨリ隆起スルカ或ハ全ク缺如シ但シ假聲帶ハ頗ル著シク挺起ス斯ノ如キ異狀ハ殊ニ男子ニ於テ屢々見ル所ナリ

喉頭ハ九個ノ軟骨ト之ヲ結合スル靱帶及筋肉ヨリ構成シ其内面ハ粘膜炎ヲ以テ被フ而シテ軟骨ハ無對ノ者三雙對ノ者三ナリ則チ甲ハ甲狀軟骨環狀軟骨會厭軟骨ニシテ乙ハ披裂軟骨ウリスベルグ氏軟骨即チ楔狀軟骨及サントリニ一氏軟骨即チ小角軟骨ナリ就中ウリスベルグ氏軟骨及サントリニ一氏軟骨ハ其形狀及ビ發育共常ニ一様ナラズ又諸軟骨ノ質ハ一ハ硝子樣軟骨質ニシテ他ハ纖維樣軟骨質ナリ即チ甲狀軟骨環狀軟骨披裂軟骨聲帶突起ヲ除クハ硝子樣軟

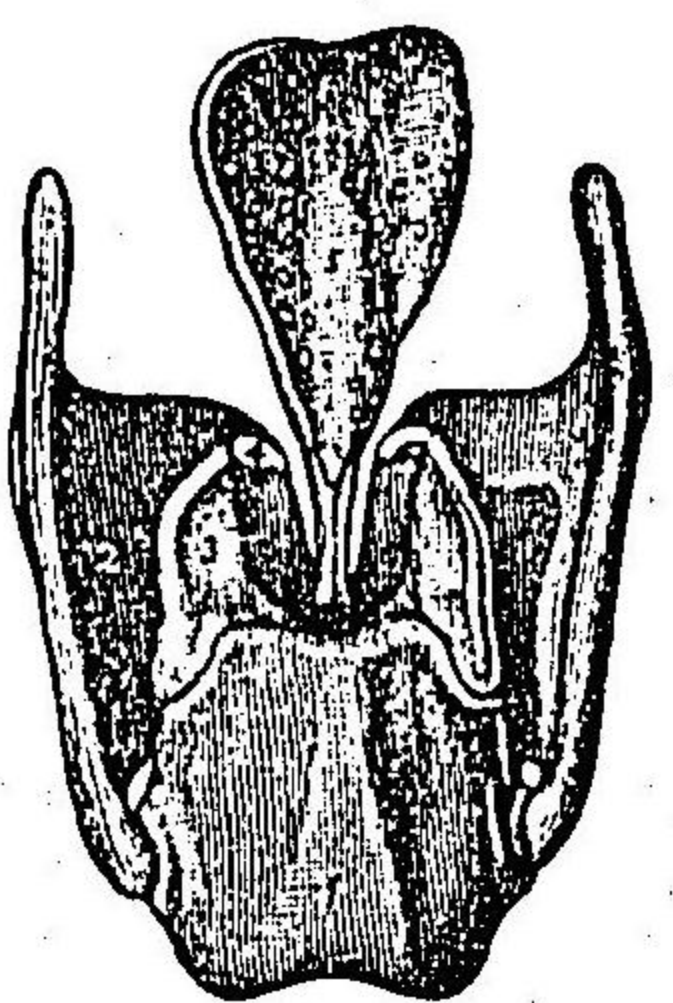
骨ニシテ會厭軟骨楔狀軟骨小角軟骨ハ纖維様軟骨ニ屬ス而シテ甲
ハ透明ニシテ青白色ヲ帶ヒ乙ハ較々柔軟ニシテ淡黄色ヲナス(第一
圖及第二圖ヲ見ヨ)

環狀軟骨

圖一第



圖二第



ノ間ニ嵌入シ喉頭ノ大分ヲ占ム而シテ其厚サハ凡ソ六密迷ナリ又

環狀軟骨ハ喉頭ノ最下ニ在テ

全部ヲ支持ス故ニルードウツヒ
氏ハ之ニ基礎軟骨 Grundknorpelノ
名ヲ命ジタリ此軟骨ハ薄キ輪環
ニシテ前方ハ低ク後方ハ高シ其
低キ前部ヲ環狀軟骨弓ト云フ全
輪ノ四分一ヲナシ後方ニ赴クニ
從ツテ急ニ其ノ高サヲ増ス之レ
ヲ後部又環狀軟骨板ト云フ全輪
ノ四分ノ三ヲナシ甲狀軟骨後縁

環狀披裂關節

環狀甲狀關節

甲狀軟骨

軟骨ノ角度

其上縁ノ兩隅ニハ後外方ニ向テ傾斜セル小關節面ヲ有シ披裂軟骨
ト關節ヲ作ル板ノ外側大約其高サノ中央ニ方テ關節面ヲ有スル乳
頭狀ノ突起アリ此關節面ハ圓形ノ小窩ニシテ斜ニ上方ニ向ヒ甲狀
軟骨ノ下角ニ接ス板ノ後面ハ中央ニ縱行ノ隆起アリテ左右二面ヲ
別ツ則チ後環狀披裂筋ノ起始點ナリ弓ノ上縁ト甲狀軟骨下縁トノ
間ニハ自ラ彈力纖維ヨリ成レル靱帶即チ環狀甲狀靱帶アリ其他環
狀軟骨ノ下縁ハ第一氣管輪ノ上ニ在リテ稍々之ヨリ隆起ス
環狀軟骨ハ喉頭ノ基礎タルコト既ニ述ブルガ如シ而シテ喉頭ニ固
有ノ漏斗形ヲ成サシムル者ハ左ノ如シ

甲狀軟骨ハ諸軟骨中最大ノ硝子様軟骨ニシテ通例左右均一ナル兩

板相結合シテ成リ喉頭ノ大分部則チ前壁及側壁ヲ構成ス幼者ニ在
テハ比較的小ニシテ頗ル彈力性ニ富メドモ長ズルニ從テ漸ク堅硬
トナリ春期發動ノ期ニ至レバ男子ニ在テハ左右集合スル處大約九
十度ノ角度ヲナシ女子ニ在リテハ百二十度ヲ有ス而シテ其角度ノ

上甲状截痕
甲状軟骨結節

斜線

甲状軟骨結節ノ
下部ニ於ケル小
圓孔

銳鈍ヲ異ニシ或ハ稍々圓形ヲナスニ從テ頸前ノ外形ヲ異ニス則チ男子ノ喉頭ハ銳ク屹立シ女子及小兒ニ在テハ頗ル圓形ニ堆起スルガ如シ甲状軟骨板上縁ハ波狀ノ彎曲ヲナシテ恰モS字形ヲ現ハス就中後部ハ凹彎シ前部ハ凸隆ス而シテ兩板ノ凸峰相對スル間ニハ嘴狀ノ截痕アリ茲ニ中甲状舌骨靱帶ヲ着ス各板上縁ハ後方ニ至ルニ從テ漸ク上方ニ向ヒ各々一個ノ隆起トナル之ヲ甲状軟骨結節ト云フ此結節ヨリ板ノ外面ニ沿フテ斜ニ前下方ニ亘レル粗縷線アリ之ヲ斜線ト云フ筋肉ノ起始及抵止スル處トス又往々結節ノ下部ニ小圓孔ヲ存スル者アリ多クハ上喉頭動脈ノ通路トナル其他下縁ニハ左右各々一個ノ粗縷部ヲ呈ス則チ環狀甲状筋ノ附着點ニシテ之ヲ下縁突起ト云フ各板ノ後縁ハ上下ニ向テ延長シ上角及下角ヲ成形ス而シテ上角ハ一ニ大角ト云フ細長ニシテ稍々内方ニ傾斜シ下角ハ把柄狀ノ突起トナル上角ニ比スレバ短且ツ大ニシテ稍々前方ニ傾ク而シテ其尖端ノ内面ニハ關節面アリテ環狀軟骨板部ノ

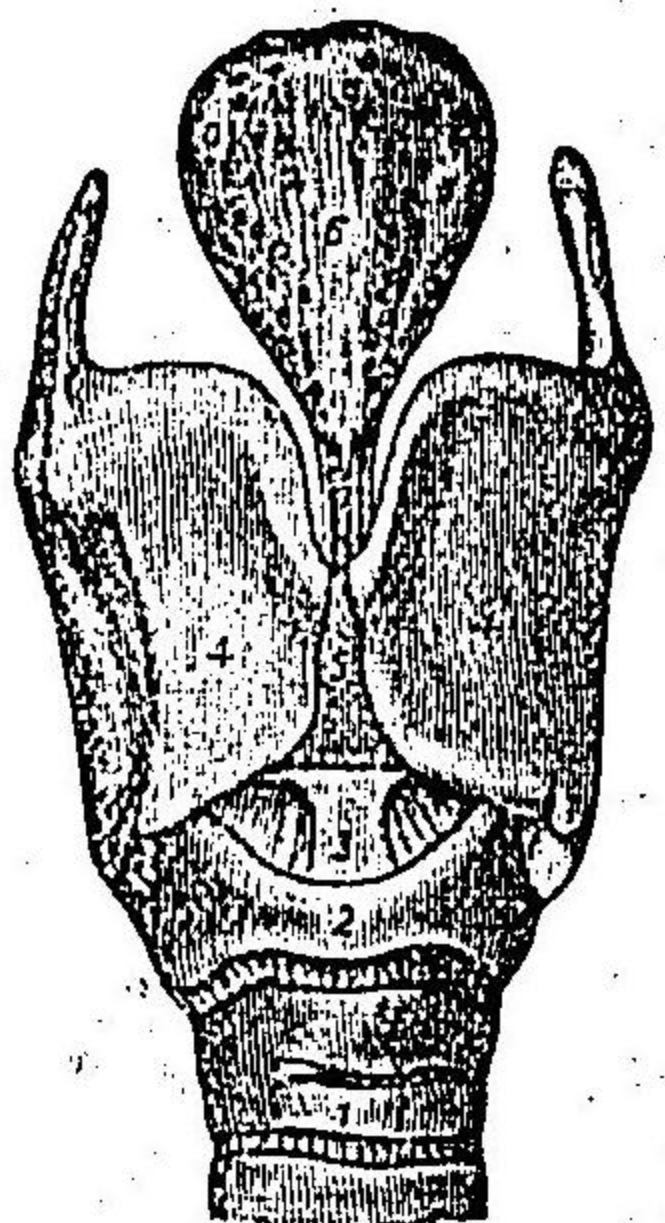
會厭軟骨

會厭結節

側面ト關節ヲナス甲状軟骨ノ前下方ニ傾キ又前後ニ移動スルコトヲ得ルハ蓋シ此關節ノ機能ニ依ルナリ又大角ニハ側甲状舌骨靱帶ヲ附着シ舌骨ト甲状軟骨トヲ連繫ス其他甲状軟骨下縁ハ既ニ上條ニ述ブルガ如ク環狀軟骨ト結合ス

會厭軟骨

第三圖



ニ或ハ西洋牌骨畫ナル心臟形ニシテ其尖端下ニ向フガ如キアリ或ハ木葉狀ニシテ葉柄下ニ向フアリ或ハ縦ニ延伸シタル鞍狀ヲナスアリ或ハ舌狀ニシテ長溝ヲ有スルアリ而シテ其下端即チ莖ハ一ニ根部ト云フ甲状會厭靱帶ニヨリテ甲状截痕ニ連ナリ爰ニ喉頭腔内ニ突出セル隆起ヲナス之ヲ會厭結節ト云フ乃チ喉頭鏡検査ヲ行フニ方テ圓形ヲ見ル者是ナリ會厭軟骨ノ上縁ハ多クハ薄キ邊縁ヲナスト雖トモ亦時トシテハ少

シク前方ニ捲轉シ或ハ稀ニハ肥厚シテ大小不定ノ圓形結節狀ヲナスコトアリ又其縁ノ中央ニ方テ往々淺キ截痕ヲ現スカ或ハ劫テ圓形ノ尖頭ヲ有スルコト間々之アリ生體ニ在テハ會厭軟骨ハ喉頭腔ニ對シテ種々ノ傾斜ヲナスモノニシテ大人ニ在テハ通例殆ト鉛直ヲナシ小兒ニ在リテハ頗ル斜ニシテ殆ト地平ヲナシ後方ハ前方ヨリ低シ而シテ深呼吸及發音ノ際ニハ其傾斜ノ角度ヲ稍々變易ス會厭軟骨ノ上面ニハ縱ニ隆起シテ横ニ陷凹ス下面ハ全ク之ト反對ノ彎曲ヲナスナリ

披裂軟骨

披裂軟骨 又一ニ三稜軟骨ハ硝子様軟骨ニシテ喉頭軟骨中最モ運動シ易シ呼吸及發聲ニ方テハ頗ル重要ノ運動ヲ營ムモノナリ其所ニ在ハ喉頭ノ後部ニシテ環狀軟骨ト鞍狀關節ヲ以テ連結ス形狀ハ内方ニ微曲セル三角錐狀ニシテ後面前内側面及前外側面ノ三面ヲ別ツ而シテ後面ハ陷凹シ前内側面ハ左右相對シ其尖端ハ扁平ニシテ内後方ニ向テ彎曲シ基底ハ内方ニ向ヒ二個ノ突起ヲ有ス其一ヲ筋

筋肉突起

聲帶突起

突起トナス則チ前外面ト後面トノ接合セル一角ノ基部増大シ環狀軟骨縁ヨリ挺出スル處ニシテ茲ニ側環狀披裂筋附着ス他ノ一ハ即チ聲帶突起ニシテ前方ニ向ヒ左右ヨリ壓扁セラル、ガ如クシテ稍々尖銳ナリ而シテ此突起ノ質ハ纖維様軟骨質ヨリ成リテ彈力性眞聲帶附着ス此部ハ喉頭鏡検査ヲ行フニ方テ粘膜ヲ透徹シテ黃色ヲ現ハシ以テ聲帶ノ軟骨部ト靱帶部トヲシテ多少識別シ易カラシムルモノナリ

小角軟骨

小角軟骨 (サントリニ一氏軟骨) ハ後内方ニ屈曲セル圓錐狀ノ軟骨ニシテ披裂軟骨ノ上端ニ在リ

楔狀軟骨

楔狀軟骨 (ウリスベルグ氏軟骨) ハ披裂會厭襞則チ喉頭腔上口ノ側縁ニ在リ其上端ハ則チサントリニ一氏軟骨ヨリ成レル隆起ノ近傍ニ達ス其他種子軟骨ト稱フル者ハ最小ニシテ彈力帶ヲ以テ披裂軟骨上端ノ外側ニ附着スルコト多シ但シ此軟骨ハ各人必ズシモ之ヲ有スルニアラズ又時トシテ左右聲帶ノ前端ニ於テ此軟骨ノ存スル

楔狀軟骨ニ就テ
ベ、フレンケル
氏ノ説

ヲ見ルコトアリ別ニ之ヲ前種子軟骨ト名ク

楔狀軟骨ハウリスベルグ氏ノ發見スル所ニアラザル故ニ氏ノ名ヲ冒
スルハ蓋シ誤ナリ(B. Frankel. Archiv für Laryngologie und Rhinologie II B. 2H. XXVI.)而
シテ此軟骨ニ就テ創メテ記載セシムルガニ一氏 Morgani ニミテ氏ハ
Adversaria anatomica ト名クル書中ニ披裂軟骨腺ナル者ニ就テ此軟骨ノ存在
スルコトヲ記セリ次テ和蘭ノ解剖學者ニシテ開業醫タリシヘーター
カンムベル氏 Peter Camper ハ千七百七十年ニ猩々及人ノ喉頭中ニ此軟骨
ヲ發見シ且ツ之ヲ詳記セリ然ルニウリスベルグ氏ハ爾後十年ヲ經テ
之レガ記載ヲナシタリ蓋シ今日ニ至ルモ尙ホ此軟骨ニ氏ノ名ヲ冒ス
ル所以ヲ追究スルニ左ノ件ニ基クモノ、如シ乃チ(一)楔狀軟骨ハ解剖
上他ノ者ニ比シテ發見セラルルコト遅カシシ(二)千七百七十年ヨリ千
八百年ニ至ル三十年間ニ於ケル解剖書中此等ノ歴史ニ就テ記載セシ
者ナカリシ(三)千七百八十六年ヨリ千七百九十一年、マイエル氏 J. C. A. Mayer
ハ Beschreibung des ganzen menschlichen Körpers ナル書ヲ著シ其第三百三十三頁ニ「楔狀
軟骨ハウリスベルグ氏ノ發見スル所ニシテカンムベル氏其存在ヲ確
證シタリト誤説セリ(四)ヨハン、フリード、ヴィッヒ、ブランツト氏 Johann Fried.
Brandt 千八百十六年ヨリ同二十六年ニ至ル十年間ノ Berliner-Dissertation 報告
中ニブツシユ氏 Busch ノ論文ヲ誤載シテカンムベル氏ハ單ニ獸類ニ就

喉頭軟骨ノ結
合

テ楔狀軟骨ヲ發見セシモウリスベルグ氏ハ人身ニ於テ創メテ之ヲ發
見セリト記ルシタルニヨリ遂ニ世人ヲシテ此誤ヲ傳ヘシムルニ至レ
リ然ルニ千八百四十五年ニ至リ始メテチエ、マイエル氏 C. Mayer (Academie
der Wissenschaften) ト名クル書中ニ楔狀軟骨ハウリスベルグ氏ノ發見ニア
ラズカンムベル氏已ニ之ヲ發見シテ詳説セル所タルヲ公世セリ是ヲ
以テ此軟骨ニウリスベルグ氏ノ名ヲ冒スルハ非ナリ宜シク改メテカ
ンムベル氏軟骨トナスカ或ハ單ニ楔狀軟骨ト稱スベシ

喉頭ノ各軟骨ハ一ハ互ニ結合シ一ハ靱帶ヲ以テ近隣ノ諸器則チ舌
舌骨及氣管ニ聯繫ス而シテ喉頭ニ於テ他ト異ナルハ粘膜ト軟骨ト
ノ間ニ一層ノ彈力纖維性組織アリテ之ヲ結合ス名ケテ聯結層ト云
フ此層ハ或ハ纖弱ニ或ハ強厚ニ或ハ狹小ニ或ハ緩鬆ニシテ常ニ一
定ナラズ又一部肥厚シテ靱帶様トナルコト問々之アリ而シテ喉頭
鏡検査ヲ行フニ方テ殊ニ緊要ナルハ舌會厭靱帶ナリ此靱帶ハ舌根
ノ筋中ニ於テ所謂中隔 mediane Septum トナリテ起リ中線部ニ於テ會
厭軟骨ノ前面ニ附着ス之ニ次デ緊要ナルハ上下甲狀披裂靱帶トス

上甲狀披裂靱帶(假聲帶)

下甲狀披裂靱帶(聲帶)

聲帶ノ橫断面

上甲狀披裂靱帶ハ各側ノ粘膜皺襞中ニ在リテ假聲帶ヲ成形シ後方ニ向フテ開張セル角度ヲナシ前庭ハ會厭軟骨附着部ノ直上ニ於テ甲狀軟骨ニ起リ其纖維ハ稍々許多ナレドモ互ニ連續性ノ結合ヲナサズ後方披裂軟骨前縁ノ部ニ至テ消失ス又下甲狀披裂靱帶ハ喉頭ノ機能上最要ノ者ニシテ聲帶ト稱スル者即チ是ナリ而シテ左右ノ聲帶ハ所謂前連合ヲ成形シ共ニ密着シテ甲狀軟骨ノ殆ト中部ニ起ル其纖維ハ前庭ニ於テノミ集合シテ一條トナレドモ乍チ分散シテ數條ノ小束トナル其一二束ハ聲帶ノ銳縁ニ在リテ聲帶突起ノ尖端ニ附着シ他ノ小束ハ聲帶ノ上面ニ於テモルガニ一氏竇後端ノ直後ニ停止シ更ニ自餘ノ小束ハ聲帶ノ下面ニ在リテ聲帶突起下ニ於テ披裂軟骨ノ内面若クハ環狀軟骨板ノ前面ニ終ル但シ聲帶實質ノ大部分ハ内甲狀披裂筋ノ筋纖維ト彈力纖維トヨリナル之レガ横断面ヲ檢スル時ハ三角形即チプリスマ狀ヲナスヲ見ルベシ比三角ノ二面ハ遊離シテ一ハ上方假聲帶ニ對シ一ハ下方内方ニ向ヒ在下氣管ノ

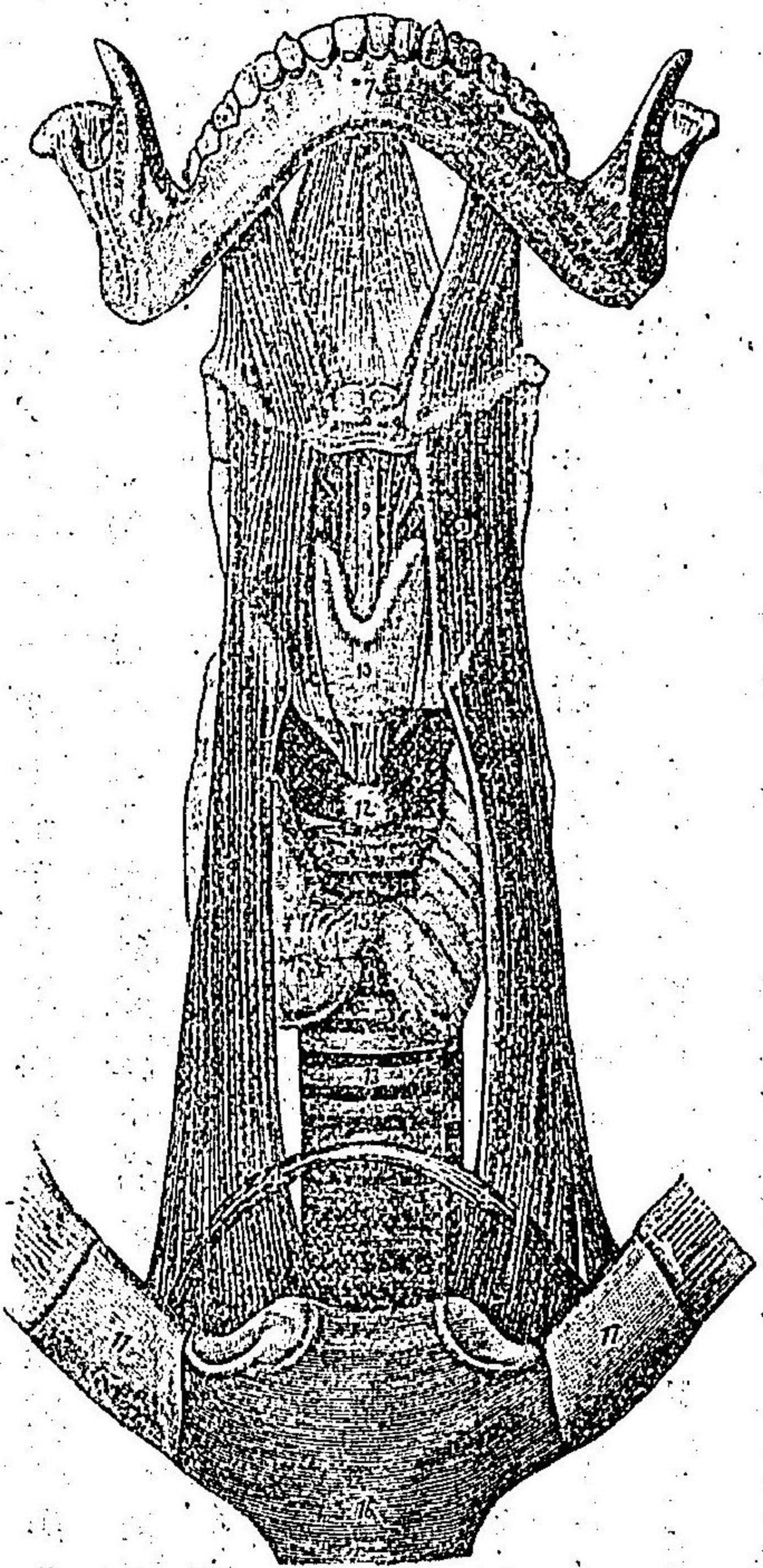
中舌會厭靱帶
側舌會厭靱帶
舌會厭窩

喉頭ノ諸筋

對壁ニ面ス又他ノ一面即チ三角形ノ基底ハ外側ニシテ附着面ヲナスナリ而シテ此三角ノ頂尖ニ屬スル部ハ所謂聲帶縁トナリ左右相對シテ聲門ヲ構成ス此眞聲帶ノ外更ニ靱帶様ノ者アリ畢竟粘膜ノ疊積シテ成レル皺襞ナリ則チ舌根ヨリ會厭軟骨ノ上面ニ至ル間ノ粘膜ニハ既ニ上條ニ述ブルガ如キ中心皺襞アリテ内ニ中舌會厭靱帶ヲ藏ム又此皺襞ノ兩側ニハ更ニ側舌會厭靱帶アリテ皺襞ヲ作り各襞ノ間ニハ二個ノ淺窩ヲ生ズ之ヲ舌會厭窩ト名ク又咽頭ノ粘膜ハ甲狀軟骨ノ内面ニ沿フテ大ニ下降シ翻轉シテ再ビ上昇シ以テ披裂會厭皺襞即チ披裂會厭靱帶ヲ成形ス而シテ粘膜ノ下降シテ更ニ上昇スル處ハ一ノ凹窩ヲナス之ヲ梨子狀窩ト名ク

喉頭ノ諸筋ハ其生理的ノ關係ニ依リ大別シテ二種トナス則チ第一種ハ喉頭全體ヲ運動セシムル者ニシテ之ヲ拮上シ或ハ拮下シ若クハ固定セシムル者はナリ第二種ハ喉頭諸軟骨相互ノ位置ヲ變易シ以テ喉頭ノ形狀ト其内部ニ存スル彈力性部殊ニ聲帶ノ弛張ヲ營爲

第 四 圖



スルモノナリ就中第二種ニ屬スル筋ハ一ハ固有ノ呼吸筋ニシテ外
氣ノ肺中ニ入ルノ通路ヲ開キ以テ呼氣及ビ吸氣ノ出入ヲ得セシメ
一ハ發聲ニ必要ナル聲門ノ開閉ヲ司ドリ或ハ全ク聲門ヲ閉鎖シテ
肺中ノ空氣ニ非常ノ強壓ヲ受ケシムルノ用ヲナス更ニ他ノ一部ハ
聲音ヲ發スルニ必要ナル聲帶ノ緊張ヲ營ム者ナリ而シテ喉頭ノ昇

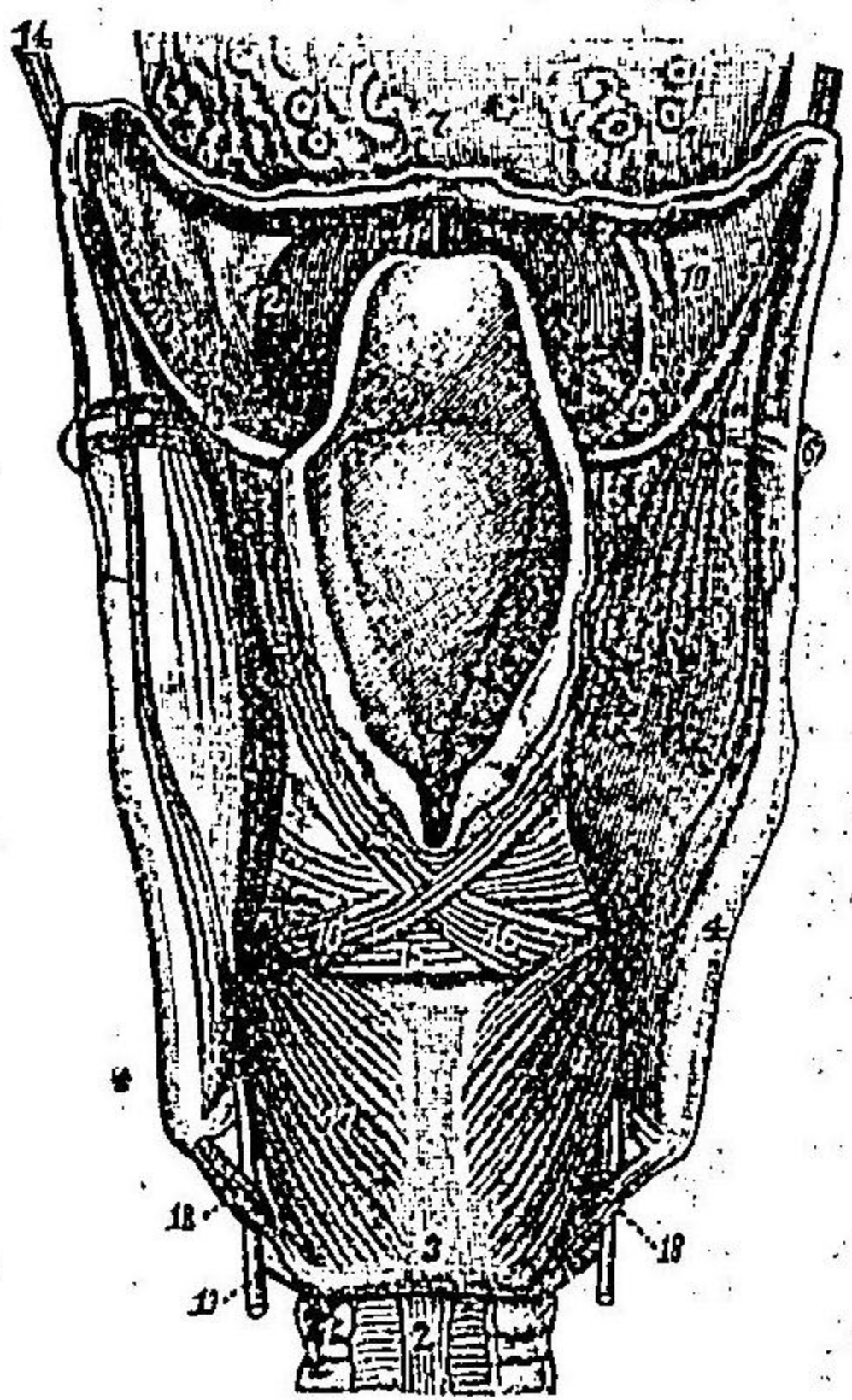
胸骨甲狀筋
舌骨甲狀筋
咽頭喉頭筋

聲門開張筋

降或ハ其固定ヲ司トル筋中ニ算入スベキ者左ノ如シ即チ胸骨甲狀
筋ハ喉頭ヲ拏下シ舌骨甲狀筋ハ喉頭全體ヲ提舉シ咽頭喉頭筋ハ喉
頭ノ全體若クハ甲狀軟骨及ビ環狀軟骨ノ一ヲ後方脊椎ニ向フテ固
定ス就中胸骨甲狀筋ハ若干ノ長纖維ヲ以テ甲狀軟骨ノ最後部環狀
甲狀關節ノ後方ニ附着シテ此軟骨ノ前部ヲ舉上シ聲帶ヲシテ弛緩
セシムルノ作用ヲ營ム

聲門ノ開張ヲ司トル筋即チ外轉作用ヲナス者ハ後環狀披裂筋ニシ
テ其作用ハ生命ニ關係

第 五 圖



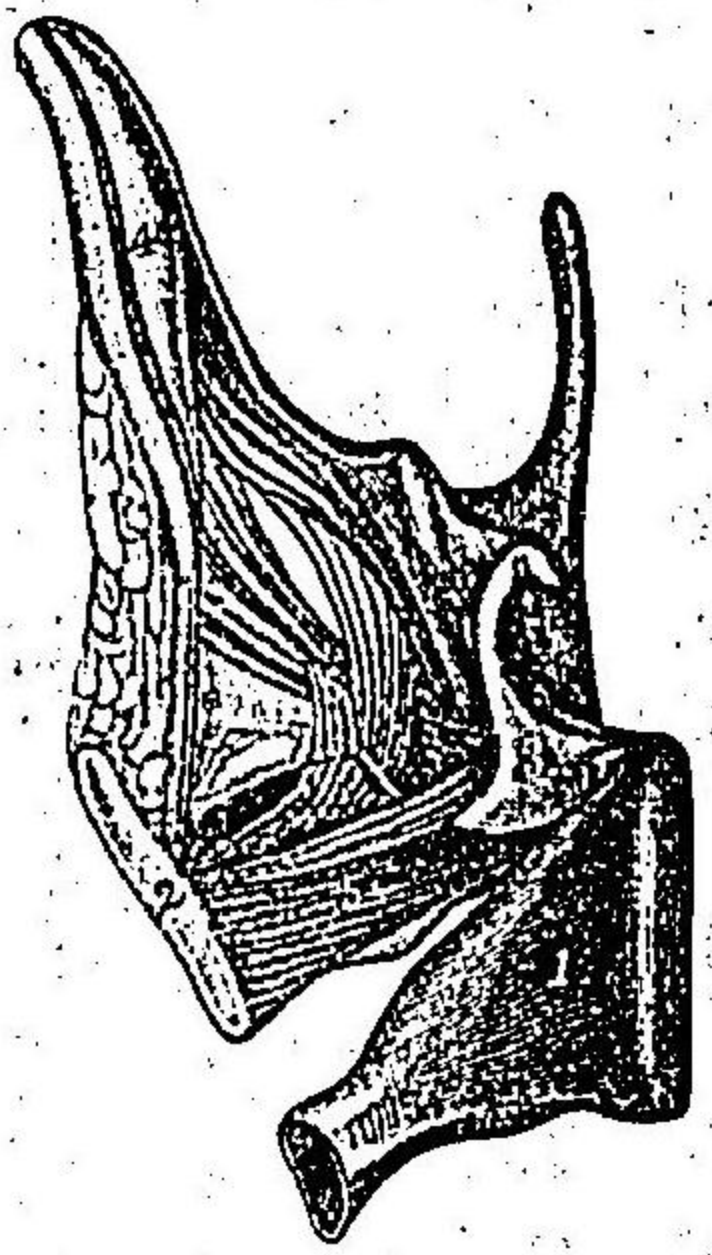
スルコト頗ル大ナリ即
チ此筋ハ環狀軟骨板ノ
後面下半部ニ於ケル兩
側ニ起リ其纖維稍々收
束シテ斜メニ上外方ニ
向ヒ披裂軟骨筋突起ノ

聲門閉鎖筋

後縁ニ抵止シ其收縮ニ因テ披裂軟骨ヲ後内方ニ向テ固定シ旁ヲ其長軸ニ沿フテ廻旋セシメ聲帶突起ヲ外轉シ以テ聲門ヲ開張セシム但シ此筋ノ外側ニ存スル微弱ナル纖維ハ斜行スルコト少ナキガ故ニ披裂軟骨ヲ外下方ニ牽引スルコトナシ

以上諸筋ニ桔槔ノ聲門ノ閉鎖ヲ營ム筋ニ内轉作用ヲナス者頗ル多シ就中側環狀披裂筋ハ環狀軟骨側部ノ上縁ニ起リ後上方ニ向テ披裂軟骨筋突起ノ側面ニ抵止ス此筋ハ披裂軟骨ヲ外下方ニ牽キ以テ聲帶突起ノ尖端ヲ内方ニ廻轉セシメ聲門殊ニ其鞞帶部ヲ閉鎖ス側環狀披裂筋ノ作用ヲ扶クルニ數種ノ筋アリ一ハ橫披裂筋ニシテ一側ノ披裂軟骨後面ヨリ他側ノ同部ニ亘リ軟骨ノ後面ニ於ケル陷凹ヲ充塞シテ地平ニ展張ス此筋收縮スルトキハ兩軟骨ヲ相近接セシメ殊ニ聲門ノ軟骨部ヲ接着セシムニハ甲狀披裂筋即チ固有ノ聲帶筋ニシテ二部ヨリ成ル故ニ解剖家中或ハ之ヲ内外ノ二筋ト做ス者アリ此筋ハ甲狀軟骨内面ノ下半部ヨリ起リ其軟骨板ト殆ト同一

第六圖



ノ角度ヲ以テ後方ニ向ヒ披裂軟骨ノ前外面及ビ聲帶突起ニ抵止ス此筋收縮スルトキハ聲帶ノ兩附着點間ヲ近接セシムルガ故ニ其緩急ニ應ジテ聲帶ヲ弛緩セシメ聲調ノ高低ニ必要ナル硬度及ビ弾力性ヲ得セシメ且ツ振動ヲ變

環狀甲狀筋

換セシム之ヲ換言スレバ此筋ハ聲帶全部ノ位置形狀ヲ整へ併セテ其實質ニ緊要ナル緊張及ヒ弾力性ヲ賦與スルノ作用ヲナスナリ又此筋收縮スルニ方テハ殆ト兩聲帶ヲシテ相接着スルニ至ラシム其他此筋ノ外邊ニ存スル少許ノ纖維ハ散ジテ假聲帶中ニ入り眞假二種ノ聲帶ヲシテ互ニ近接スルコトヲ得セシム環狀甲狀筋ハ環狀軟骨弓ノ前面ニ起リ斜ニ上方ニ向ヒ甲狀軟骨ノ下縁及ビ下角ニ抵止ス此筋ノ作用ニ就テハ諸説一定ナラズ則チヒルトル、ヘンレー、チユルク、マツケンジー、ステ、エルク、シユ、ロ、エ、テル氏等ハ此筋ハ環狀軟骨

ヲ固定シ甲狀軟骨ヲ前下方ニ牽引スル者ト做シマーゲンデー、ロン
ゲット、エレンフ、ハー、シエック、ヒ、シユミット、氏等及ビ殊ニフオン、ホ
ベル氏ハ試験的調査ニ依テ環狀甲狀筋ノ收縮ハ甲狀軟骨ヲ固定シ
環狀軟骨ノ前部ヲ舉上シ其後部ヲ下後方ニ轉移スル者ナリト云ヘ
リ

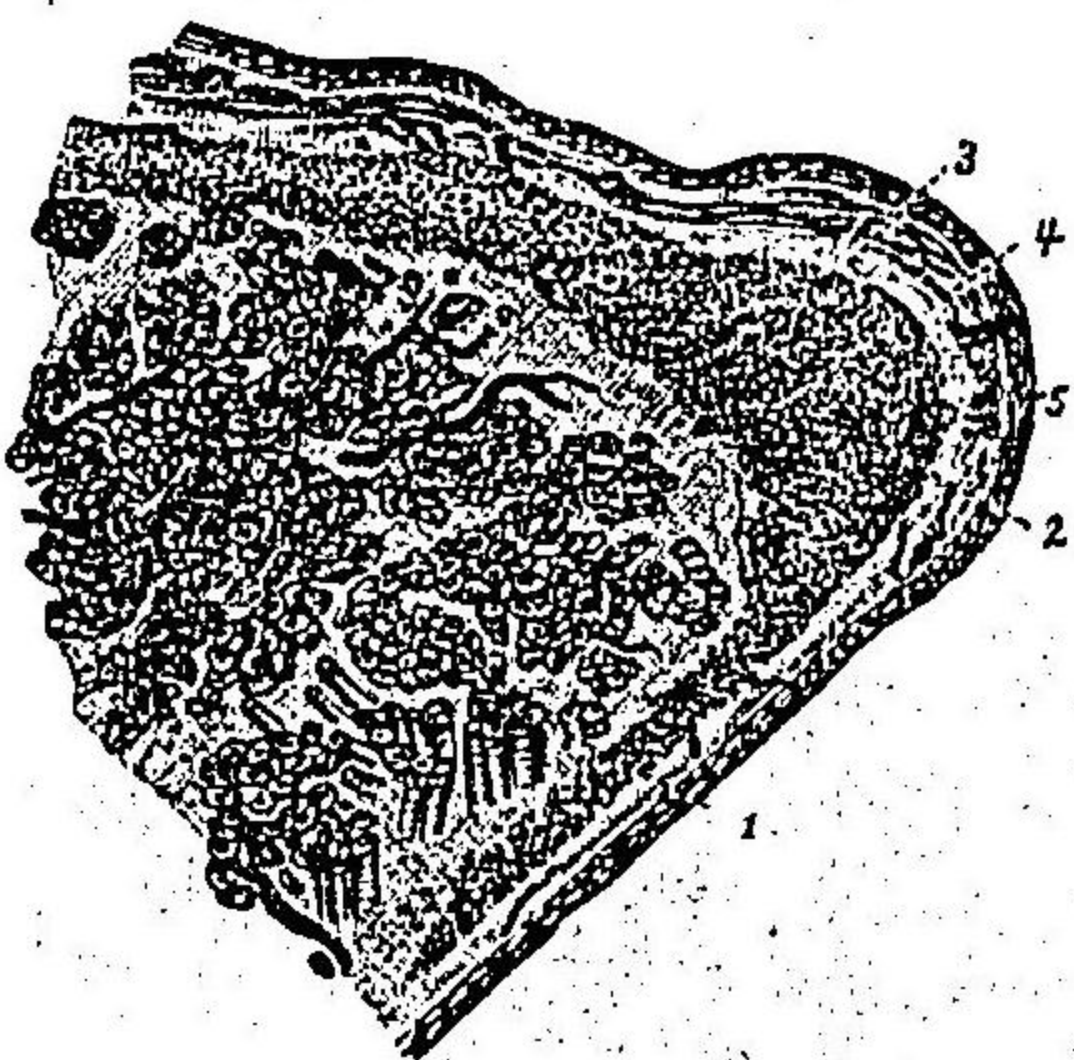
以上二説ニ就テハ尙ホ未ダ是非ヲ判ズルコト能ハズト雖トモ此筋
ノ作用ニ依テ聲帯ハ牽引セラレテ緊張シ且ツ聲門狹小トナルコト
亦疑ヲ容レザルナリ

喉頭ノ粘膜

喉頭ノ粘膜ハ口腔及ビ咽頭ノ粘膜ニ連ル者ニシテ顯微鏡検査
ニ依ルニ部位ノ異ナルニ從テ性質一様ナラズ是レ諸般ノ病理的變
狀ヲ察スルニ於テ頗ル肝要ナリ即チ喉頭腔前壁ノ粘膜ハ其下層組
織ニ附着スルコト緊密ニシテ容易ニ移動セシメ難ク又之ヲ撮取ス
ルモ皺襞ヲ生ゼシムルコト能ハズ環狀軟骨前部ノ内面ニ於ケルモ
亦之ニ同ジ之ニ反シテ披裂軟骨間即チ喉頭後壁ノ粘膜ハ緩疎ニシ

扁平及ビ頭毛
上皮

第七圖



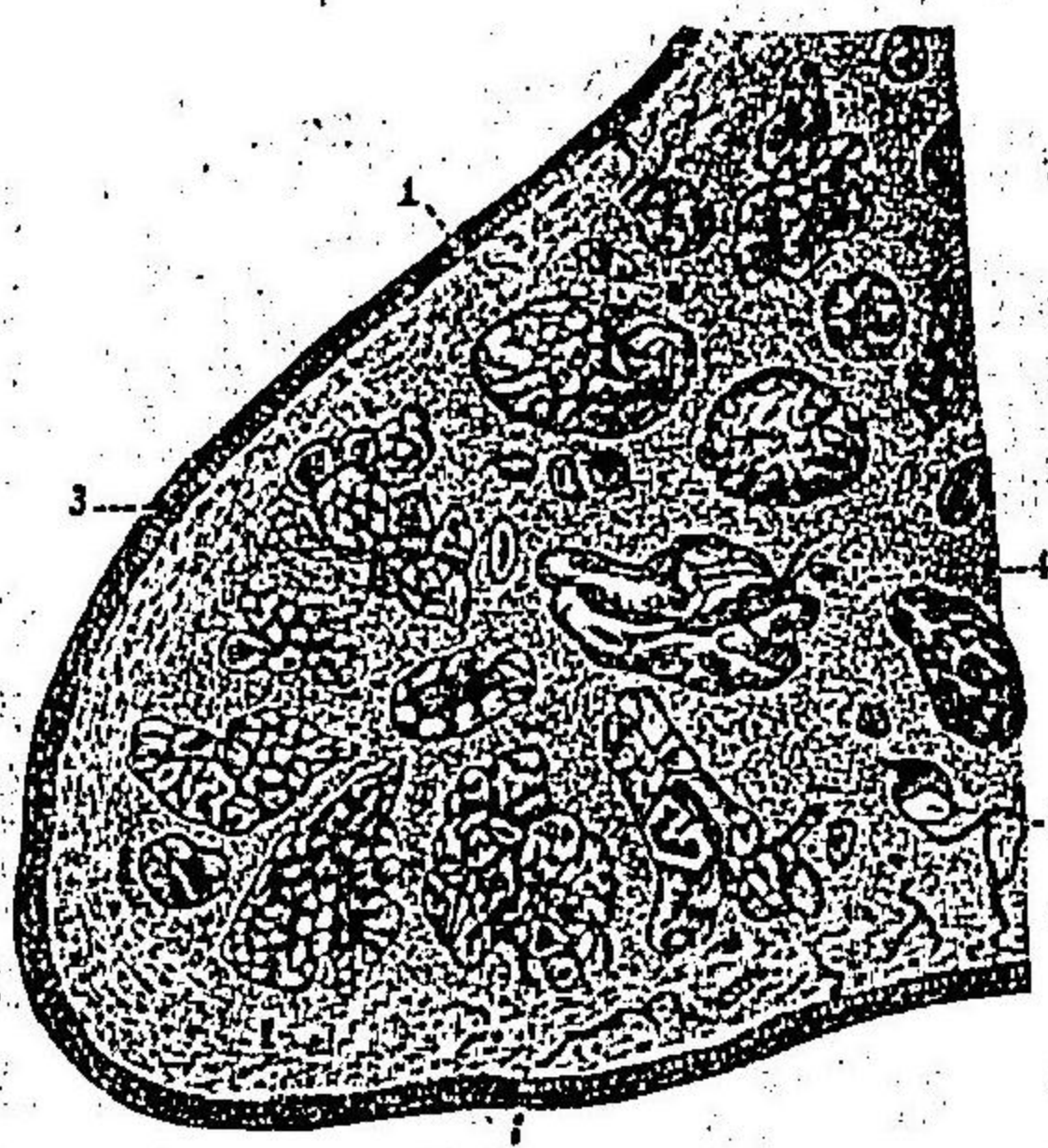
テ延伸シ易キ結締組織ヲ以テ横披裂筋ノ前面ニ附着シ通例多少ノ
縦皺紋ヲ現ハス但シ此皺襞ハ聲門開張スルニ方テハ隨テ消失ス假
聲帯及ビモルガニ、氏竇ノ粘膜ハ在
下ノ筋層ニ聯ルコト稍々寬疎ニシテ
其兩端ノ處ニハ腺ヲ藏シテ扁平丘狀
ノ小隆起ヲ生ズ聲帯ノ粘膜ハ菲薄ニ
シテ稀疎ナル結締組織ヲ以テ寬ク下
層ニ附着シ容易ク移動セシム可ク且
ツ自ラ小皺紋ヲ呈ハス但シ其縁邊及
銳ナル部ニ在リテハ最モ強靱ナル彈力組織ヲ以テ固着ス又粘膜ノ
上皮ハ一部ハ扁平上皮ニシテ一部ハ頭毛上皮ナリ而シテ扁平上皮
ハ咽頭上皮ノ連續ニシテ會厭軟骨ノ前後粘膜面、披裂皺襞ノ縁邊ヲ
覆ヒ兩披裂軟骨對面ノ狹部ヨリ聲帯ニ及ブ殊ニ聲帯ノ遊離縁ニ在
リテハ強厚ノ扁平上皮ヲ有ス自餘ノ喉頭腔ニ於ケル上皮ハ概テ圓

乳嘴

ルシユカ氏ノ
コイチ氏ノ説

柱狀ニシテ顫毛ヲ具フ乳嘴ハ會厭軟骨上面ノ粘膜、聲帶ノ遊離縁ニ存シ其縁下ヨリ漸次ニ細小トナリ聲帶ノ下面ニモ亦之レヲ現ハス。上皮ノ下部ニハ薄キ透明無紋ノ結組織ヲ有ス但シ此結組織ノ全然無紋ナルハ聲帶ノ粘膜内ノミニシテ自餘ノ部分ニ於テハ多少ノ纖維様及ビ細胞様ノ紋理ヲ現ハス。粘膜ハ纖弱ノ纖維様結組織ヨリナリ裏ニ突起ヲ有スル許多ノ細胞簇ヲ含ム而シテ其細胞ハ細胞核ノ狀ニシテ内ニ發育充分ナル核ノ鬆疎ナル「プロトプラスマ」中ニ包容セラル、ヲ見ルルシヨカ氏ノ説ニ據レハ此細胞ハ上皮ノ生母ト看做ス可キ者ニシテ諸般ノ炎症喉頭病ニ於テ重要ノ作用ヲナス者ナリト云フ又コイチ氏ハ粘膜中ニ淋巴細胞ノ存スルヲ發見シ

第八圖



ス者ナリト云フ又コイチ氏ハ粘膜中ニ淋巴細胞ノ存スルヲ發見シ

腺

喉頭内腔

之ニヨリテ窒扶斯ノ經過中ニ一種性ノ潰瘍ヲ生ズルノ理ヲ説明シ得ベシト云ヘリ又葡萄狀腺ハ一ハ散在性一ハ聚落性ヲナス就中ノヲ有スルコト許多ナルハ會厭結節、會厭軟骨ト披裂會厭皺襞トノ角假聲帶及ビモルガニ一氏竇トナス其他喉頭後壁殊ニ環狀披裂關節ノ近傍ニ在テハ此腺不規則ニ散在ス面シテ腺ノ全ク缺如スルハ聲帶ノ上面ナリ但シヘーリング氏及ビエルハイマン氏ハ聲帶突起ノ尖端聲帶縁ニ沿フ處ニ於テ屢々一ニノ葡萄狀腺ノ存スルヲ見タリト云フ

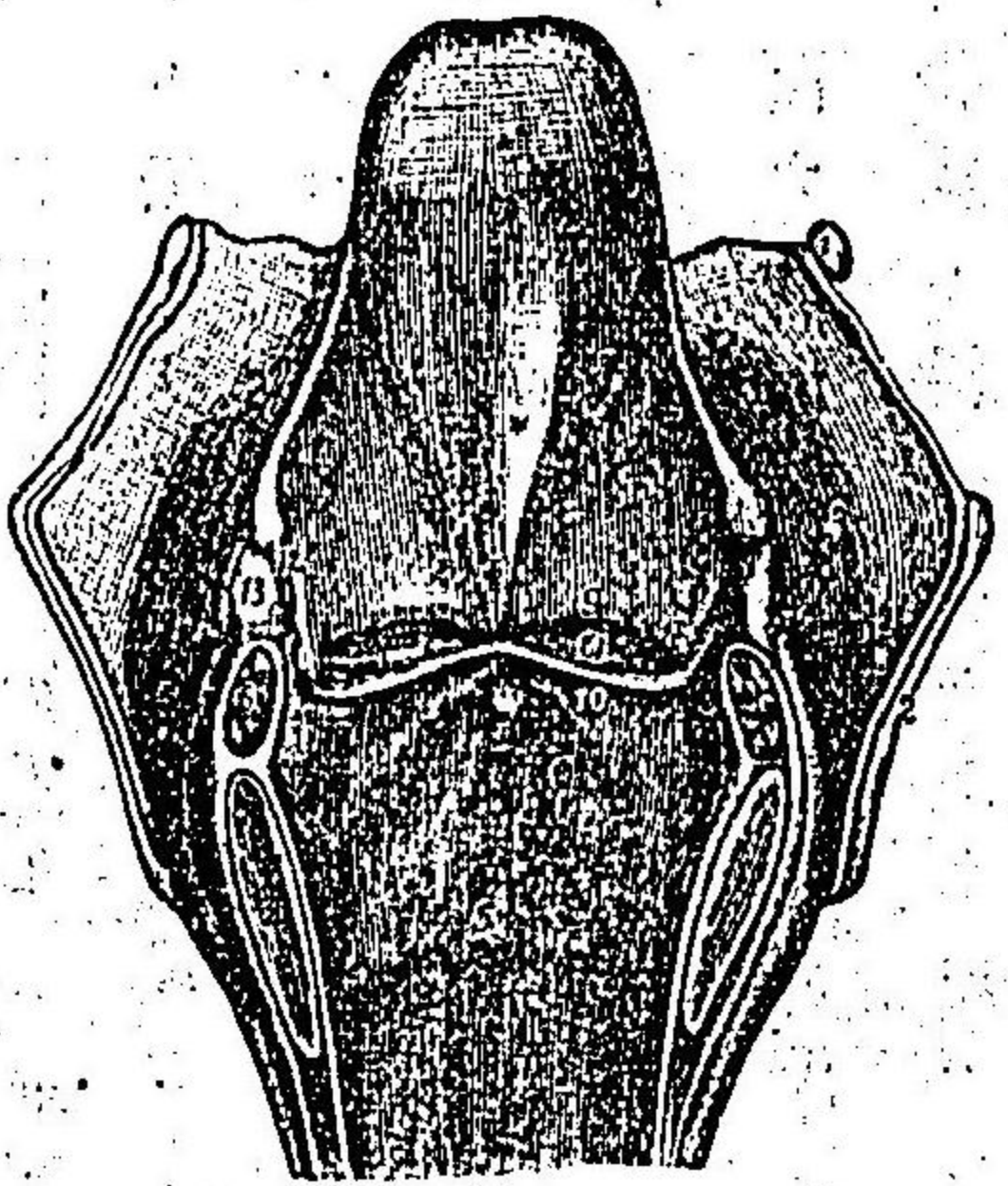
以上述ブル所ハ實地上ニ切要ナル喉頭各部ノ造構ナリ更ニ喉頭腔内ノ形狀ヲ左ニ説明スベシ是レ蓋シ喉頭鏡検査ヲ行フニ方テ其現像ヲ理會センニハ必要缺ク可ラザレバナリ

喉頭内腔ハ不正長形ノ腔洞ナリ今其解説ヲシテ理會シ易カラシメシガ爲ニ上、中、下ノ三部ニ區別ス但シ其境界ハ主トシテ外觀ニ依ル者ニシテ解剖的ノ狀況若シクハ病理的作用ヲ根據トナスニ非ズ

喉頭前庭

喉頭上部ハ一ニ喉頭前庭ト名ク喉頭上口即チ喉頭咽頭口ヨリ假聲帶ニ至ルノ間ヲ云フ會厭軟骨ヲ以テ其前壁ヲナスガ故ニ其形狀ハ全ク會厭軟骨ノ形狀ニ關ス則チ上部ハ凸隆シ中部ハ微シク凹陷シテ圓形ノ隆起即チ會厭結節ヲ現ハス後壁ハ披裂軟骨ノ上部假聲帶ノ附著スル處ニ當ルサントリニ氏軟骨モ亦茲ニ屬ス此壁ハ披裂軟骨間部又披裂軟骨連合ト名ケ披裂軟骨ノ運動ニ隨テ絶エズ其形狀ヲ變易ス即チ深呼吸ニ方テ軟骨間大ニ排開スルトキハ扁盤狀ヲナシ軟骨收合スルトキハ鉛直ノ縱溝狀ヲ呈シ聲門全ク閉鎖スルトキハ一條ノ裂線トナリテ僅ニ目撃スルヲ得ルニ過ギズ兩側壁ハ披裂會厭襞ヲ以テ成ル其前端ハ會厭軟骨ノ兩側縁ニ連接スルガ故ニ左右兩壁ノ面ハ下方ニ

第九圖



至ルニ從テ漸ク相近接シ内腔ヲシテ自ラ狭小ナラシム

中喉頭腔

モルガニ一氏

下喉頭腔

血管

中喉頭腔ハ上下聲帶及ビモルガニ一氏竇ノ間ニシテ頗ル狹隘ナリ上聲帶ノ間隙ハ後方ニ向テ漸ク廣大ナル卵圓形ヲナシ且ツ斜メニ後下方ニ向テ下聲帶ノ間隙ハ眞性ノ聲門則チ聲門披裂ニシテ其形狀及ビ廣狹ハ聲帶ノ位置ニ從テ時ニ變易スモルガニ一氏竇ハ左右ノ上下兩聲帶ノ間ニ在リテ長圓形ノ盲囊狀腔ヲナシ眞聲帶ニ比スルニ少シク長シ其大サハ頗ル不定ニシテ主ラ上方ニ向テ延長シ往々上聲帶ヲ超過スルコトアレドモ梨子狀竇ニ達スルハ甚ダ稀ナリ

下喉頭腔ハ聲帶ヲ上境トシ環狀軟骨下縁ノ平面ヲ下界トナス前方及ビ側方ハ圓錐狀韌帶及ビ環狀軟骨ノ前部及ビ側部ヲ以テ圍ミ後方ハ環狀軟骨板及ビ披裂軟骨基底ヲ以テス此部ノ壁ハ聲帶ノ下際ヨリ下ルニ隨テ漸々狭小トナリ遂ニ氣管ノ起始ニ達ス

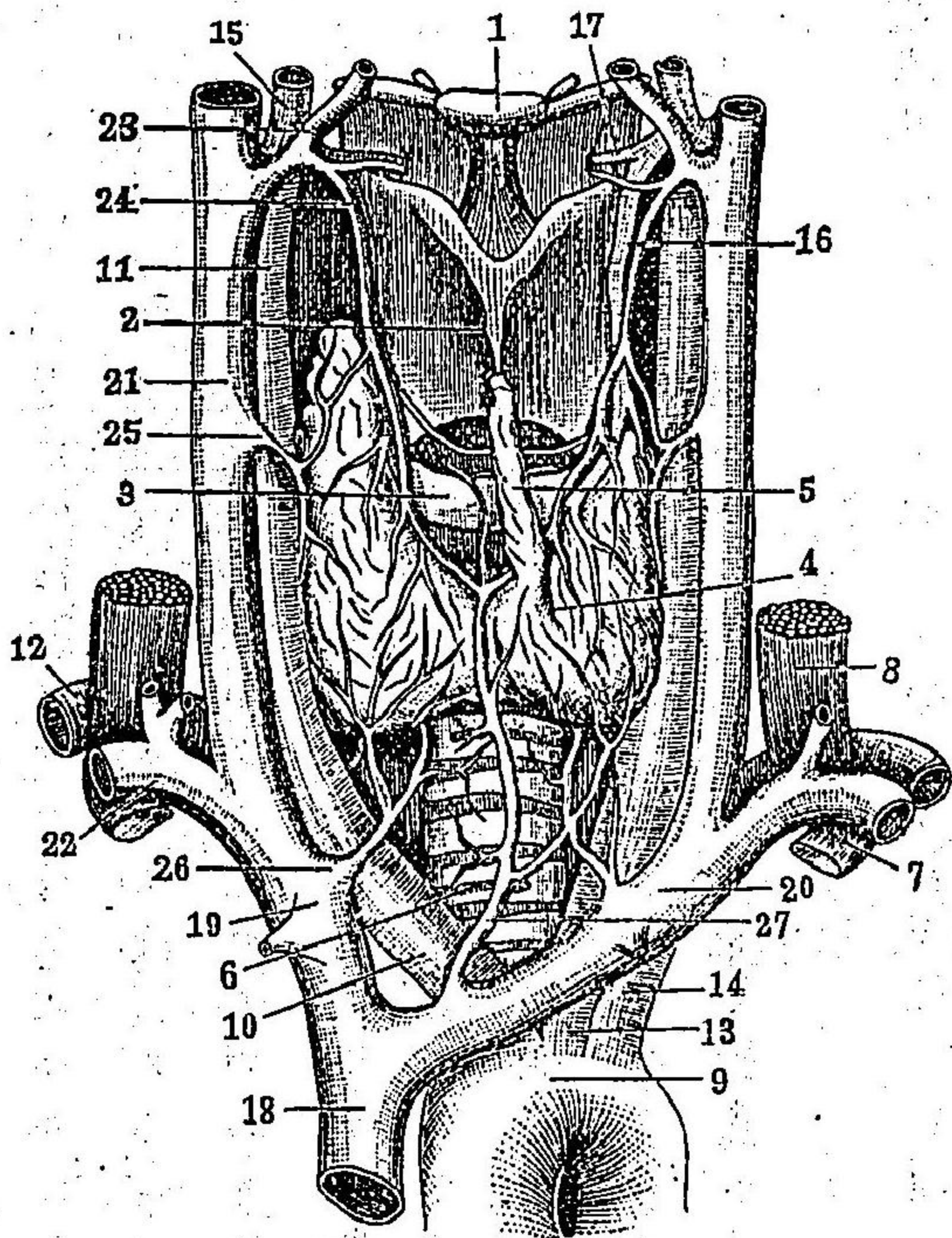
喉頭ノ動脈ハ上下甲狀腺動脈ノ支別ニシテ其喉頭ニ入ルヤ互

上喉頭動脈

ニ相吻合ス靜脈ハ畧々動脈ニ對等シ主ラ内頸靜脈ニ注グト雖モ亦
甲狀腺靜脈ト許多ノ吻合ヲナシテ無名靜脈ニ連ナル其他淺層中ニ
於テハ頸靜脈ト不定ノ吻合ヲナスコトアリ

上喉頭動脈ハ上甲狀腺動脈外頸動脈ノ一枝ノ支別ナレドモ時
トシテハ舌動
脈若クハ外頸
動脈ヨリ直ニ
分脈スルコト
アリ其經過ハ
前内下方ニ向
テ甲狀舌骨筋
下ヲ過ギ舌骨
ト甲狀軟骨ト
ノ間ニ至リ上

第十圖



ノ間ニ至リ上
ト甲狀軟骨ト
下ヲ過ギ舌骨
テ甲狀舌骨筋
前内下方ニ向
アリ其經過ハ
分脈スルコト
動脈ヨリ直ニ
脈若クハ外頸
トシテハ舌動
脈若クハ外頸
動脈ヨリ直ニ
分脈スルコト
アリ其經過ハ
前内下方ニ向
テ甲狀舌骨筋
下ヲ過ギ舌骨
ト甲狀軟骨ト
ノ間ニ至リ上

喉頭神經ト共ニ甲狀舌骨膜ヲ貫通シ數枝ニ分岐シテ會厭喉頭諸筋
及ビ聲帶ニ分布ス但シ其本幹ハ甲狀軟骨側板ニ沿ヒ下行シ之ト下
甲狀披裂筋トノ間ニ於テ前後ノ二枝トナル則チ其後枝ハ斜披裂間
筋後環狀披裂筋及ビ之ヲ被覆スル粘膜炎ニ分布ス前枝ハ單ニ下甲狀
披裂筋ニ分布ス自餘ノ小枝ハ下喉頭動脈ニ吻合ス但シ此動脈ハ時
トシテハ其循行ヲ變ジ上文述ブル所ノ甲狀軟骨側板ノ上部ニ於ケ
ル圓孔ヲ通過スルコトアリ

下喉頭動脈

下喉頭動脈ハ下甲狀腺動脈鎖骨下動脈ノ一枝ノ支別ニシテ下

環狀甲狀動脈

喉頭神經ト共ニ環狀甲狀關節ノ後際ヲ經テ主ラ後環狀披裂筋ニ分
布ス環狀甲狀動脈ハ上甲狀腺動脈ノ小枝ニシテ中環狀甲狀韌帶ノ
前ニ於テ左右互ニ吻合ス其支別ハ更ニ韌帶ヲ貫通シテ喉頭内ニ入
リ聲帶ニ達ス此動脈ハ往々盛ニ發育シテ大管ヲナスコトアリ宜シ
ク喉頭截開術ヲ行フニ方テ極メテ注意スベシ

上甲狀腺靜脈

上甲狀腺靜脈ハ其源ハ環狀甲狀靜脈ニシテ甲狀腺ニ分布シ許

多ノ吻合ヲナシ更ニ上喉頭靜脈ト合シテ總顔面靜脈ニ連リ以テ内頸靜脈ニ注グ又往々不定ノ小枝ヲ以テ直ニ内頸靜脈ニ合スルコトアリ

上喉頭靜脈

上喉頭靜脈ハ喉頭腔内ヨリ披裂軟骨後面ノ間ニ於ケル咽頭喉頭靜脈叢ノ血ヲ受ケ同名動脈及ビ神經ニ沿フテ甲状舌骨膜ヲ貫通シ上甲状腺靜脈若クハ直ニ總顔面靜脈或ハ中頸靜脈ニ合ス

淋巴管

淋巴管ハ粘膜炎中ニ於テ前庭ヨリ聲門下ニ至ル間ニ平等ナル緻密ノ網ヲ成形ス但シ假聲帶ノ遊離縁及ビ殊ニ真聲帶ノ同部ニ於テハ發生微弱ナルヲ見ル此淋巴管網ヨリ上方及ビ下方ニ向テ淋巴管ヲ發シ其上管ハ更ニ合シテ左右各々一條ノ主幹トナリ披裂會厭韌帶ノ下部ニ沿フテ外方ニ向ヒ舌骨大角ト甲状軟骨上縁トノ間ニ至リ深頸淋巴腺ニ達ス下管ハ環狀甲状膜ヲ貫通シ一部ハ此膜ノ前方ニ在ル淋巴腺中ニ入り一部ハ氣管ノ兩側ニ於ケル淋巴腺ニ達ス喉頭ニ分布スル神經ハ迷走神經ノ支別ニシテ上喉頭神經及ビ下喉

神經

頭神經則チ反廻神經ナリ

上喉頭神經

上喉頭神經ハ概テ知覺神經ニシテ唯一條ノ運動枝ヲ環狀甲状筋ニ與フルノミ此神經ハ迷走神經節狀叢ヨリ發シ内頸動脈ノ内側ヲ下行シ舌骨大角ノ部ニ於テ内外二枝ニ分岐ス其外枝ハ一小枝ト名ク運動枝ニシテ甲状咽頭筋上ヲ下テ甲状軟骨下縁ニ至リ次テ環狀甲状筋ニ分布ス其經過中交感神經ノ上頸節ヨリ一小枝ヲ受ケ甲状咽頭筋ニ分布ス他ノ一枝ハ内枝若クハ大枝ト稱ス知覺神經ニシテ甲状舌骨膜ヲ穿通シテ斜メニ内後方ニ向ヒ梨子狀竇ノ前内壁ノ粘膜炎下ニ至リ所謂喉頭神經皺襞ヲ成形シ直ニ一枝ヲ放テ咽頭ノ喉頭部ニ分布セシム之ヲ咽頭枝ト云フ其他會厭枝ト稱スル一小枝ヲ發シテ會厭舌根間ノ粘膜炎及ヒ披裂會厭皺襞ノ内外面ニ分布シ又喉頭枝トナリテ前庭部及ヒ喉頭後壁ノ粘膜炎ニ分布ス自餘ノ小枝ハ交通枝ニヨリテ下喉頭神經ト吻合ス

下喉頭神經

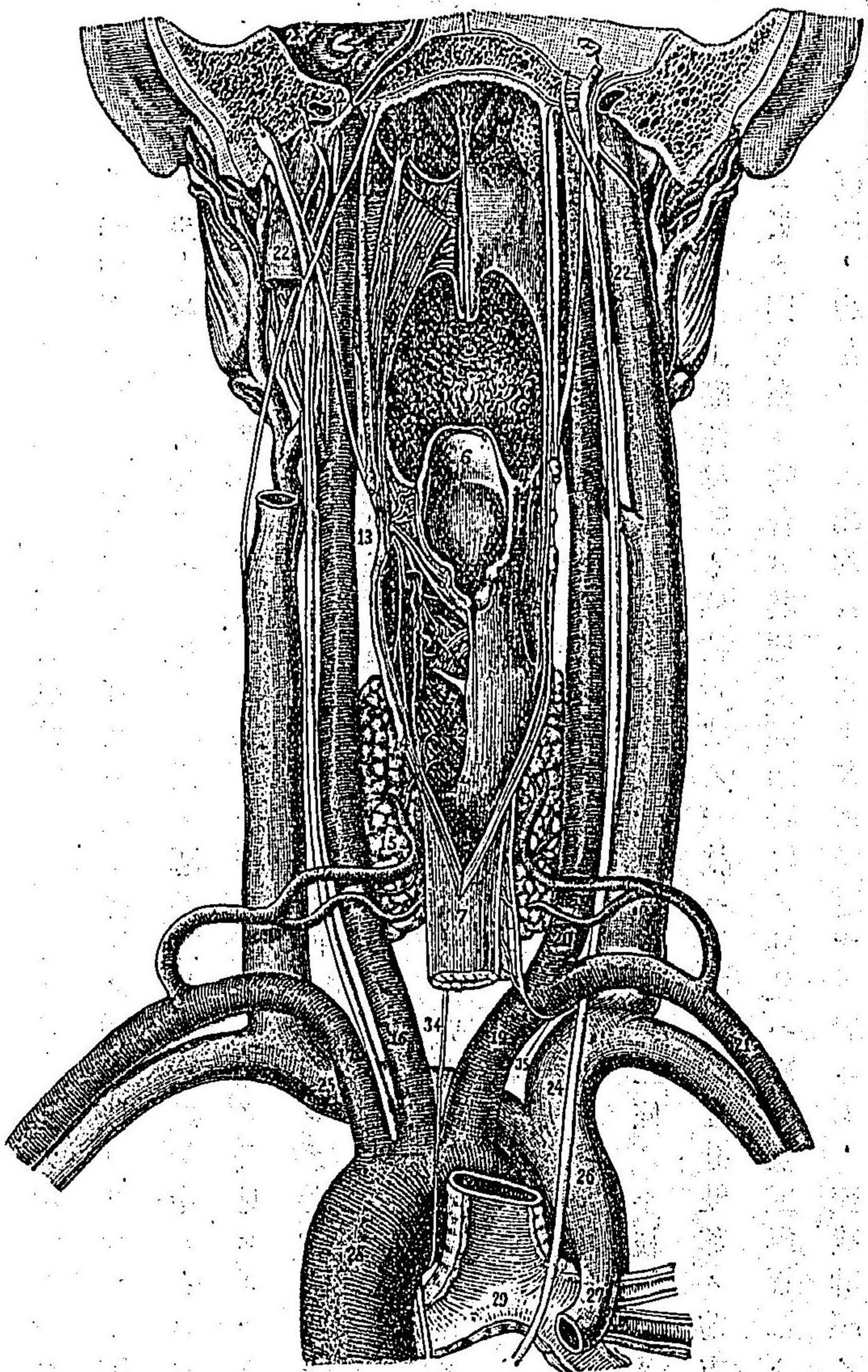
下喉頭神經即チ反廻神經ハウキルリス氏副神經ノ内枝ヨリ一

分ノ纖維ヲ受ク此纖維ハ頸神經節ノ直下ニ於テ迷走神經中ニ入り
下降シ迷走神經ニ至リ左右不同ノ部位ニ於テ發生ス

右下喉頭神經ハ鎖骨下動脈ノ前方肋膜囊尖頂ノ近傍ニ於テ迷
走神經ヨリ起リ此動脈ヲ廻テ後方ニ出テ總頸動脈ノ後際ヲ上行シ
之ト交叉シテ斜ニ内方ニ向ヒ更ニ氣管及ビ食道ノ中間ヲ經テ上行
シ下喉頭動脈ト共ニ下咽頭收縮筋ノ起始部ヲ貫通シ環狀甲狀關節
ノ部位ニ於テ前後ノ二枝ニ別ル其前枝ハ環狀軟骨及ビ甲狀軟骨ノ
間ニ入り側部ノ内喉頭筋ニ分布シ後枝ハ後環狀披裂筋ノ下縁ヨリ
環狀軟骨上縁ニ達シテ此筋ニ一技ヲ與ヘ終ニ披裂間筋ニ分布ス則
チ此神經ハ環狀甲狀筋ヲ除クノ外自餘ノ喉頭筋ノ運動ヲ司トル者
トス

左下喉頭神經ハ大動脈弓下縁ノ部位ニ於テ迷走神經ヨリ分派
シ動脈弓ノ横行部ヲ廻テ弓ト左氣管枝トノ間ヲ經テ氣管食道間溝
ノ前ニ沿ヒ上行シテ環狀軟骨板ノ下縁ニ至リ右側ノ同名神經ニ於

第十圖



中央喉頭神經

オノジイ氏ノ説

ケルガ如ク喉頭内ニ分布ス
 エツクスネル氏ハ更ニ中央喉頭神經 *N. laryngæus medius* ナル者ヲ説ケ
 リ此神經ハ獸類犬及ビ兔ニ在テハ迷走神經ノ咽頭枝ヨリ生ズト雖
 ドモ人身ニテハ恐クハハルレル氏ノ咽頭叢及ビ喉頭叢中ニ存スベ
 シ此ノ如ク叢ヲナスガ故ニ獨立ノ一枝トシテハ之ヲ發見スルコト
 能ハズト雖ドモ試験的ニ之ヲ證明スルヲ得ベシ而シテ此神經ハ上
 喉頭神經ト共ニ運動枝ヲ環狀甲状筋ニ附與スル者トス
 オノジイ氏ハ上説ニ反シテ人ノ喉頭ニ於テ中央喉頭神經ノ存在ス
 ルコトヲ稱道セリ氏ノ發見スル所ニ據レバ迷走神經ノ咽頭枝ハ二
 根ヲ以テ迷走神經及ビ交感神經ノ上頸節ヨリ起リ其經過中ニ許多
 ノ小枝ヲ咽頭筋肉ニ分布シ環狀軟骨下部ニ至テ二條ノ小枝トナリ
 其一枝ハ上喉頭神經ノ外枝ニ他ノ一枝ハ下喉頭神經分岐部ノ前方
 ニ於テ同神經ニ吻合ス其他上喉頭神經ノ外枝ハ現ニ交感神經節ト
 直接ノ吻合ヲナス此吻合ハ間々甚ダ顯著ナル者ニシテ交感神經ノ

ブルックアルト
及ビクラウゼー
氏ノ試験

吻合枝ハ外枝ヨリ強大ナルカ若クハ二倍ノ大サニ達スルコトアリ
 又時トシテハ下喉頭神經ト交感神經上頸節ノ吻合スルヲ見ルコト
 アリ同氏ノ説ニ據レハ横披裂筋ハ運動枝ヲ上喉頭神經ニ受クレト
 モ後環狀披裂筋及ビ側環狀披裂筋ハ否ラズト云フエツクスネル氏
 モ亦此説ニ左袒セリ
 ブルックアルト及ビクラウゼー二家ノ説ニヨレバ下喉頭神經ハ求
 心性纖維ヲ有スト云フ即チブルックアルト氏ハ家兔ニ就テ此神經
 ヲ切斷シ微弱ノ電流ヲ通ジテ其中心端ヲ刺戟セシニ呼吸緩徐トナ
 リ二吸氣間ノ休憩時延長シ更ニ電流ヲ強ムル時ハ吸氣ノ状態ニ於
 テ氣息全ク停止セリ又クラウゼー氏ハ此試験ヲ確定シ且ツ切斷セル
 神經ノ中心端ヲ刺戟スルニ方テ此神經ノ對側ニ於ケル聲帶内轉ス
 ルヲ見タリト云フ但シブルゲル氏ハ此試験ヲ確定スルコト能ハズ
 且ツ説ヲナシテ曰ク施術セザル一側ノ聲帶ニ運動ヲ起スハ畢竟最
 強ノ電流ヲ用ユルガ爲ニ其餘波ニヨリテ然ル者タルニ過ギズト

第二項 喉頭生理

喉頭生理

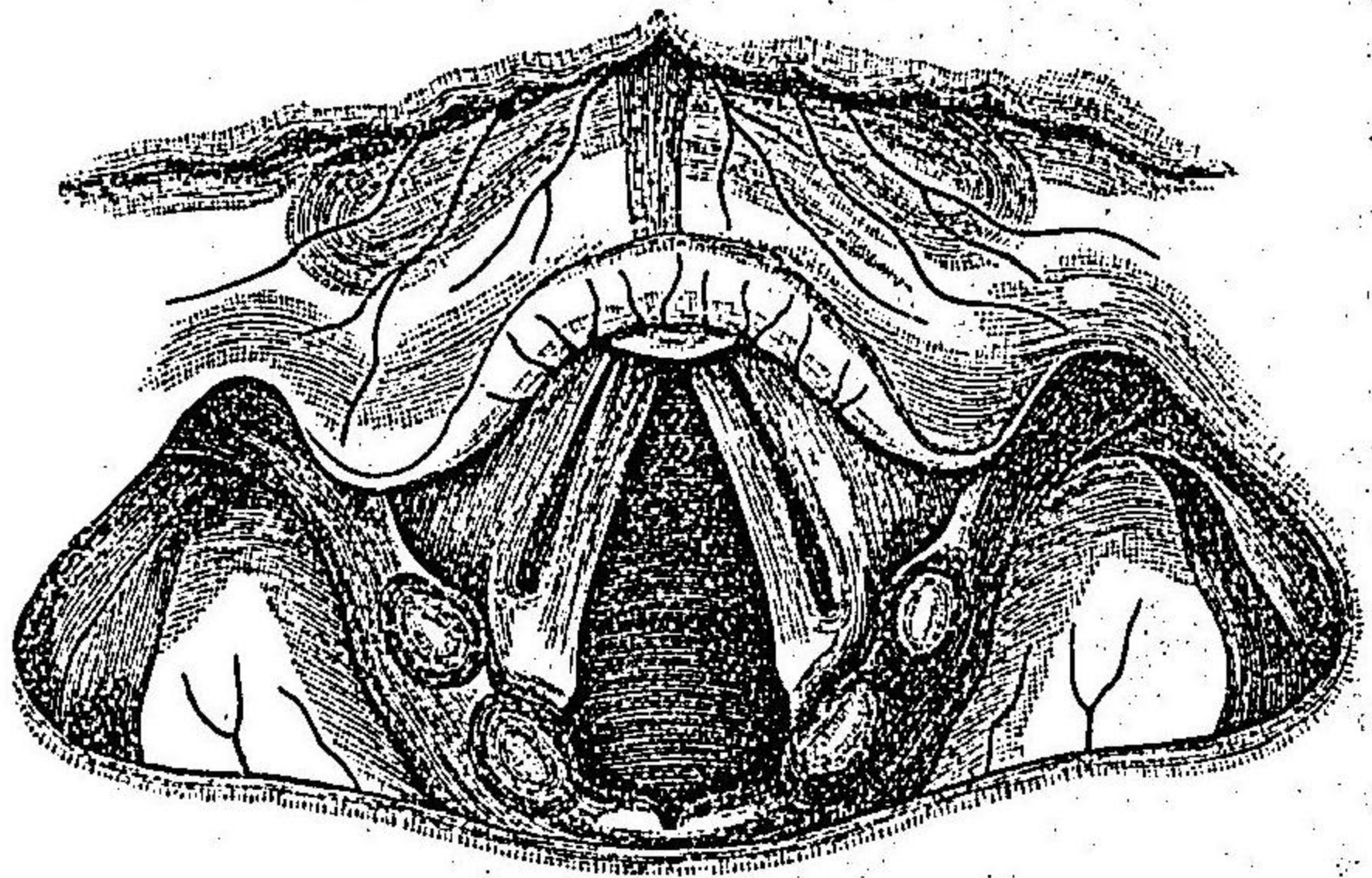
喉頭各部殊ニ其筋ノ作用ニ就テハ前項ニ於テ既ニ其大要ヲ説述セシト雖モ各種ノ病的變狀ヲ審ニセンガ爲メニ生理的作用ニ就テ更ニ論説センコトヲ要ス就中學者ヲシテ聲門ノ常狀ヲ熟知セシメンガ爲ニ今之ヲ左ニ列擧ス

喉頭ハ吸氣及ビ發聲ノ器タルガ故ニ呼吸ニ際シテハ氣息ノ通路トナリ發聲ニ方テハ聲帶ノ排合及ビ弛張ヲ營ミ以テ聲調ヲ整フ此ノ如キ機轉ハ主ラ筋ノ複雜ナル動作ニ依ルナリ而シテ此諸筋ハ既ニ前項ニ述ブルガ如ク一部ハ互ニ相扶ケテ協動シ一部ハ互ニ相反シテ結構スル者ニシテ兩種ノ作用ハ必ズ綿密精微ナランヲ以テ緊要ナリトス

聲門ノ安靜位

聲門ノ安靜位即チ殆ド一筋ノ作用ヲモナサザル位置ハ安靜ナル呼吸ノ際ニ現ハル、所ニシテチームゼン氏ノ所謂聲帶屍位ニ近

第二十圖



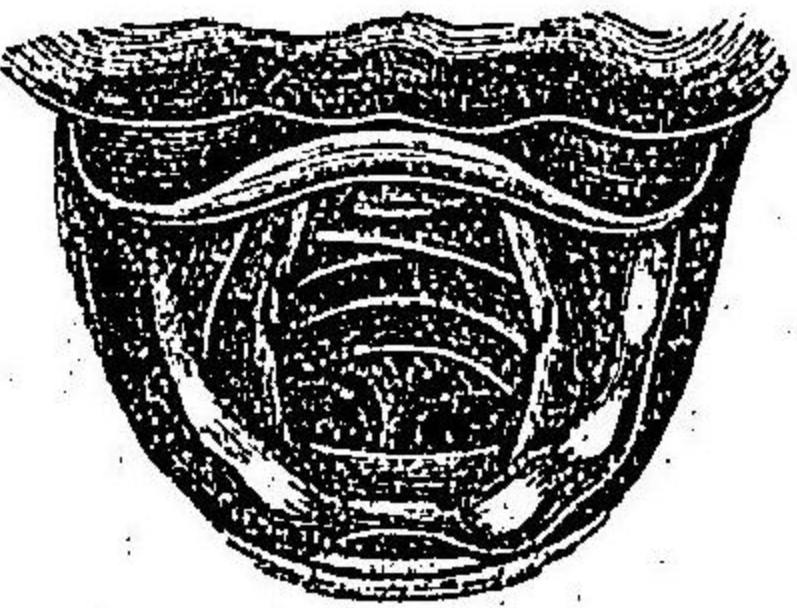
似ス而シテ其形狀ハ狭キ等脚三角形ニシテ其脚ノ後部ハ鈍角ヲナシテ内方ニ微曲ス(第十二圖)聲帶ノ安靜位ヲ斥シテ直ニ屍位トナス者アリト雖ドモ決シテ適當ナラズ何トナレバ聲門ハ呼吸時ニ在テハ屍ニ於ケル位置ニ比スレバ稍々廣ク且ツ屍ニ於ケル聲帶ハ外轉スルコトナキ

強大ノ深呼吸

ガ故ニ聲門ハ常ニ開張スルコトナキヲ以テ自ラ相異ナレバナリ
 蓋シ呼吸ノ際ニ於ケル聲帶ノ位置モ亦全ク喉頭諸筋ノ作用無絶ナ
 ルニアラズ必ズ呼吸中樞ノ機能ニ依テ多少外轉筋ノ興奮セラレ、
 コトアルベシ唯々此際吾人ノ意識ニ關係ナキヲ以テ假リニ之ヲ聲
 帶ノ安靜位ト做スニ過ギザルナリ

強大ノ深呼吸

圖三十第



於テハ再ヒ微シク收合スベシ而シテ呼吸時ニ
 於ケル聲門ノ形状ハ廣クシテ稍々五角形ヲ呈
 ハス故ニ巧ニ喉頭鏡ヲ用フルトキハ氣管分岐
 部ニ至ルマデ明カニ検査スルコトヲ得ベシ(第
 十三圖)

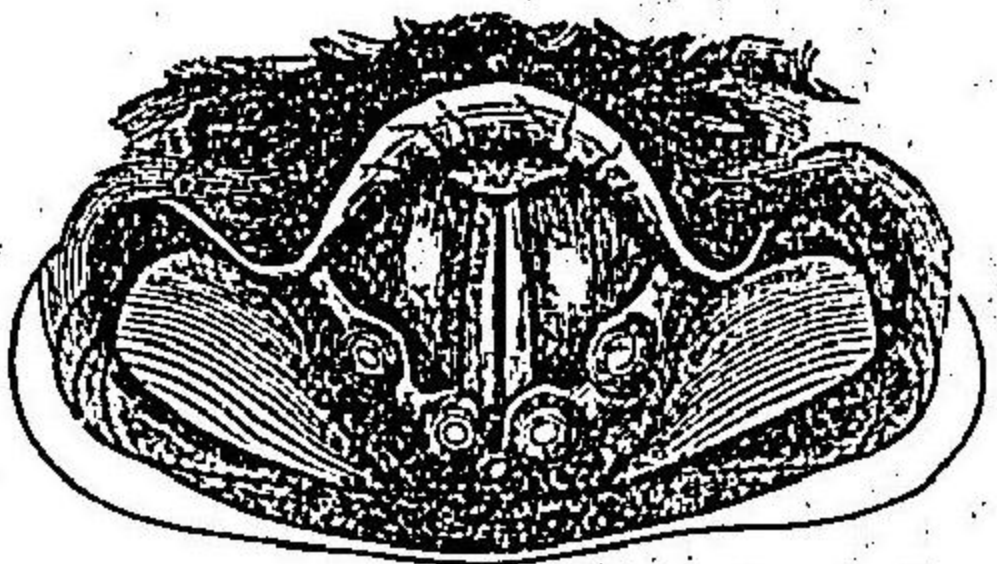
喉頭ハ二枚ノ膜様簧舌ヲ有スル笛ニ異ナラズ
 而シテ音ヲ發スルニ方テハ兩舌十分ニ緊張シ互ニ相接着スルカ若
 クハ殆ド將ニ接着セントスルニ至ラザル可カラズ但シ聲帶ノ緊張

聲ノ高低

聲ノ高低

ブレドモ尙ホ能ク活潑ノ聲ヲ發スルコトヲ得ベシ又弱キ氣息ヲ以
 テスルトキハ呬語ノ音ヲ生ズルナリ其他時トシテハ披裂軟骨ノ内
 面全ク密着シ前連合ヨリ聲帶突起ノ尖端ニ至ルノ間ニ僅ニ細微ノ
 裂線ヲ現ハスニ過ギザルコトアリ

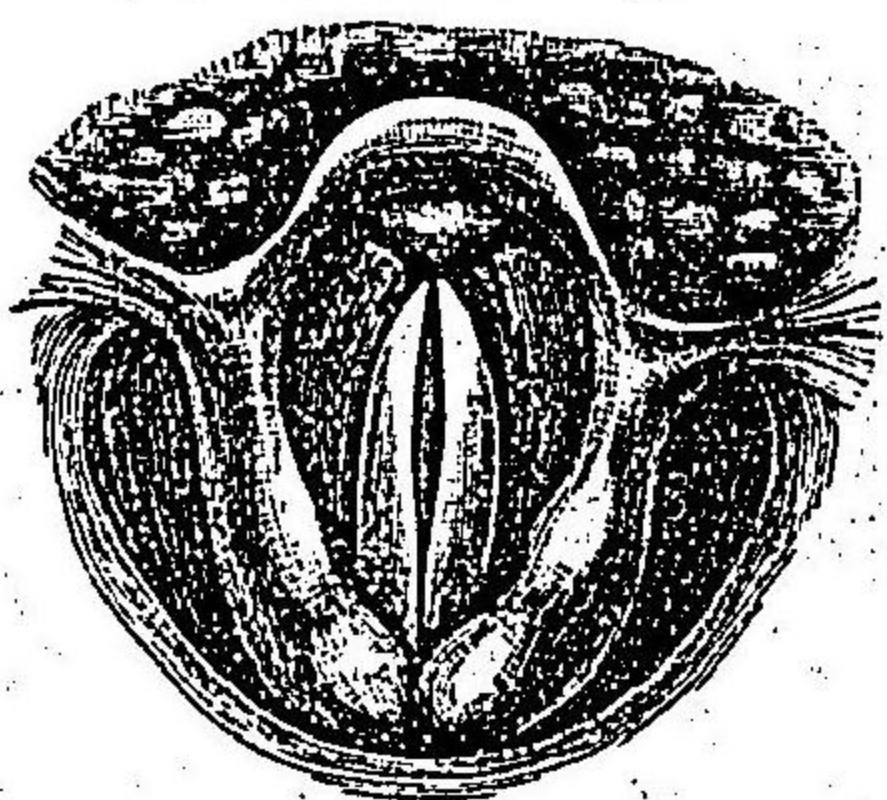
圖四十第



及ビ收閉ノ機轉ハ既ニ解剖上構造ノ條下ニ述べタリ而シテ發音ノ
 際聲帶ノ相近接スルニ二様アリ一ハ其膜様部及ビ軟骨部共ニ全長
 ニ於テ互ニ近接シ一ハ膜様部ノミ閉鎖シテ(第十
 四圖)軟骨部ニハ尖頂前ニ向ヘル三角形ノ空隙ヲ
 遺ス此二様ノ形状ハ通常ノ状態ニ現ハル、モノ
 ニシテ殊ニ甲ノ形状ヲ多シトスグリユツネル氏
 ノ説ニ據レハ甲狀ヨリ乙狀ニ變ズルハ隨意ニシ
 テ且ツ容易ナリト云フ而シテ甲狀ニ於テ強キ氣
 息ヲ以テ發言スルトキハ音調低クシテ嘖聲ヲ帶
 プレドモ尙ホ能ク活潑ノ聲ヲ發スルコトヲ得ベシ又弱キ氣息ヲ以
 テスルトキハ呬語ノ音ヲ生ズルナリ其他時トシテハ披裂軟骨ノ内
 面全ク密着シ前連合ヨリ聲帶突起ノ尖端ニ至ルノ間ニ僅ニ細微ノ
 裂線ヲ現ハスニ過ギザルコトアリ

帶ノ緊張ハ其兩端ニ附着スル筋ノ收縮後環狀披裂筋ニ依テ披裂軟骨ヲ固定スルノ際ニ於ケル環狀甲狀筋ノ收縮ニ依テ聲帶ノ兩端離開セラル、ニ基クナリ而シテ内甲狀披裂筋中若干ノ纖維ハ聲帶ノ彈力組織ニ抵止シ他ノ纖維ハ聲帶ノ遊離縁ニ向ヒ彎曲シテ其縁ニ附着スルガ故ニ此筋ハ必ず聲帶各部ヲシテ個々其緊張ヲ増盛セシムルコトヲ得又之ニ反シテ聲帶中一部ヲ弛緩セシムルノ用ヲナシ以テ聲音ニ於ケル精妙幽微ノ調理ヲ營ムコトヲ得ベシ

第十圖



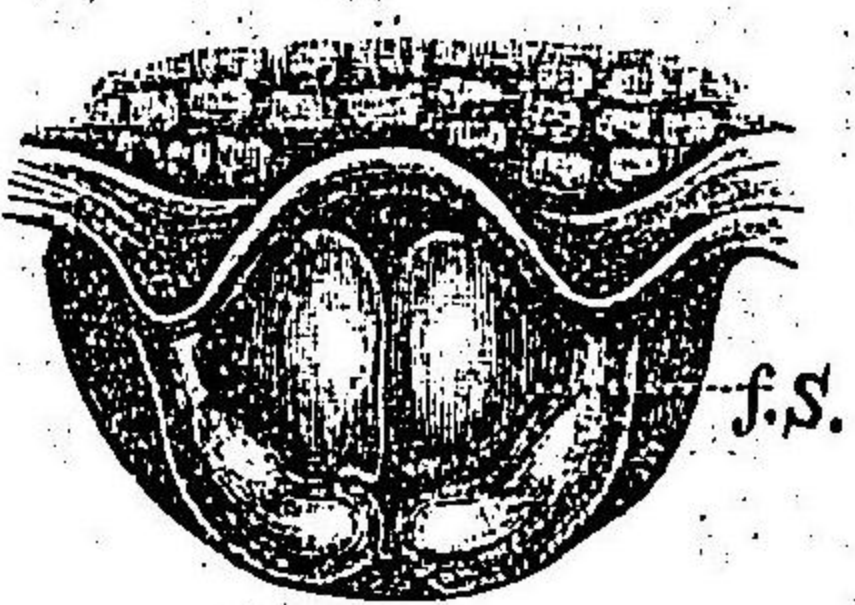
聲帶ノ長短モ亦之ヲ變易セシムルコトヲ得即チ橫披裂筋ノ作用ニ依テ披裂軟骨ノ内面密接スルルハ特リ聲帶ノミ振盪ス此ノ如キ機轉ハ所謂假不全聲音 *Pseudo-stimm* ヲ發スルノ際ニ現ハル、モノニシテ此時ニ方テハ聲帶間ニハ短クシテ比較的廣キ

假不全聲音

假聲帶

假聲帶ハ殆ド聲帶ト同一ノ運動ヲ營ムモノナレドモ通例其兩縁ハ決シテ相觸接スル者ニ非ズ又假聲帶ハ發聲ニ方テ直接ノ關係ヲ有スルヤ否ヤニ就テハ未

第十六圖



ダ明ナラズ唯々病的ノ状態若クハ肺中ノ空氣ニ強壓ヲ加ヘンガ爲メニ故ラニ喉頭上口ヲ密閉セントスルノ際ニハ假聲帶ハ互ニ近接シ更ニ會厭軟骨根ヲ以テ其上ヲ壓定スルコトアルノミ(第十六圖)

喉頭隨意運動ノ中樞

大腦皮質中ニ存スル喉頭隨意運動ノ中樞ハクラウゼ氏

ノ犬ニ於ケル試驗ニ據レバ前頭回轉ノ急ニ下方ニ傾斜スル所ニ於テ十字溝ト前頭葉トノ間ニ在リト云フ今試ニ一側ノ皮質ニ於テ此部ヲ切去スルトキハ一二週ニシテ同側ノ腦質ニ裂隙ヲ生ズ是レ蓋シ神經纖維ノ萎縮スルニ基クナリ加之神經纖維ノ軸索ニ變質ヲ現ハス者稍々多ク且ツ同側ノ乳嘴體及ビ乳嘴脚ハ變小ス是ヲ以テク

ラウゼ氏ハ乳嘴體ハ前頭回轉ノ側部ヨリ來レル纖維正路ニ於ケルカ驛傳ト看做スベシト云ヘリ
 此發見說ハ更ニゼーモン並ニホルスレー二家ノ益々補充スル所ナリシガフランコウフランク氏ハ喉頭ナル者ハ一般ノ呼吸運動ニ關係ナキ特異ノ皮質性中樞ヲ有スルコトナキヲ說ケリ但シゼモン、ホルスレー二氏ノ外マシニ一氏モ亦喉頭ノ運動ハ胸廓ノ呼吸運動ニ關係ナクシテ腦皮質ノ一定部ノ機能ニ依テ催起セラルベシト云ヘリ各大腦ノ皮質ニハ聲帶内轉筋ノ中樞アリ則チ猿ニ於テハ前中心溝下端ノ後方第三前頭回轉ノ基底ニ存シ肉食獸ニ在テハ前十字回轉及ヒ之ニ隣接セル回轉ニ之ヲ見ル而シテ此部ノ中樞ニハ更ニ最モ鋭敏ナル燒點アリテ上行前頭回轉下端ノ前半部ニ存ス之ヲ刺戟スル時ハ兩側聲帶ノ完全ナル内轉ヲ營ミ刺戟去ルニ至ル迄持續ス又其週圍ニ偏セル部分ヲ刺戟スルトキハ内轉スルコト少ナク中心ヲ距ルニ從テ益々不充分ニシテ其最外縁ノ刺戟ニ在テハ聲帶ハ只

喉頭呼吸中樞

屍位ヲ取ルニ過ギズ但シ一側ノ中樞ヲ刺戟スルトキハ兩側ニ其作用ヲ現ハスト雖ドモ一側ヲ破壞滅却スルモ之ニ依テ毫モ其影響ヲ現ハスコトナシ刺戟極メテ強烈ナルカ若クハ長ク持續スルトキハ純然タル聲帶ノ痙攣ヲ發シ漸次ニ周圍ノ筋ニ及ボシ顔面ヨリ頭部頭蓋ニ及ヒ上肢ニ蔓延ス之ニ反シテ呼吸ニ對シテ緊要ナル聲帶ノ外轉ハ腦皮質ノ刺戟ニ依テ催起セラル、コトナシ但シ猫及ヒ種々ノ幼獸ハ例外ニ屬シテ各々特異ノ性質ヲ有スルガ如キヲ見ル
 喉頭呼吸機ニ固有ノ中樞ハ延髓球ニシテ胸廓呼吸機ノ中樞トハ絶エテ關係ナシ而シテ其作用ハ兩側性ナリ蓋シ兩側性トハ延髓球ノ一側ニ於テ其一部ヲ刺戟スルトキハ兩側ニ吸氣(聲門開大)及ビ呼吸聲門閉鎖ノ運動ヲ現ハスヲ云フ其他延體ニハ又喉頭ノ發聲中樞ヲ有ス今試ニ索狀體及ヒ其内縁ヲ第四腦室ノ下半分ニ向テ鉛直線ノ方向ニ刺戟スルトキハ同側ニ於ケル聲帶ノ内轉ヲ現ハス但シ爰ニ尙ホ一ノ疑ヲ存スベキ者アリ即チ此作用ハ果シテ能ク其小ナル

中樞ヲ刺戟シ得タルニヨルト做ス可キヤ或ハ迷走神經中ニ混入スル所ノ遠心性纖維ノ刺戟ヲ被フルニ依ルト做ス可キヤノ疑問是ナリ腦皮質ヨリ延髓ニ達シ皮質中樞ヨリ感應ヲ延髓球ノ喉頭裝置ニ傳達スル所ノ纖維ハ放線狀冠纖維中ヲ經テ内囊ニ向フモノニシテ其呼吸作用ヲ司ル所ノ纖維ハ初メ前節中ヲ過ギ下行シテ殆ド膝部ニ至ルベシ又發聲作用ヲ司ル纖維ハ同ジク膝部ヲ通過スルカ或ハ其直後ヲ過ギテ後節中ニ入ルベシ此等ノ纖維ヲ刺戟スルトキハ常ニ兩側性作用ヲ呈スルナリ

第二章 原因總論

喉頭ハ身體ノ淺表ニ位スルガ故ニ他ノ内臟ニ比スレバ外傷ヲ被リ易シ而シテ鼻腔ハ呼吸器ニ於ケル一ノ防護器ニシテ先ヅ吸入スル所ノ大氣ヲ適宜ニ溫メ所合ノ不潔物ヲ除去スルノ用ヲナスト雖ドモ此效用ハ敢テ充分ナルコト能ハザルガ故ニ總テ大氣ニ異常アル

トキハ直ニ其害力ヲ喉頭粘膜ニ及ボスコト最多シ即チ體外ノ溫度急ニ昇騰シ若クハ低下スルカ又ハ空氣ノ過度ニ濕潤スルカ若クハ甚ダシク乾燥スルトキハ喉頭ノ疾患ヲ誘發ス可シ或ハ吸入氣中ニ固形質刺戟性ノ瓦斯若クハ蒸氣ヲ混在スルトキハ亦同ジク傷害ヲ致ス可シ加之隣接ノ食道ヨリシテ危害ヲ喉頭ニ及ボスコトアリ即チ吸息時ニ方テ偶々嚥下作用ヲ營ムトキハ食物或ハ飲液ハ行路ヲ誤テ喉頭ニ入り哽塞スルコトアリ其他過熱ノ飲食物亞爾固保兒性飲料ノ誤用腐蝕性藥ノ飲喫ニ於ケルガ如キハ皆ナ多少喉頭ノ病的變狀ヲ誘發ス時宜ニ依テハ咽喉ノ病的機轉蔓延シテ喉頭ニ及ビ又時トシテハ同一ノ原因ニヨリテ同時ニ此二部ノ疾病ヲ起セシニアラザルヤ否ヤヲ判知シ難キコトアリ蓋シ此二部ハ相連續スルガ故ニ咽喉ノ疾病ハ漸ク喉頭ニ傳播スルコトアルハ敢テ疑ヲ容レザル所ナリ其他食道ノ疾患ハ直接若クハ間接ニ喉頭ニ波及シ若クハ隣部ニ腫瘍ヲ生ズルトキハ或ハ喉頭ニ蔓延シ或ハ其壓迫ニ依テ喉頭

ノ狹窄ヲ起シ靜脈血ノ歸流ヲ妨グ爲ニ粘膜ノ肥大若クハ水腫ヲ起シ又喉頭ニ分布スル神經ノ障礙ニ依テ其麻痺ヲ致クサシムルコトアリ

感冒

感冒モ又喉頭病ノ原因ト看做ス可キモノニシテ重大ノ關係アリ例之身體溫暖ナルニ方テ急ニ冷氣ニ觸ル、カ又ハ冷濕ナル天候ヲ冒シテ感冒スルトキハ乍チ喉頭疾患ヲ起シ若クハ冬季寒風凜烈ナル時ニ於テ流行性疾患ノ最多キハ世ノ通知スル所ナリ

喉頭ノ過勞

喉頭疾患ノ近因トシテ算ス可キハ喉頭ノ過勞ナリ則チ演說家若クハ唱歌師等ハ常ニ聲音ヲ勞シテ攝養ヲ顧ミザルガ故ニ一時性若クハ持續性ノ喉頭疾患ニ罹ル者多シ又別ニ症候的喉頭疾患ナル者アリ乃チ麻疹痘瘡猩紅熱室扶斯馬鼻疽結核或ハ微毒ニ發スル者はナリ蓋シ是等ハ寧ロ傳染性喉頭疾患ト稱スルヲ適當トス
其他局發及ヒ汎發ノ疾患ニシテ喉頭ヲ侵ス者アリ尙ホ本書下卷ニ於テ詳論セントス宜シク就テ見ルベシ

素因

各人ニ於テ喉頭疾患ノ素因ヲ爲ス者アリ例之反覆此症ヲ患ヘタル者百日咳後ノ者體質虛弱ノ者平素靜坐ヲ事トシ且ツ坐業家ニシテ身體虛弱ノ者等ハ之ニ罹リ易ク年齡及ビ體質モ亦大ニ關係スル所アリ而シテ格魯布假性格魯布聲門痙攣等ノ如キハ小兒ニ固有ノ疾
病ナレドモ總テ喉頭病ハ成年ノ男子ニ於テハ女子及ビ小兒ニ比スルニ頗ル多シ是レ男子ハ概シテ上文掲グルガ如キ諸障礙ニ遭遇スルコト女子及ビ小兒ヨリモ多キニ因ルナリ

第三章 診法

喉頭病ノ審案識別ヲ爲スニ行フ所ノ検査法種々アリ就中主要ノモノハ喉頭鏡検査法ナリ而シテ喉頭鏡検査ニ依テ得タル成績ハ診斷上最モ緊要ナルガ故ニ今之ヲ冒頭ニ掲グ

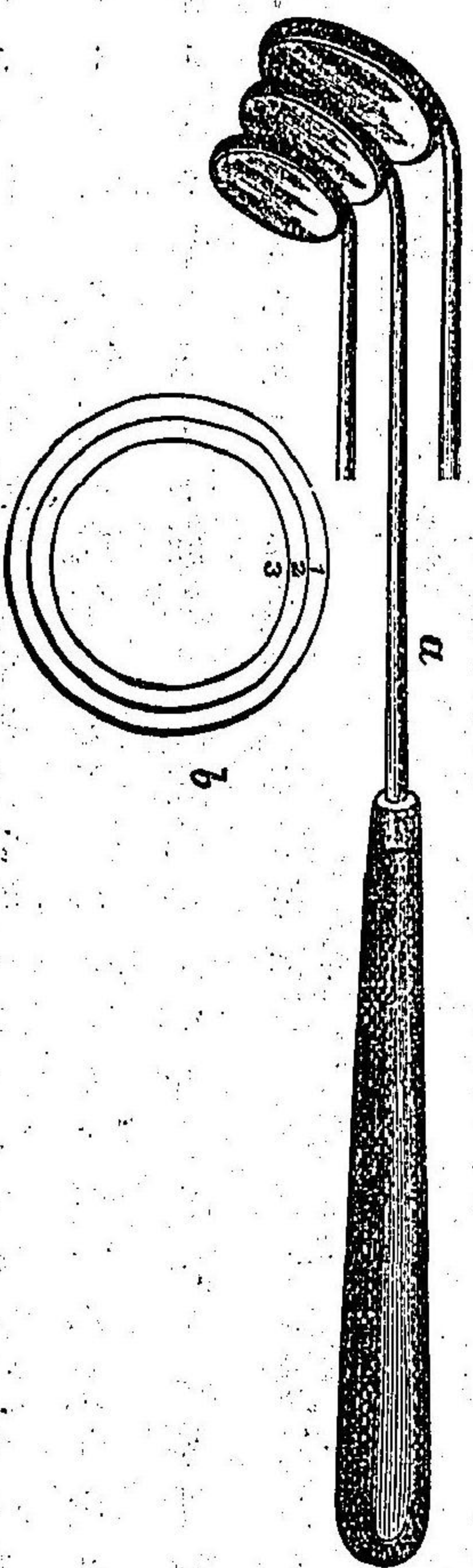
第一項 喉頭鏡検査法

喉頭鏡

喉頭ノ内景ヲ檢スルニハ容易ク咽頭内ニ送入スルヲ得ベキ小玻璃鏡即チ喉頭鏡ト名クル者ト完全ナル光源ヲ要ス

(一)喉頭鏡 (第十七圖a及b)ハチユルク氏ノ創製スル所ニシテ方今ニ至ルモ尙ホ一般ニ之ヲ賞用ス此鏡ハ百二十度乃至百二十五度ノ角度ヲ以テ曲折セル長莖ニ固着ス其鏡ハ清淨ナル無色ノ硝子

第七十圖



板ヲ以テ製シ良好ノ銀蓋ヲ塗布シタル者ニシテ鏡ノ徑ハ一乃至三仙迷ニシテ大小三個ヲ具フベシ鏡ノ厚サハ僅ニ一密迷餘ニ過ギザルヲ良トス而シテ之ヲ用ユルニハ先ヅ大ナル者ヲ撰ブベシ若シ之

金屬製喉頭鏡

ニヨリテ目的ヲ達スルコト能ハザルトキハ更ニ順次小ナル者ヲ用ユルヲ良トス是レ鏡面愈々大ナレバ從テ愈々明カニシテ且ツ喉頭ノ内部ヲ容易ク見得ルノ利アレバナリ又莖ノ太サハ二密迷ニシテ長サハ十五乃至二十仙迷ナル可ク金屬製ニシテ甚ダ硬ク使用ノ際撓屈スルコトナカラシメ要ス又莖ノ下端ニハ更ニ柄ヲ附ス柄ハ長サ大約十仙迷ニシテ木材若クハ象牙ヲ以テ作ルヲ最良トス而シテ莖ト柄トノ接際ハ頗ル堅固ニ螺接シテ毫モ動搖ス可ラズ而シテ之ヲ一小匣ニ納メテ携帶ニ便ナラシメ且ツ一個ノ柄ヲ用ニ臨デ大小數個ノ鏡ニ螺接スルトキハ更ニ輕便ナリ

金屬製ノ鏡ハ今尙ホ用フル者アリ其映像ハ敢テ分明ナラザルニ非ズト雖ドモ實際上ニハ種々ノ不利アリ即チ極メテ僅微ノ濕潤ニ逢フモ乍チ曇濁鏽蝕シ藥液ニ觸レテ損害シ易ク單ニ淨拭スルモ動モスレバ搔痕ヲ遺ス等是ナリ又硝子製鏡ニ在テモ坊間販ク所ノ劣品ハ多クハ用ニ耐ヘズ故ニ之ヲ購求スルニハ充分ニ試檢セザル可ラ

固定喉頭鏡

ズ即チ硝子ハ全ク無色ニシテ白紙ヲ映寫スレバ白色ニシテ毫モ綠色若クハ青色ヲ帶ブ可ラズ鏡ノ厚サハ僅ニ一密迷強ニシテ金屬輪ハ鏡縁ニ密着シテ固ク周匝シ莖ハ堅強ニシテ撓屈シ易カラズ柄ハ小ニ失セズ又滑澤ナラザルヲ要ス又鏡ノ圓形ナル者ハ最モ適當ナリ往々卵圓形若クハ多角形ノ者アリト雖ドモ敢テ有要ナラズローゼル氏ハ方今專ラ行ハル、喉頭鏡ニ代フルニ固定喉頭鏡ヲ賞用ス氏ハ喉内ニ在テ動運セザル物體ハ總テ鏡中ノ反射像移動スル者ニアラザルノ理ニ基テ一種ノ裝置ヲ設ケ鏡莖ヲ患者ノ頭部ニ固結シタリ而シテ其裝置ハ特別ノ鏡ト之ヲ支持スル具トノ二種ヨリ成リ持鏡子ハ巾一仙迷半ノ強キ撥條ニシテ單純ノ推送器ニ依テ自在ニ伸縮シテ頭ノ大小ニ適合セシムベク其兩端ニハ扁平ノ壓枕ヲ附シ其一ハ後頭ニ當テ一ハ螺旋ヲ以テ眉上ニ壓抵ス又鏡ハ百二十度ノ角度ニ屈曲セル撓柔ナル銀製ノ彎杆ニ附着ス而シテ之ヲ使用スルニハ先ヅ彎杆ノ一端ヲ額上ノ壓枕ニ螺定シ尙ホ稍々回轉運動

ヲ許スヲ度トナシ左ノ方法ヲ以テ送入スベシ即チ術者ハ患者ノ左側ニ立チ此裝置ノ兩壓枕ヲ把リ頭ノ長徑ヨリモ稍々廣ク之ヲ離開シ患者ニハ大ニ口ヲ開張セシメ快手ク鏡ヲ口内ニ送入シ軟口蓋ノ下部ニ達シテ傾斜ノ位置ヲナサシメ以テ會厭及ビ喉頭ノ一部ヲ見ルニ適當ナラシム但シ鏡ノ位置ヲ適當ナラシムルニハ指頭ニテ鼻前ニ在ル所ノ鏡莖ヲ側方ニ押送スルカ若クハ額上ノ壓枕ヲ僅ニ上下セシムルヲ以テ足レリトス此ノ如クスルトキハ莖ハ上唇若クハ門齒ニ緊ク接着スルガ故ニ鏡面ノ位置ヲ正フシ得ベク且ツ檢者ハ自己ノ頭ヲ或ハ舉上シ或ハ低下シ或ハ側方ニ傾ケ或ハ廻旋スルトキハ患者ヲ煩ハスコトナクシテ能ク喉頭ノ全部ヲ目スルヲ得ベシ殊ニ此鏡ハデモンストラチヲシテ爲スニ適當ニシテ數多ノ人ヲシテ同一患者ニ就テ順次ニ之ヲ檢セシムルヲ得ルノ利アリ但シ此器ハ必ズシモ要用ナラズ且ツ診斷上及ビ治療上ニ於テハ敢テ利益アル者ニアラズ

光源

(二) 喉頭ノ映像ヲ明瞭ナラシムルニハ設置宜シキヲ得タル良全ノ光源ヲ要ス否ラザレハ喉頭検査ノ目的ヲ達スルコト能ハズ而シテ光線ハ雷ニ強弱ノ適度ナルヲ要スルノミナラズ可及的其方向ニ注意シテ適良ナラシメザル可ラズ理學上ノ元則ニ據ルニ光線ノ反射鏡面ヲ射ルヤ其反射ノ角度ハ常ニ射入ノ角度ト同一ナルガ故ニ喉頭ノ内部ヲ照明シテ檢セントスルニハ必ず鏡ヲ咽頭後壁ニ置キ地平線ニ對シテ一定ノ角度ヲ保タシメザル可カラズ其角度ハ各人ニ於テ多少異ナラザルヲ得ズト雖ドモ其中等ヲ取ルトキハ殆ド四十五度強ナリトス而シテ喉頭内ニ射入スル光線ハ再ビ同路ヲ經テ射出スルガ故ニ喉頭中最モ明ガニ照明セラレタル部分ノ映像ヲ明視セント欲セバ檢者ハ眼ヲ可及的患者ノ口内ニ射入スル光線束ノ中心ニ近ヅカシムルヲ要ス蓋シ照明ノ際光線ノ直チニ喉頭鏡上ニ落射スル者ハ僅ニ其一部ニ過ギズ且ツ其更ニ反射スルト諸部ニ吸收セラルトニ依テ光力益々減衰スルガ故ニ檢者ニ必要ナル光力

ヲ得ント欲セバ頗ル強度ノ光源即チ日光電氣燈光若クハ凸面レンスヲ以テ集合セル燈光ヲ用ヒザル可ラズ又光源ハ之ヲ患者ノ口前ニ置クコト能ハザルガ故ニ特別ノ裝置ヲ以テ凹面鏡若クハ「レンス」ト凹面鏡トヲ用ヒテ光線ヲ集メ之ヲ口内ニ射入セシムルヲ要ス

第二項 直射光線照明法

太陽光線

放散性日光

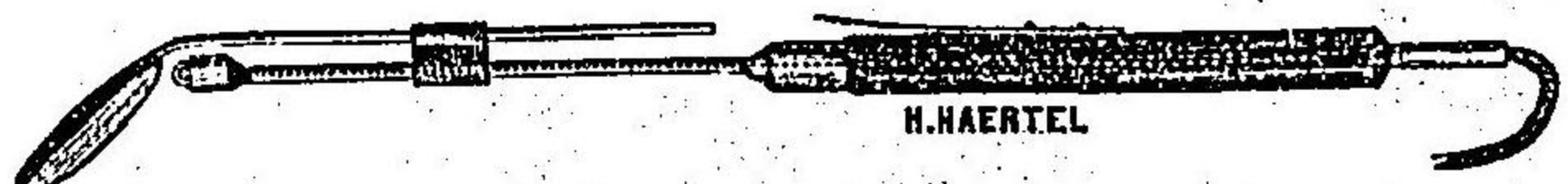
(一) 太陽光線ハ美麗ニシテ眞平タル喉頭ノ映像ヲ現出スル者ニシテ人爲光線ハ一モ之ニ如クモノナシ
 太陽ノ位置適良ナルトキハ患者先ツ眼ヲ閉ヂテ其眩耀ヲ防キ光線ヲシテ直チニ口内ニ射入セシム可シ但シ此法ニ於テハ檢者自體ヲ以テ光線ヲ遮リ且ツ患者ヲシテ一定不變ノ體位ヲ保持セシムルコト困難ナルノ不利アリ是故ニ通例此直射法ヲ用フルコトナク後章ニ述ブル所ノ太陽光線反射法ヲ賞用ス
 放散性日光モ亦太陽光線直射法ニ於ケルト同一ノ不利アリ且ツ光

電氣光線

鏡電氣喉頭

力充全ナラザルガ故ニ用ニ供シ難シ
 (二)電氣光線之ヲ用フルニ二法アリ一ハ小キ熾火燈ヲ喉頭鏡ト
 共ニ口内ニ送リ一ハ口外ニ設クル電氣燈ノ光線ヲ口内ニ射入セシ
 ムルナリ而シテ甲法ニ於テハ小キ熾火燈所謂ミグノン氏ランプヲ
 喉頭鏡ニ附シテ直チニ咽頭内ニ送入スルナリ但シ此喉頭鏡ハ柄ノ
 造構尋常ノ喉頭鏡ト異ナリ象牙ヲ以テ作り其一端ニ長サ七仙迷太
 サ一密迷半ノ銀製ノ莖ヲ附シ莖ハ更ニ象牙製ノ鞘ヲ被ヒ茲ニ銃槍
 關節ニ依ル裝放自在ノ熾火小燈ヲ附着ス而シテ熾火燈ハ二條ノ銅
 線柄ノ全長ヲ通過スル者ノ兩端ヲ白金線ニテ連結シテ作ルナリ又
 柄ノ他端ニハ電氣導線ヲ繋キテ電池ト連ヌ但シ電池ト燈トノ間ハ
 直接ニ通ズルコトナク柄上ノ鈕子若クハ撥條ヲ壓スルトキハ始メ
 テ電流閉鎖シ以テ隨意ニ發火セシムルヲ得ルナリ又之ヲ用フルニ
 方テハ燈ト鏡面トノ對稱ヲ適宜ニシ以テ正シク映像ヲ現ハサシム
 ルヲ要ス(第十八圖)此電氣喉頭鏡ヲ以テスルトキハ検査法頗ル簡單

第十八圖



ニシテ光線ハ常ニ鏡ノ運動ニ伴フテ能ク諸部ヲ照スコ
 トヲ得ルノ利アリト雖ドモ單ニ燈ニ近接セル部位ノミ
 充分ニ強ク照明シテ他部ハ比準的暗淡タルハ亦以テ一
 ノ缺點ト做スベシ
 他ノ一法ハ燈ヲ患者ノ口外ニ設置スルナリ即チ額帶若
 クハ鏡持子ヲ用ヒテ燈ヲ檢者ノ額上ニ固定シ導線ヲ以
 テ電流ヲ通ジテ發火セシメ燈前ニ凸面「レンス」ヲ裝置シ
 テ放散スル所ノ光線ヲ盡ク集合シテ口内ニ射入セシム
 ベシ
 喉頭検査法ニ用フル電氣燈種々アリ就中其實用ス可キ
 ハスタイングットテルヤコブソン及ビマイソン氏等ノ
 考案ニ係ル者トス

スタイン氏燈

スタイン氏燈ハ形狀恰モ雙眼鏡ノ如クニシテ兩眼鏡ノ間ニ凸面「レ
 ンス」ヲ有スル熾火燈ヲ裝置スルモノニシテ眼鏡ニハ各々黒キ紙筒

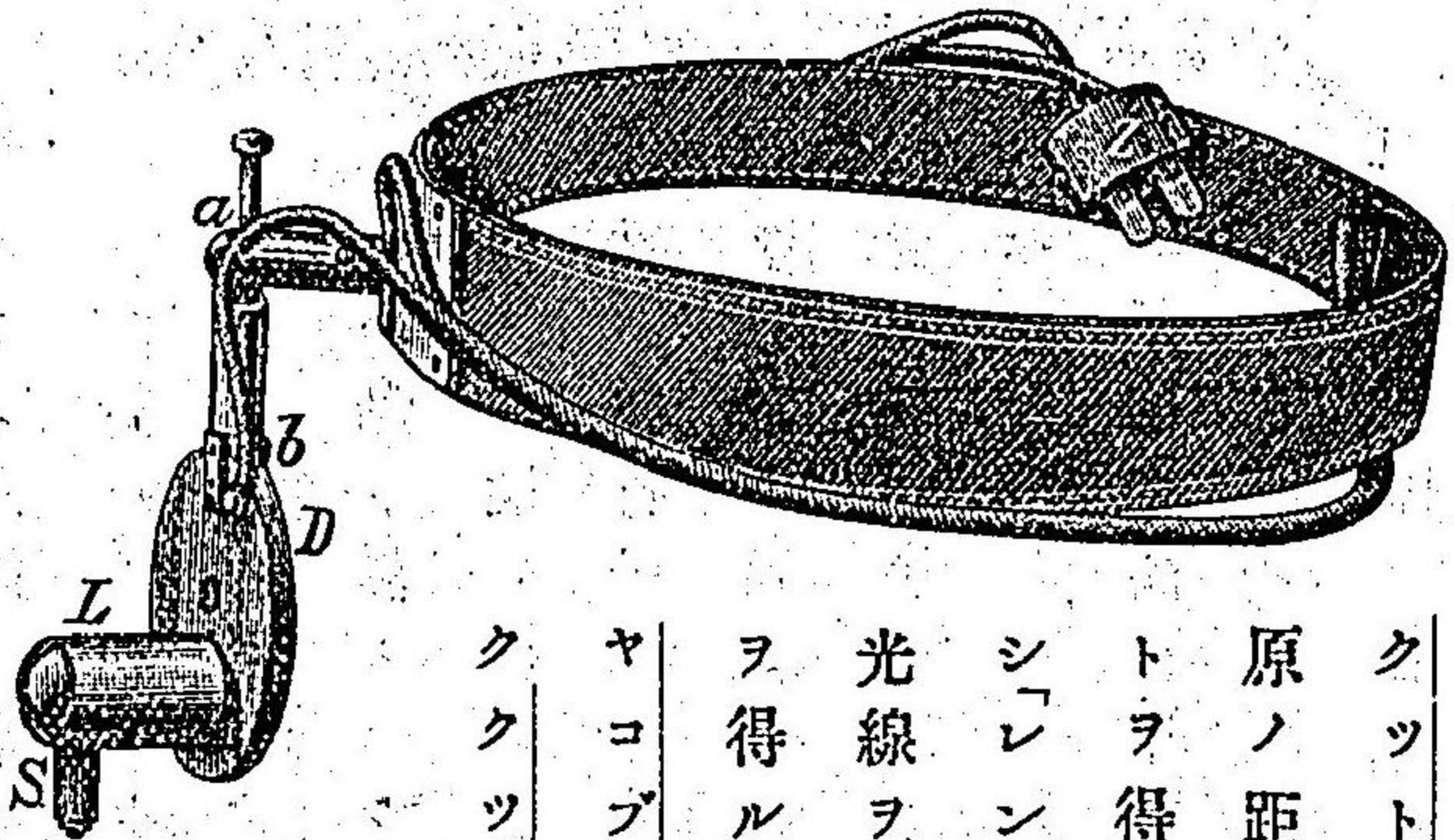
クツト子ル氏
燈

ヤコブソン氏
燈

ヲ附シテ燈及ヒ外圍ヨリ來ル光線ノ檢者ノ眼中ニ射入スルヲ遮防
ス

クツト子ル氏燈ハ活動性ノ「レンス」ヲ具ヘ光
原ノ距離ニ應ジテ適宜ニ光線ヲ集合スルコ
トヲ得且ツ其支柱ニ設クル關節ニ依テ運轉
シ「レンス」ヲシテ種々ノ傾斜ヲナサシメ以テ
光線ヲ左右上下ニ向テ自在ニ放射セシムル
ヲ得ルナリ

ヤコブソン氏燈ハ其形狀第十九圖ニ示ス如
ククツト子ル氏燈ト異ナル所左ノ如シ即チ
中央ニ穿孔セル障板Dヲ以テ劇光
ノ檢者ノ眼中ニ入ルト火熱ノ額上
ヲ侵ストヲ防ギLナル金屬筒ノ内
面ヲ黒抹スル者ヲ以テ亂光ヲ吸收



第十圖

セシム而シテ此筒ニハSノ莖ヲ附シ之ヲ燈ヨリ除去スルニ方テ火
傷ヲ蒙ルコトナカラシム又障板ニハ關節アリテ燈ヲ種々ノ方位ニ
轉ゼシムルノ用ニ供ス

マイソン氏燈

マイソン氏燈ハ以上掲グル者ニ比スレバ稍々小ニシテ最モ簡單ナ
リ隨テ價モ亦自ラ廉ナリ
電氣燈光ヲ用ユルニハ適當ノ電源ヲ要ス而シテ此レニハ若干ノ電
池ヲ用フ但シ此電池ハ速カニ分極スルニ依テ電力終始平等ナラズ
漸々光力減衰シ爲ニ一時間檢査ヲ休メ電池力ヲ回復セシメザル可
ラズ蓋シ大ナル電池ヲ用ユルトキハ此弊ナシト雖ドモ其價甚ダ貴
ク且ツ運搬ニ便ナラズ加之數々藥液ノ交新ヲ要スルガ故ニ頗ル煩
ニ堪ヘザルナリ

蓄電氣

電氣燈ニ關スル重大ナル進步ハ蓄電器ノ應用ナリ此器ハ殊ニ携帶
ニ便ニシテ價モ亦貴カラズ而シテ此器ハゼーリヒマン及ビヤコブ
ソン氏ノ製作ニ係ル者ヲ以テ良トス蓋シヤコブソン氏蓄電氣ノ長

電氣燈ノ利益

所ハ隨意ニ電流ノ強弱ヲ調節シ得ルニアリ但シ蓄電器ハ電氣燈會社ノ存セザル地ニ於テハ之ヲ用フルコト能ハザルハ固ヨリ論ヲ俟タザルナリ

喉頭検査ニ電氣燈ヲ應用スルハ其利益極メテ大ナリ蓋シ電氣燈ノ光ハ白色強烈ニシテ然モ穩和ニ最モ太陽ノ光線ニ近似ス故ニ喉頭ノ映像亦殆ド天然ノ色ヲ現ハシ且ツ燈ヲ檢者ノ額上ニ結着スルガ故ニ若シ患者不意ニ頭部ヲ轉動スルコトアルモ之ニ隨テ容易ニ追跡スルヲ得ベク又未熟ノ徒ニアリテモ光線ヲシテ正シク喉頭鏡上ニ落射セシムルニ敢テ特別ノ習練ヲ要セザルノ利アリ加之此照明法ニ於テハ光線ノ射道ト視線ト相一致シテ殆ド一平面中ニ在ルガ故ニ反射スルニ及デ眼中ニ達セザル光線ハ僅ニ一小部分ニ過ギズ此他更ニ電氣燈ノ長所ヲ擧グレバ兩眼ヲ用ヒテ全く自在ニ覗フガ故ニ所見ノ物像立體的トナリ且ツ檢者ト患部トノ間大ニ近接スルヲ得ルモ亦一利ナリ但シ茲ニ短所ト看做スヘキハ善良完備ナル節

瓦斯石油燈

水「レンス」

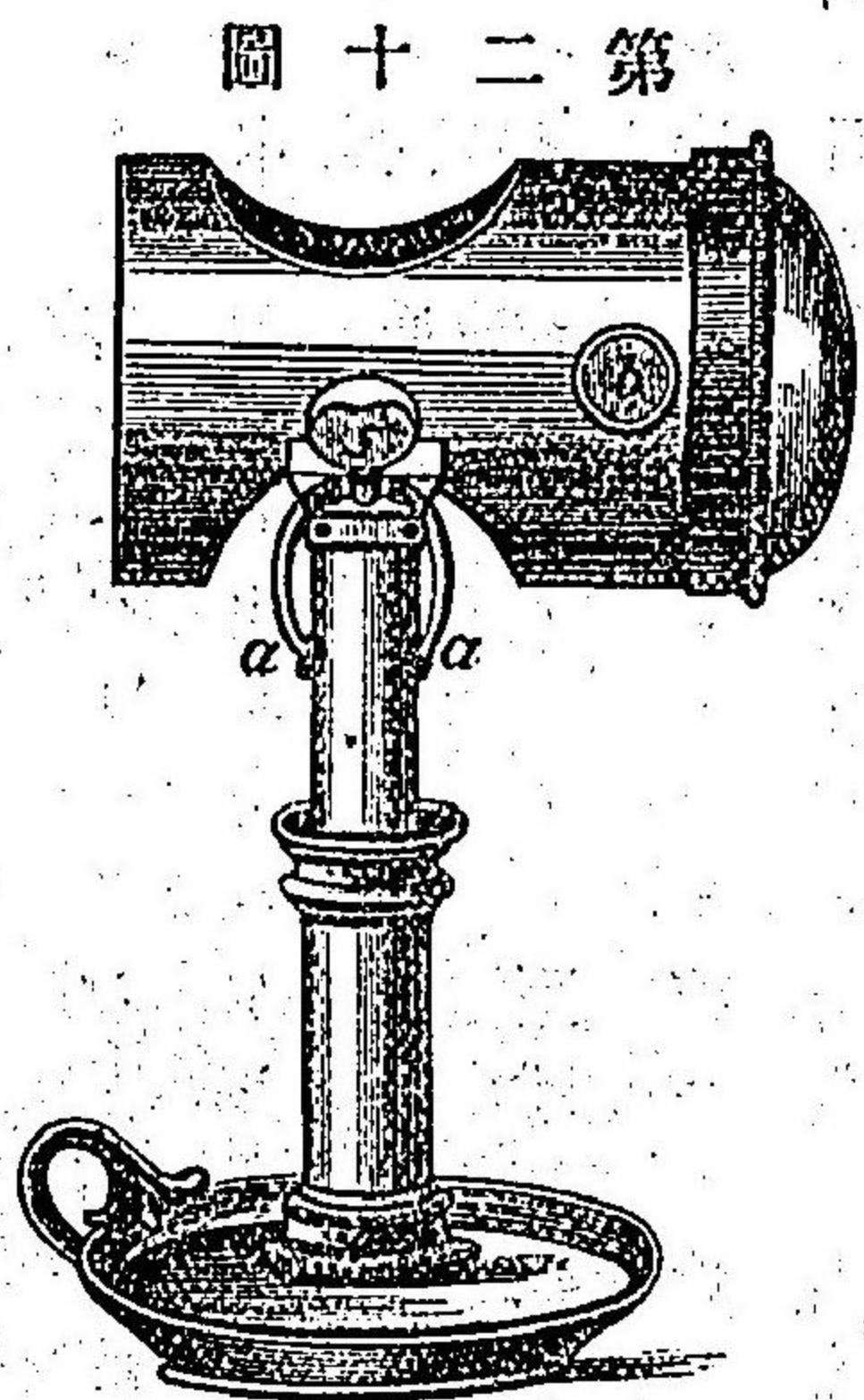
制器ノ貴價ナルト之ガ修繕等ニ多費ヲ要スルトニ在リ

(三)弱力ノ光源

即チ石油燈瓦斯燈等ヲ用ヒテ直接照明法ヲ行フ

ニハ必ズ「レンス」ヲ以テ光線ヲ集束シ射入セシメザル可ラズ即チ凹面「レンス」ヲ取り之ヲ燈火ノ前ニ懸ストキハ之ヲ通過スル光線ハ放散セザルガ故ニ其他側ニ於テ頗ル明カナル一點ヲ現出ス可シ則チ此光線ヲ以テ喉頭ヲ照明シ且ツ其理ニ基テ喉頭検査裝置ヲ製作セル者アリ就中其最モ簡便ナルハステルク氏ノ水「レンス」(Wasscilinse)ニシテ水若クハグリセリンヲ硝子球ニ充テタル者ナリ(又時宜ニ依テハ水「レンス」ニ代ユルニ水ヲ充テタル硝子壘ヲ以テスルモ可ナリ)氏ノ說ニ據レハ水「レンス」ハ其燒點ノ距離大ナルガ爲ニ檢者ハ必ズシモ光源ニ對シテ一定ノ距離ヲ保ツヲ要セザルノ利アリトフアウエル氏等ハ複凸「レンス」ヲ直チニ燈ニ附シ小机ノ上ニ立テ、患者ノ前ニ置キ檢者ハ其他側ニ對坐シ喉頭鏡ヲ取テ患者ノ口中ニ送入セリ且ツ燈ニハ隔障ヲ附スルヲ以テ検査ノ際燈ニ近ツクモ燈光ノ眼

中ニ射入スルノ煩ナシ又マツケンジ氏ハ第二十圖ニ示スガ如キ



第十二圖

集光器ヲ作レリ此器ハ諸種ノ燈ニ通用シ得ル者ニシテ長サ大約九仙迷口徑六仙迷ニシテ一端閉塞セル金屬製ノ小圓筒ニシテ他端ニハ直徑六三仙迷ノ單凸レンスヲ嵌シ其平面ハ光源ニ對ス又圓筒ノ上下壁ニハ各々口徑大約五七仙迷ノ圓孔ヲ開ク其孔ハ稍々閉鎖セル筒底ニ偏シ其二孔ノ中點ヲ通ズル鉛直線ハレンスノ平面ヲ去ルコト大約六三仙迷ナリ而シテ光線此距離ヨリレンスヲ通過スルトキハ殆ト併行ノ方向ヲナス者トス又下壁ノ孔ニハ二個ノ半環狀臂ヲ附シ其臂ハ螺旋ヲ以テ石油燈尋常ノ蠟燭若クハ瓦斯燈ニモ隨意ニ固定スルヲ得セシム

第三項 屈折光線照明法

レンス照明法ハ良好ノ光明ヲ得ルノ利アリト雖ドモ亦次項ニ記載スル凹面鏡ノ簡單輕便ナルニ如カズ

屈折光線照明法ニ於テハ光源ヲ患者ノ口前ニ置カズ側方若干

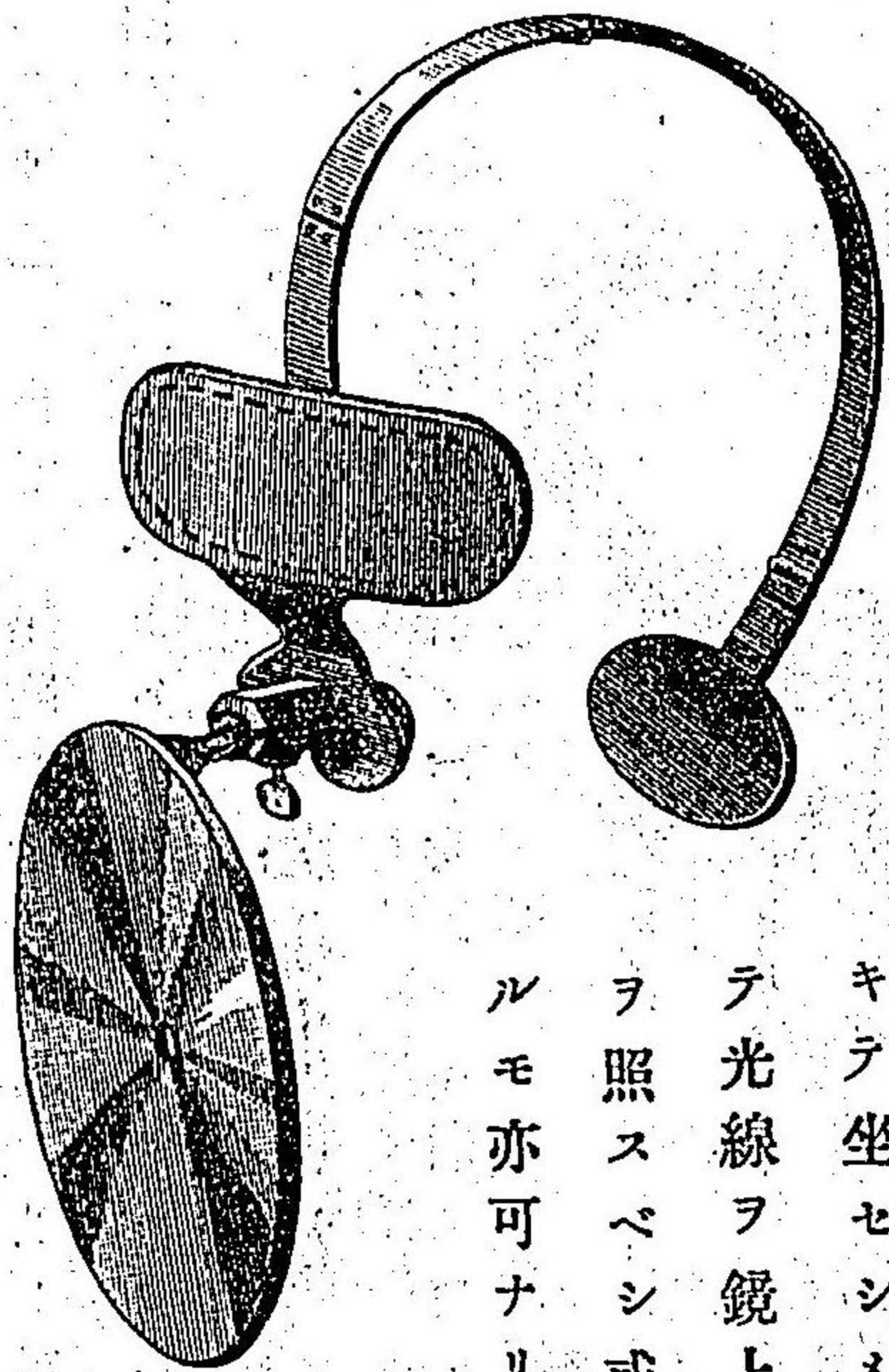
ノ距離ニ設置シ平面鏡若クハ凹面鏡ヲ以テ之ヲ患者ノ口内ニ返照セシメ兼テ光線ヲ集合セシムルヲ良トス通例反射器トシテ用フル者ハ直徑八乃至十仙迷ニシテ中央ニ一小孔ヲ穿テル鏡ナリ而シテ其光源

第十二圖



ニ日光ヲ用フルトキハ平面鏡ヲ佳トシ人工光源若クハ散漫性日光ナルトキハ凹面鏡ヲ撰ブ可シ且ツ又反射鏡ハ球關節ヲ設ケテ隨意ニ鏡面ノ方位ヲ轉ズルコトヲ得ヘカラシメ之ヲ檢者ノ額上ニ固結スルヲ良トス之ニハ眼鏡支持器ヲ用ヒ或ハ更ラニ良善ナルハクラールメル氏ノ額帶若クハ所謂米式鋼鐵製撥條第二十一圖及第二十二圖ナリ而シテ日光ヲ以テスルトキハ平面鏡ヲ取リ患者ヲ太陽ニ背

圖 二 十 二 第



キテ坐セシメ檢者ハ之ニ對坐シテ光線ヲ鏡上ニ受ケ反射シテ口ヲ照スベシ或ハ又凹面鏡ヲ用ユルモ亦可ナリト雖モ此時ハ燒點距離ノ最モ大ナル者(一迷以上)ヲ撰ブベシ又或ハ時宜ニ依テ人工光源照明

凹面鏡

法ニ於ケルガ如キ燒點距離ノ小ナル反射鏡ヲ用ユルコトアリト雖ドモ此時ニ在テハ燒點ヲ喉頭内ニ結バシメズ燒點前後ノ放散部ヲ以テ喉頭ヲ照ス可シ否ラサレバ光力强キニ過ギ檢者ノ眼ヲ眩耀セシメ且ツ患者ヲシテ劇熱ヲ感ゼシムルノ害アリ

人工的光源

ヲ用フ而シテ燒點距離ハ此鏡ニ依テ反射セル光線ノ盡ク集リテ宛モ喉頭内ニ於テ正然タル燈火ノ映像ヲ現出スルヲ適度トス而シテ檢者ノ眼ハ反射鏡ノ後方ニ於テ患者ノ口ヲ距ルコト大約十四仙迷ニシテ之ニ口ヨリ喉頭鏡ヲ送ル可キ咽頭後壁ニ至リ更ニ下テ聲門破裂ノ平面ニ至ルノ距離各々大約八仙迷ヲ合算スル時ハ三十仙迷トナル故ニ燈光ノ映像ヲ聲門破裂ノ處ニ生ゼシメンニハ反射鏡ノ燒點距離モ亦同ジク三十仙迷ヲ有セザル可ラズ而シテ此距離ハ通常例正視眼ニ物體ヲ明視スルニ適スル者ナリ蓋シ喉頭ヲ照明スルノ用ヲナス光線ハ特リ喉頭鏡上ニ落射セル者ノミナレバ假令鏡上ノ

光像ヲ大ナラシムルモ固ヨリ光力ヲ増サシムルコト能ハズ之ニ反シ其光線ヲ小ナラシムルトキハ同量ノ光線濃縮ス可キガ故却テ光力强トナル是ヲ以テ検査ヲ行フニ方テハ常ニ必ズ光像ヲ小ナラシメテ光源ト同大若クハ更ニ之ヨリ小ナラシムルヲ要ス而シテ光源ト光像トヲシテ同大ナラシメンニハ凹面鏡ヨリ喉頭及ビ燈ニ至ルノ距離ヲシテ各々燒點距離ノ二倍トナサンコトヲ要ス即チ凹面鏡ノ喉頭ヲ距ルコト三十仙迷ナルニヨリ光源ト同大ノ光像ヲ現ハサシメンニハ燈モ亦三十仙迷ノ距離ニ置キ燒點距離十五仙迷ノ反射鏡ヲ用フヘシ縮小セル光像ハ燒點距離ト其二倍大ナル距離トノ間ニ現出ス可キ者ナルガ故ニ此光像ヲ以テ喉頭内ヲ照サント欲セハ燒點距離十五仙迷ヨリ三十仙迷ニ至ルマデノ凹面鏡ヲ要スル者ニシテ就中十五乃至二十五仙迷ノ燒點距離ヲ有スル凹面鏡ヲ最モ適當トナスナリ

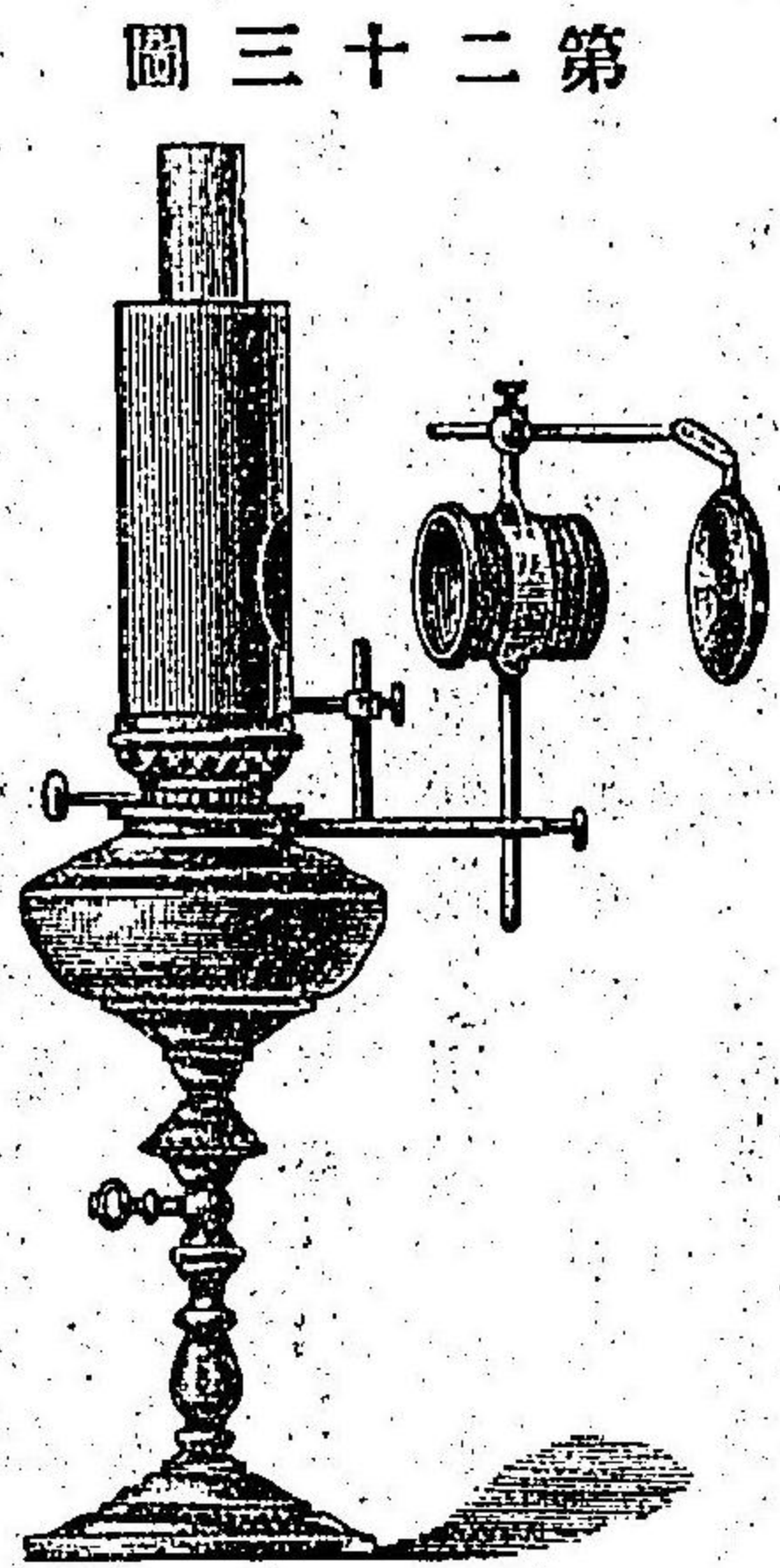
但シ照明ノ際其最モ明カナル處ハ聲門上ニアルヲ以テ其上方及ビ

下方ハ光力稍々弱キコト勿論ナリト雖ドモ敢テ不充分ナルコトナシ殊ニ檢者己レノ眼ト患者ノ口トノ距離ヲ適宜ニ變換シテ此差誤ヲ調節スルトキハ益々其用ヲ全カラシムベシ檢者若シ近視又ハ遠視ニシテ其眼ヲ三十仙迷ノ距離ニ適合セシムルコト能ハザルトキハ適當ノ眼鏡ヲ用ヒテ正視ノ度トナサザル可カラズ光線學上ノ原則ニ基テ縮小セル光像ヲ正格ナラシメンニハ光源ノ位置モ亦等閑ニ附スベカラズ例之凹面鏡ノ燒點距離増大スルトキハ光源ノ距離モ亦隨テ増加セシムルヲ要スルガ如シ現ニ一般ニ賞用スルガ如キ燒點距離十五乃至二十五仙迷ノ反射鏡ニ在テハ光源ノ距離ハ三十四乃至百五十仙迷ノ間ニアリトス此ノ如ク反射鏡ノ燒點距離ヲシテ照明ニ適當ナラシメンニハ之ヲ調製スルニ方テ充分ニ試験セザルベカラズ其試験法ハ散漫性日光ヲ以テ尙ホ能ク之ヲナスコトヲ得即チ凹面鏡ヲ取テ遠隔ノ物體例之ハ對家ノ窓戸若クハ烟突ノ反射性影像ヲ結成セシメ其影像ト鏡面トノ距離ヲ計ルカ或ハ骨牌ノ

「レンス」及「凹面鏡」併用

中央ヲ剪リテ例之ハ十字形ノ罅隙ヲ作り之ヲ燈火ノ一側ニ挿テ固定シ以テ十字隙ヲシテ正シク火焰ノ前ニ當ラシメ此ヨリ射出スル光線ヲ凹面鏡ニ受ケ更ニ反射シテ其影像ヲ骨牌上ノ十字隙ニ近接シテ映ゼシメ鏡ヲ進退シテ鮮明正格ノ映像ヲ生ズルニ至テ固定シ此ニ於テ鏡ト骨牌トノ距離ヲ測ルベシ此距離ハ凹面鏡彎曲ノ半徑ニ相當スルモノニシテ即チ燒點距離ノ二倍ナルヲ知ルナリ

(一)「レンス」及「凹面鏡」併用 光力ヲ増盛セシメ一層強大ナル光像ヲ得ント欲セバ集合「レンス」ヲ以テ一旦光線ヲ集メ之ヲ凹



面鏡上ニ受ケテ光像ヲ結成セシム可シ然レドモ實際上此法ヲ用ヒテ喉頭内ヲ照サント欲セバ「レンス」ト燈光及「凹面鏡」トノ距離ヲ恣ニス

第三十二圖

ルヲ得ズ必ズ光學上ノ原則ニ基テ嚴正ニセザル可ラズペーフレシケルハ第二十三圖ニ示スガ如キ裝置ヲ示セリ此裝置ハ火焰ヲ燒點距離十乃至十二仙迷ノ「レンス」ノ燒點ニ置キ「レンス」ヲ通過セル光線ヲシテ平行トナシ次デ燒點距離三十仙迷ノ反射鏡ヲ以テ反射スル者ニシテ即チ光像ハ三十仙迷ノ距離ニ於テ結成スベシ又他ノ裝置ニ於テハ「レンス」ト光源トヲ更ニ近接セシメ若クハ其燒點距離以外ニ置ク者アリ此等ノ裝置ニ於テハ光線射出ノ狀ヲ酌量シテ凹面鏡ノ度ヲ定メザルベカラズ

二個以上ノ「レンス」ヲ用ユル裝置アリ就中三個ノ「レンス」ヲ有スル者ハトボルト氏ノ裝置ニシテ造構頗ル單簡ナルガ故ニ之ヲ用フル者多シ然レドモ光線ハ三個ノ「レンス」ヲ通過スルガ爲ニ其力大ニ減衰シ且ツ大ナル放散輪ヲ作りテ喉頭ニ超過シ徒ラニ光明ノ一部ヲ失フノ弊アリ又「レンス」ノ配合ヲ調理シテ光像ヲ正格ナラシムルモ尙ホ喉頭ニ比スルニ過大ニシテ殊ニ光力ノ強大ナルヲ要スルコト多

人工光源

ゲットマル氏燈

シ
 (二)人工光源 人工光源トシテ適當ナルハ圓形ノ火口ヲ有スル「ラ
 ンプ」ナリ而シテ之ニ用ユル燃料ハ菜油、石油若クハ瓦斯トス中等大
 ノ石油「ランプ」ハ已ニ充分ノ用ヲナスト雖ドモ尙ホ「ランプ」製作ノ進
 歩スルニ從テ其確實ナル者ヲ撰用スベシ「ゲットマル」氏石油燈ハシ
 ヲレツテル氏ノ用フル所トナリテヨリ大ニ名聲ヲ得タリ此燈ハ二
 個ノ燈心ヲ有シ一ハ直徑二十四密迷ニシテ本然ノ燃心ヲナシ他ノ
 一ハ粗編ニシテ全ク油中ニ沈没シ油ヲ吸收シテ之ヲ燃燒心ニ給ス
 ルノ用ヲナス「ボエツケル」氏ハ二個ノ圓形燃燒口相重層セル石油燈
 ヲ造レリ光力甚ク強烈ナリ「フオンブル」氏ハ大ナル燃燒裝置ヲ
 造リ瓦斯火中ニ酸素ヲ送り石灰ノ圓筒ヲ煖テ白熾セシメ之ヲ光源
 トナシタリ又「フオン、チム、ゼン」氏ハ水化炭素瓦斯ヲ以テ燃料トナ
 ス所ノ「ヂュボスク」氏「ランプ」ヲ應用セリ蓋シ終末ニ掲クル二者ハ光
 源トシテ極メテ優等ナレドモ造構複雑ニシテ隨テ價モ亦廉ナラザ

白炭検査燈

ルヲ以テ其用未ダ普カラズ「ペーフレ」氏ハ「アウエル」氏白熾燈
 ヲ使用セリ此燈ハ單一ナルアルガント氏燈ニ比スレハ光力僅ニ強
 キノミナレドモ其色光清白ニシテ熱ヲ生ズルコト少キノ利アリ其
 他「フリッ」チエ氏ノ白炭検査燈ト稱フル者アリ即チ鐵製ノ球中ニ「ナ
 フタリン」ヲ盛り金屬板ヲ用ヒテ之ヲ燈火口上ニ置キ瓦斯火ヲ以テ
 熱スルトキハナフタリンハ化シテ蒸氣トナリ鐵球中ニ通ズル瓦斯
 ニ抱和シ強烈ノ光 カラ瓦斯ニ附與ス而シテ其光力ハ瓦斯火ニ比
 スルニ二倍乃至四倍ニシテ靜カニ燃燒シテ火焰動搖ゼズ燦爛タル
 白光ヲ放ツ但シ此ニ用フル瓦斯火ハ使用ノ前十五分時ニ於テ點火
 スベシ「ミヒヤエル」シヤードワルトノ二氏ハ光學上ノ原理ニ基テ光
 カヲ増盛セシムルノ法ヲ行ヘリ即チ一ハ「渤藥」ヲ施セル鐵葉製ノ凹
 面反射鏡ヲ「ランプ」ニ附シ一ハ圓球腔内ニ於テ光線求心性ニ集合ス
 ル者タルノ理ニ基テ發光裝置ヲ造レリ其裝置ハ直徑二十仙迷ノ硝
 子製空球ヲ半截セル者ニシテ外面ニハ普ク銀羔ヲ塗附シテ内面ヲ

◎近時我東京ニ於テ一五新燈ナルリ者ヲ販賣ス光色ニ適ルル實用ニ

トロウフエ氏電氣燈

反射鏡トナシ之ヲ以テ光源ヲ被フ事猶ホ燈蓋ノ如クシ燈火ヲシテ球腔ノ正中心ニアラシメ且ツ圓球壁ニハ直徑六仙迷半ニシテ燒點距離十仙迷ノ「レンス」ヲ附シ「レンス」ノ燒點ト圓形ノ中心トヲ正シク一致セシム又「レンス」ノ前方ニハ直徑七仙迷半ニシテ燒點距離十五仙迷ノ凹面反射鏡ヲ備フ此ノ如クスルトキハ理學ノ原則ニ基テ光線ハ反射セラレテ中心部ニ集合シ更ニ「レンス」ヲ通シテ並行線トナリテ射出スルガ故ニ單ニ「レンス」ヲ通過セル者ニ比スレバ大ニ光力ヲ増加ス而シテ試ニ光量計ヲ以テ之ヲ測ルニ光力ノ増加スルコト光源ノ三倍ニ至ルト云フ

(三)電氣光線 モ亦一種ノ裝置ヲ用ヒテ茲ニ應用スベシ就中トロウフエ氏電氣燈ハ金屬製ノ圓筒中ニ熾火燈ヲ裝スル者ニシテ筒ノ一端ニハ半球形ノ「レンス」ヲ嵌ミ他ノ一端ハ凹面反射鏡ヲ以テ底トナス而シテ燈ノ光點ハ宛モ「レンス」及ビ凹面鏡ノ燒點ニ在ルガ故ニ光線ノ大部分ハ悉ク集束シテ外方ニ射出ス此ノ如ク構造セル裝置

ハ猶ホ前項ニ掲クル所ノ反射鏡ニ於ケルガ如ク球狀關節ヲ以テ額帶ニ固定シ同一ノ方法ニテ喉頭腔内ヲ照明シ或ハ又直立燈トシテ使用スルコトアリ但シ此時ニ在テハ支持桿ヲ以テ此器ノ貯藏筐ニ螺定スベシ

ロート氏ノ裝置

ロート氏ハ下ノ如キ裝置ヲ造レリ乃チ燈ト直徑三十五密迷ノ凹面鏡トヲ直角ニ屈曲セル金屬杆ニテ固結シテ不動ノ位置ヲ保タシメ之ヲ蝶番關節ニテ額帶ニ附着シ特リ上下運動ヲノミナサシメ燈ト凹面鏡トハ必ズ一齊ニ運動スル者トス又燈ノ前方ニ金屬ノ蓋ヲ附シテ光線ノ患者ノ眼ヲ射ルヲ防ギ更ニ額帶ノ金屬部ニ一板ヲ添ヘ檢者ノ眼ヲ護ル

以上諸種ノ照明法ヲ比較スルニ日光ヲ除クノ外ハ電氣ノ直接照明法ヲ以テ第一トス自餘ノ方法ニ至テハ利害得失相伴フヲ免レス就中凹面鏡ヲ額上ニ固定スル法ノ如キハ頗ル簡便ニシテ唯々頭ヲ動搖セシムルヲ以テ反射光線ヲノ種々ノ方向ヲナサシメ得ルノ利アリ

第四項 喉頭照透法

喉頭照透法

暗所ニ於テ頸前ニ強烈ナル光源ヲ置キ同時ニ喉頭鏡ヲ喉頭内ニ送テ窺フ時ハ明ニ照透セラレテ分明ニ檢知スルコトヲ得ベシ蓋シ創メテ照透法ヲ論述セシハツエルマツク氏ニシテステエルク、ブオルトリニー其他諸氏亦之ヲ實驗セリ而シテ光源ニハ瓦斯燈ヲ用フルモ可ナリト雖ドモ凹面鏡ヲ以テ日光ヲ集合セシムル時ハ更ニ良ナリ但シ照透法ニ依テ得ル所ノ診斷上ノ成績ハ甚ダ僅微ナルガ故此法ハ殆ド世ノ遺忘スル所トナレリ殊ニブルンス氏ノ説ニ據レバ此法ヲ以テスルモ病的變狀ヲ確認スルハ到底望ムベカラズト云ヒステエルク氏モ亦其實際上絶ヘテ要用ヲ認ズト云ヒ又シユレツテ川氏ハ此法ヲ以テ奇ヲ好ムノ遊戯ニ屬スル者トナセリ然レドモブオルトリニー氏ハ日光若クハ瓦斯燈ニ代フルニ電氣燈光ヲ以テシ更ニ喉頭照透法ヲ賞賛シ實際上頗ル緊要ノ一術トナセリ氏ハ直徑

四仙迷ノエチソン氏熾火燈ヲ用ヒ其背面ニ水銀蒸ヲ塗敷シテ鏡狀トナシ又燈ノ前方ニハ冷水ヲ充タセル同大ノ硝子球ヲ置キ以テ燈ノ劇熱ヲ防ギ旁ヲ複凸レンスノ用ヲ兼メシメタリ此ノ如クシテ燈ハ燒灼電氣ニ用フル所ノ沈降電池ニ接續シ而シテ電池ノ蓋ヲ反開スルトキハ漸次ニ所要ノ光明ヲ發ス則チ氏ハ照透法ノ利益ヲ擧クルコト左ノ如シ

(一) 咽喉ノ狭小ニシテ僅ニ小ナル喉頭鏡ヲ送入シ得ルニ過ギザル者ニ適ス

(二) 扁桃腺肥大ニヨリテ喉頭ノ一部分掩蔽セララル者ニ適ス

(三) 氣管若クハ喉頭ノ深部ニ於ケル病的變狀ヲ檢スルニ適スル等是ナリ殊ニ手術ヲ施スニ方テハ動モスレバ器械ヲ送入スルコト誤テ深キニ過グルコトアル者ナレドモ此法ヲ用フル時ハ通常ノ喉頭檢査法ニ於ケルト異リテ手術器械ヲ光線ニ背向シテ使用スルコトナ

ク常ニ深部ヨリ照透シ來レル光線ニ向テ進マシムルガ故ニ其過失ヲ免ル、コトヲ得易シ氏ハ又喉頭鏡検査ニ依テ既ニ聲帶新生物ノ良性ナルヤ悪性ナルヤ其聲帶ノ表層上ニ生ズルヤ若クハ實質中ニ侵入スルヤヲ辨識スルニ方テ此法ヲ以テスルトキハ恐クハ診斷上ノ裨益ナシトセズト云ヘリ

ザイフェルト氏ハ照透法ヲ以テ喉頭内新生物ノ疑アル者ニ類症診斷ヲ下シ得ベキヤ否ヤハ之ヲ確信シ能ハザリシト雖トモ此診斷法ヲ以テ敢テ一ノ遊戯ニ屬スル者ト做シテ廢棄スベキ者ニ非ズト云ヘリ且ツ氏ハブレンドルフ氏ノ電氣検査燈ヲ以テ此法ヲ行フニ優等ナルヲ賞揚セリ

蓋シ照透法ヲ行フニ際シ光源ヲ接着スルニ最モ適當ナルハ一ハ甲状軟骨板アダム氏菓ノ上縁ト舌骨トノ間ニシテ一ハ環狀軟骨ノ部位トス而シテ前者ニ在テハ喉頭内ノ全部ヲ鮮明ニシテ會厭軟骨部ハ稍々暗ク此レヨリ舌根ニ至ルノ部ハ更ニ頗ル明瞭ナリ會厭軟骨

ノ直立セル人殊ニ婦人ニアリテハ光線ハ下方喉頭内ヨリ上方懸壅垂及ビ軟口蓋ニ達スル者ニシテ咽頭内ヲ覗フトキハ軟口蓋ノ如キハ赤色ニ爛々タルヲ見ル可シ又聲帶ノ下方氣管ニ至ル迄ハ漸次ニ光明ノ度ヲ減ズル者トス若シ熾火燈ヲ環狀軟骨ノ部ニ接スルトキハ氣管及ビ聲帶ハ殆ト血紅色ヲ呈ハシ喉頭ノ上部ハ曇暗ナリ又梨子狀竇ヲ照透セント欲セハ燈ヲ甲状軟骨板上縁ノ上際ニ於テ稍々左側若クハ右側ニ偏シテ接スルヲ要ス但シ此法ニ於ケル缺點ハ總テ色澤一樣ニシテ毫モ區別シ能ハザルニアリ即チ發赤セル聲帶ト雖ドモ全ク赤色透明ニシテ敢テ健全ナル者ト區別スベカラズ帶縁ニ生ズル白色ノ潰瘍面モ亦只其色ヲ以テスルキハ全ク健全ノ粘膜ト異ナルコトナシ然レドモ楔狀ノ腫瘍ヲ生ジテ破裂軟骨部ヲ掩フ者ニ在テハ照透法ヲ用フルトキハ夫ノ困難ニシテ然カモ緊要ナル本症ト滲潤及ビ潰瘍トノ區別ヲ判定シ若クハ少ナクトモ其判斷ヲ扶クルヲ得ベシ何ントナレバ光線ハ下方深部ヨリ射出スルニ依レ

バナリ抑々此種ノ滲潤降起ハ周圍ノ限界稍々畫然タルヲ見ル者ニシテ殊ニ下方ヨリ照透スルトキハ血紅色ノ基礎上ニ於テ暗色ノ點アルヲ見ルガ故ニ能ク之ヲ認知シ得ベシ蓋シ一部肥厚スルトキハ光線ヲ通過セシムルコト他部ニ比スレバ僅少ナルガ故ニ曇暗ヲ呈ス可キハ固ヨリ論ナシト雖ドモ其肥厚頗ル高度ニアラザレバ亦眼力ノ及ブ所ニ非ザルベシ是故ニ加答兒性炎若クハ輕度ノ結核性滲潤ニ罹レル聲帶ノ如キハ照明法ヲ以テスルモ健全ノ者ト辨別スルコト能ハズ且ツ強硬高度ノ滲潤ニ在テモ其果シテ浮腫性ナルヤ將タ腫瘍ナルヤニ至テハ之ヲ辨ズルコト固ヨリ難シトス則チ照透法ニ於ケル實際上ノ價值ニ至テハ從來諸氏ノ經驗ニ據ルニ一モ賞揚ス可キモノアルヲ見ズト雖ドモ前項掲クル所ノ諸検査法ト合セ行フトキハ亦裨益ナシトセズ

第五項 氣管截開孔ヨリ行フ検査法

フオルトリニ
氏ノ装置

症ニ依テハ喉頭截開術若クハ氣管截開術ヲ行ヒ下方即チ「カニユー」内ヨリ喉頭ヲ検査スルコト間々之アリ此ニ用フル検査鏡ハ小ニシテ圓形若クハ卵圓形ヲナセル金屬製ノ者ヲ良トス是レ硝子鏡ハ其小ナル者ヲ得難キニ因ルナリ而シテ此小鏡ハ適好ニ曲折セル柄ヲ有スルガ故ニ鏡面ヲ上方ニ向ハシメテ「カニユー」内ニ送り其上壁ニ存スル窓乳ヨリ照檢スベシ或ハ又鏡ヲ直ニ創口内ニ送ルカ若クハ他ノ擴張器ヲ用ヒテ豫メ創口ヲ排開シ然ル後之ヲ送入ス可シフオルトリニ「氏」ハブルント「氏」ノ耳鏡ニ模シタル一種ノ裝置ヲ創製セリ即チ光線ヲ側面ノ漏斗ニ受ケ之ヲ斜メニ器中ニ箱メタル鏡面ヨリ患部ニ反射セシムルモノトス此等ノ器械ヲ用ヒテ檢スルトキハ聲帶ハ上方ヨリ檢セルガ如キ白色ノ光澤ヲ呈スルコトナク濕潤シタル赤色ノ諸隆起ヲ示シ且ツ前連合部ハ下方ニ後部ハ上方ニアリテ鏡中ニ顯ルベシ此法ハ殊ニ下喉頭腔内ニ在ル諸種ノ病的變狀ヲ診スルニ適當ナリ會テフオルトリニ「氏」ハ自家常用ノ検査

鏡ヲ用ヒテ異物(胡桃殻ノ屑片)ヲ検出セシコトアリ

第六項 喉頭検査ノ技術

確實ナル喉頭検査ヲ行ハント欲セバ第一被檢者ノ體勢ヲ正フシ第二光源ヲ適當ノ位置ニ置キ第三喉頭鏡ヲ送ルニ注意シテ舌及ビ咽頭ノ刺戟ヲ避ケ充分ニ喉頭ノ内部ヲ反照センコトヲ要ス

患者ノ體勢

患者ノ體勢 患者ハ檢者ニ對シテ卓縁ヲ脊ニスルカ若クハ卓縁

ヲ右側ニシテ正座ス可シ而シテ乙ノ位置ニ於テハ光源ヲ被檢者ノ肩ニ可成的近接シテ其前面ト同一ノ平面ニ置ク可シ

小ナル光像ヲ用ヒント欲セバ光源ヲ被檢者背後ノ側方ニ立テ四面鏡ノ燒點距離ノ大ナルニ隨テ之ヲ益々大距離ニ保持スベシ而シテ光源ノ高サハ被檢者ノ口ト同キヲ要ス然レドモ被檢者身長ノ異ナルニ應ジテ光源トノ對稱ヲ得セシメンガ爲ニ高低ノ調節自在ナル椅子ヲ用フルカ或ハ光源ノ支臺ヲ隨意ニ高低ノ位置ニ固定シ得ベ

光源ノ位置

キ者ヲ撰ブベシ此ニ於テ患者ハ少シク頭ヲ仰向シテ可及的大ニ口ヲ開キ舌ヲ挺出セシメ布片ニテ包ミ拇指ヲ下ニシニ指ヲ上ニシテ自ラ之ヲ把持セシメ置キ患者ニ諭スニ可及的體ヲ真直ニシテ決シテ俯スルコトナカラシメ且ツ頭首ヲ左右ニ傾斜セザラシム又檢者ハ患者ノ身長ニ應ジテ己ノ頭ノ位置ヲ適宜ニシ其眼ト患者ノ口内トヲ正シク對向セシムルヲ要ス

光源ノ位置

電氣光線ヲ以テ直接ニ照ス者ニアリテハ其光源ハ

常ニ檢者ノ頭ト共ニ運動スルガ故ニ檢者ハ只タ其眼ヲ患者ノ口ニ正對セシムル時ハ充分照明シ得ベシト雖トモ反射鏡ヲ用フルニハ其光線ヲ適合セシムルニ殊ニ初學者ニ在テハ困難ナリ此法ヲ行フニハ檢者ハ反射鏡ヲ額上ニ結着シ前章ニ示スガ如ク光源トノ距離ヲ正確ニシ一眼ヲ正シク其中心孔ニ對セシメ次ニ之ニ附スル球關節ヲ旋轉シテ光像若クハ光線輪ノ中心ヲシテ患者ノ懸壺垂上ニ映ゼシムベシ但シ先ツ豫習トシテ己ノ手掌ヲ患者ノ口ト同高ノ處ニ

保チ之ヲ照シテ光線ノ方向ヲ試ムルモ佳ナリ而シテ反射鏡ヲ接スル眼ハ左右ニ限ラズ宜シク検査者ノ習慣ニ從フベシト雖ドモ光源ヲ定規ニ隨テ患者ノ右側ニ置クトキハ反射鏡ヲ検査者ノ左眼ニ接ス可シ此ノ如クスルトキハ其鏡面ハ光源ニ最モ近ク且ツ右眼ハ鏡ノ爲ニ掩ハル、ガ故ニ眩暈スルノ弊ナシ又検査ノ際ハ兩眼ヲ共ニ開クヲ良トス是レ外圍ノ諸物ニ對スル自己ノ體位平衡ヲ認識シ得ルノ要アリ但シ幼時ヨリ多クハ右眼ヲ慣用スル者ナルガ故ニ左眼ヲ以テ物像ヲ見ルトキハ右眼ノ如ク確實且ツ明瞭ナラザルコトアリ若シ又兩眼ヲ以テ検査セントスルトキハ反射鏡ヲ接スル一眼ハ必ズ光源ノ中央ニ向フガ故ニ其右眼視ニ習ル、者ハ反射鏡ヲ右眼ニ裝シ隨テ光源ヲ患者ノ左側ニ置クベシ此ノ如クニシテ光源完全ニ且ツ位置整然タルヲ知ルニ及ンデ左件ヲ行フベシ

喉頭鏡送入法

喉頭鏡ノ送入法

喉頭鏡ハ呼氣中ノ水蒸氣其面ニ凝着スルヲ防ガンガ爲メ先ヅ其鏡面ヲ燈火上ニ翳シテ微ク暖メ以テ鏡上ノ水

氣ヲ消散セシメ試ニ鏡背ヲ自己ノ手ニ接シテ甚ダ熱カラザルヲ度トナシ鏡柄ヲ右手ノ拇指ト示中二指トノ間ニシテ執筆様ニ保持シ患者ヲシテ「ア」或ハ「エ」音ヲ發セシメ左法ニヨリテ之ヲ喉頭内ニ送入ス可シ即チ最初第一期ハ把柄ヲ斜メニ手ノ方位ニ偏セシメ鏡ヲ口ノ中央線ニ於テ可及的舌上ヲ離レ且ツ其背面ヲ口蓋ト並行ノ位置ニシ之ニ觸接スルコトナク前進シテ懸壺垂ノ部ニ至ルニ及デ之ヲ鏡背ニ受ケテ少シク舉上ス第二期ハ把柄ヲ舉上シ同時ニ側方即チ左口角ニ向テ推送シ(右手ヲ以テ検査スル時)鏡面ヲシテ鉛直ノ方向ニ近ヅカシメテ喉頭ヲ見得ルニ至ル

初メ把柄ヲ低クシテ懸壺垂ノ部ニ進マシムルハ鏡ノ前縁ヲシテ舌背ニ觸レザラシメンガ爲ナリ又前項ニ記載セル二期ヲ區別スルハ敢テ有要ナラズ蓋シ初學者ニ在リテハ始メ把柄ヲ甚シク鉛直ニ保持シテ送入セントスルノ傾アルヲ常トス注意スベシ又把柄ヲ舉上スルノ程度即チ鏡ノ喉頭口平面ニ對スル角度ノ大小ハ患者ノ頭首

ヲ後方ニ反張スルノ度ト喉頭口ノ地平ニ對スル角度及ビ檢者ノ體位ニ關スル者ナリ而シテ喉頭平面ト鏡トノ角度ノ變易ハ僅微ナリト雖ドモ毎面把柄ヲ種々ニ上下シテ喉頭ノ鏡像ヲ索ムルニ勉メザル可ラズ但シ此際ハ鏡ヲ懸垂垂ノ前ニ固止シテ脱出スルコトナク只々把柄ヲノミ僅ニ回旋シテ鏡面ノ傾斜ヲ變換スベシ殊ニ喉頭ノ各部ヲ漸次ニ視野中ニ現出セシメントスルニハ順次ニ少シク把柄ヲ回旋セシムルヲ要ス且ツ把柄ヲ保持スルニハ過強ナルベカラズ即チ中指ノ上ニ安シ拇指及ビ示指ヲ伸長シテ輕ク之ヲ保持スベシ此ノ如クスルトキハ確實ニシテ運轉モ亦自在ナリ舌ヲ壓定或ハ把持スルニハ大人ハ自ラ之ヲナシ得ベク小兒ハ檢者左手ヲ以テ之ヲ行フベシ鏡ハ決シテ口中ノ諸部ニ接觸ス可ラズ就中舌背ニ觸ル、時ハ惡心嘔吐ヲ催スガ故ニ最モ注意スベシ又舌ヲ壓定スルニハ決シテ過強ナルベカラズ且ツ之ヲ牽出スルコトナク唯固定スルヲ以テ足レリ

又檢者左手ヲ以テ検査ニ習練スルトキハ必要ノ場合ニ臨デハ右手ヲ以テ自在ニ治術ヲ施コシ得ルノ益アリ故ニ初學者ハ可成的の左手ヲ用フルコトニ習練スルヲ要ス

第七項 喉頭検査法特有ノ難事

熟練ノ檢者ト雖ドモ長時ヲ費シテ検査スルモ充分ニ喉頭内ヲ精檢シ能ハザルコト時トシテハ之アリ但シ通例一回ノ検査ニ於テ成績ヲ得ベシト雖ドモ特別ノ場合ニ在テハ諸種ノ障礙ニ依テ内部ノ狀況ヲ審ニシ難ク隨テ此障礙ヲ除クコトヲ務メザル可カラザルコトアリ

或ル患者ニ在テハ検査ノ間正シク呼吸スルコト能ハズシテ之ヲ停止スル者アリ又「エー」ノ音ヲ發セシムルモ聲門ハ他ノ發聲ノ狀ヲ保チ若クハ更ニ假聲帶モ相接近シテ管ニ喉頭内ヲ照檢シ得ザラシムルノミナラズ患者ハ呼吸通ゼザルガ爲メニ不安狀ヲナシ止ヲ得ズ

患者ノ呼吸

舌ノ異状

一時鏡ヲ拔去セサル可カラザルコトアリ此ノ如キ場合ニハ善ク患者ニ呼吸ノ方法ヲ諭シ且ツ鏡ヲ送入スルニ先チ數回深呼吸ヲナサシムルヲ良トス

舌繫帶ノ短キガ爲ニ患者ハ其舌ヲ充分ニ下切齒ノ前ニ挺出シ能ハザルコトアリ此ノ如キニ在テハ指若クハ壓舌子ヲ以テ舌ヲ壓定シ以テ充分ノ空間ヲ作ランコトヲ要ス舌ノ肥大シテ甚タ厚キ者モ亦同様ノ方法ニ依テ其目的ヲ達ス可シ時トシテハ鏡ヲ送入セントスルニ方テ反射作用ヲ起シテ舌體退縮シ弓形ノ隆起ヲ呈スルコトアリ此ノ如キ障礙ヲ除クニハ患者ヲシテ勉メテ舌ヲ挺出セシメ且ツ之ヲ把テ牽出スルカ或ハ手指若クハ壓舌子ヲ以テ突起セル舌背ヲ壓下スベシ

咽頭粘膜ノ知覺過敏

其他咽頭粘膜ノ知覺過敏症ニ依テ困難ヲ致スコトアリ此ノ如キハ或ハ急慢二性ノ咽頭加答兒ニヨリ或ハ一般神經質寧ロ多クハ恐怖ニ基キ或ハ間々單獨ニ之ヲ致スコトアリ此ノ如キ場合ニ在テハ少

「コカイン」液塗布

時休憩シ反復シテ之ヲ試ムベシ然カモ尙ホ鏡ヲ送入スルコト能ハザル時ハ二乃至五%ノ「コカイン」溶液ヲ塗布スレバ著效ヲ收ムベシ然リト雖ドモ是ヲ以テ或ハ喉頭検査ニ方テ知覺過敏ノ爲ニ少シク困難ヲ見ル毎ニ直チニ「コカイン」ヲ用フル者アゾト雖ドモ亦非ナリト云フベシ何ントナレバ一度此法ヲ行フ時ハ乍チ習慣トナリ爾後喉頭検査ヲ施サントスルニ亦必ズ此藥ヲ要スルノ癖ヲ生ズルコトアレバナリ

扁桃腺肥大懸壅垂ノ延長

ゴットスタイン氏ハ假令「コカイン」溶液ヲ塗布スルモ其目的ヲ達セザルコトアリ是レ畢竟患者ノ迂濶ニシテ且ツ恐怖心アルト檢者ノ拙劣ナルニヨルモノニシテ「コカイン」ハ粘膜ノ知覺ヲ減殺スルモ此等ノ諸因ヲ除クコト固ヨリ能ハザル所ナリト云ヘリ

時トシテハ扁桃腺肥大ガ障礙ヲナスコトアリ此場合ニ在テハ小鏡或ハ卵圓形ノ鏡ヲ用フベシ又懸壅垂延長シテ鏡前ニ垂下シ之ガ映像ヲ生ジ爲ニ障礙ヲナスコト間々之アリ此ノ如キモノハ可及的大

會厭軟骨ノ狀

ナル喉頭鏡ヲ用ヒテ之ヲ後上方ニ壓却スベシ
 會厭軟骨モ亦其狀態ニヨリテ更ニ一層ノ障礙ヲナスコトアリ即チ
 此軟骨甚ダシク後方ニ傾キ喉頭ヲ掩蔽シテ内部ヲ視ルコト能ハザ
 ル是ナリ此時ハ可及的強ク舌ヲ牽出シ且ツ「エー」ノ音ヲ大呼セシム
 可シ但シ舌背隆起スルガ故ニ檢者ハ左手ノ指若クハ壓舌子ヲ以テ
 之ヲ壓下センコトヲ要ス通常單ニ「イ」ノ音ヲ發セシムルノミニテ
 既ニ能ク會厭軟骨ヲ高起シ得ベシト雖ドモ尙ホ其目的ヲ達セザル
 トキハ數回急速ニ短ク且ツ強キ呼吸ヲ營マシムルカ或ハマンドル
 氏法ニ倣テ患者ヲ卑ク坐セシメ光線ヲ上方ヨリ深ク咽頭内ニ送り
 鏡モ亦深ク咽頭腔内ニ送入シ可及的鉛直ニ保持スルトキハ效ヲ奏
 スルコトアリ然レドモ此等ノ法ヲ行フモ尙ホ目的ヲ達シ得ザルト
 キハ器械的或ハ手術的方法ニ依テ此困難ヲ排除セザル可ラズ即チ
 各種ノ探子樣器械若クハ鉗子ヲ以テ後方ニ伏在セル軟骨ヲ提起シ
 或ハ特別ノ器械ヲ以テ軟骨ニ糸ヲ貫キ若クハ中舌會厭韌帶ニ糸ヲ

喉頭後壁ノ檢査

通シテ之ヲ牽引スルコトアリ但シ此ノ如キ手術的方法ヲ用フルハ
 敢テ必要ナラズ是故ニ單ニ屈曲セル喉頭探子ヲ用ヒ之ヲ會厭軟骨
 ノ喉頭面ニ送り徐々ニ提舉スルカ或ハライヘルト氏ノ創案ニ倣フ
 テ長キ壓舌子樣ノ器械ヲ舌ト會厭軟骨トノ間乃チ舌會厭窩ニ送り
 以テ舌會厭韌帶ヲ壓下スルヲ佳トス
 喉頭後壁面ヲ精視スルハ更ニ大ニ困難ナリ則チ此部ヲ檢スルニハ
 鏡柄ヲ低下シテ鏡面ヲ殆ト水平ニ保持セザルベカラズ但シ此ノ如
 クスルトキハ其壁面ノ映像ハ實物ニ比スレバ短クシテ病的變狀ヲ
 詳細ニ檢シ能ハザルコトアリ故ニ此弊害ヲ避ケンガ爲ニ種々ノ方
 法ヲ試ミタリ即チ二個ノ鏡ヲ用ヒ其一ハ鏡面ヲ喉頭ノ後壁ニ向ハ
 シメテ其像ヲ可及的正面ニ射映セシメ其二ハ尋常ノ喉頭検査ニ於
 ケルガ如キ位置ヲ取ラシメテ第一鏡面ノ映像ヲ受ケテ再ビ之ヲ檢
 者ノ眼ニ反射セシム然レドモ此法ヲ以テ兩鏡ノ位置ヲ適好ニシテ
 鮮明ノ映像ヲ得ルハ亦決シテ容易ノ技ニアラズ故ニ第二ノ鏡ニ代

ラウフリース
及ビローゼン
ベルグ氏ノ鏡

喉頭「フアン
トーム」

○喉頭検査法特有ノ難事

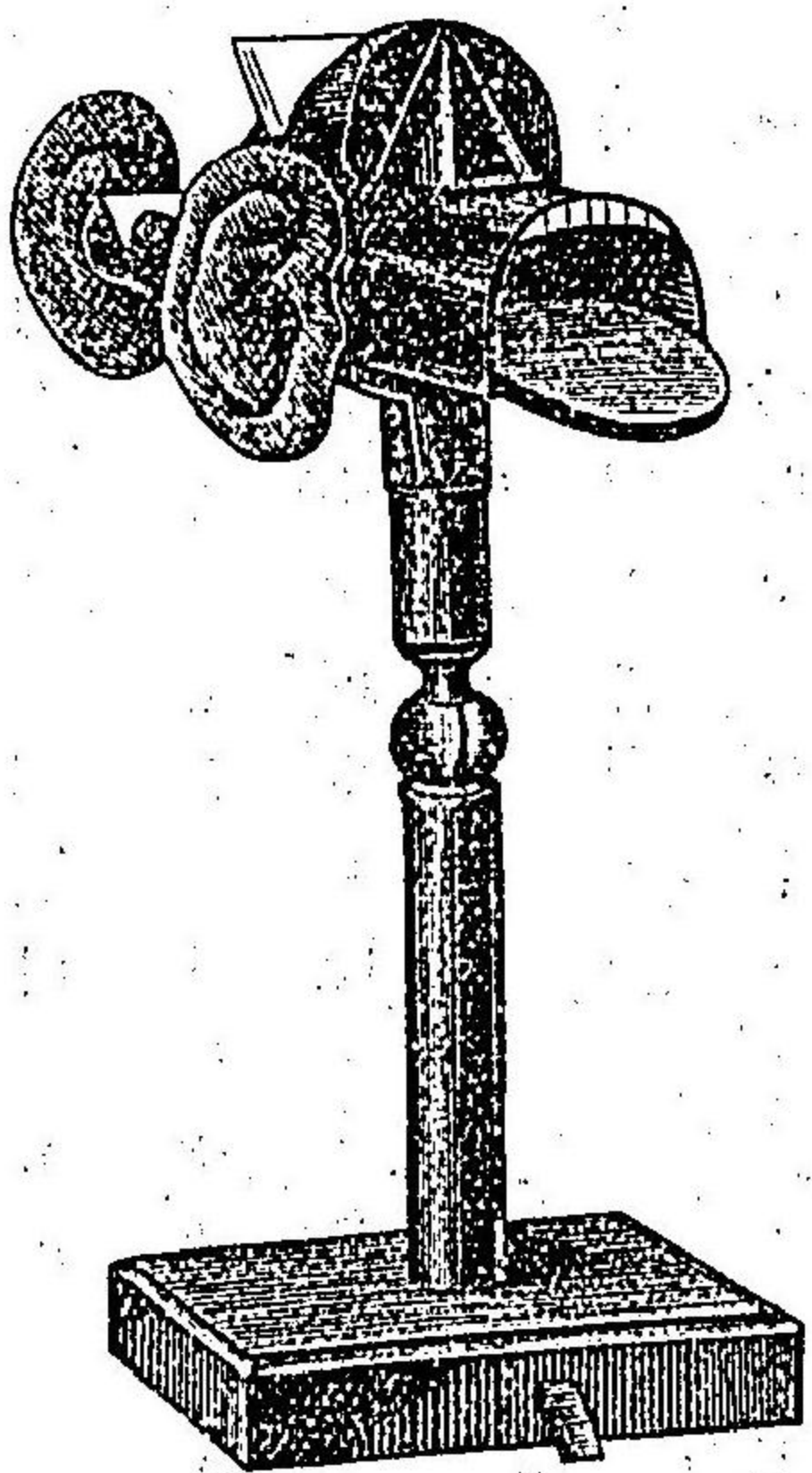
九〇

ユルニ小ナル「プリスマ」ヲ用ヒシ者アリラウフリース及ビローゼン
ベルグ氏ハ一種ノ小鏡ヲ装置シ直チニ之ヲ喉頭内ニ送入セリ即チ
此鏡ハ其把柄ニ恰モ回轉鉗子ニ於ケルガ如ク急ニ起上スベキ廻旋
條ヲ具ヘ之ニヨリテ蝶番關節ヲ以テ把柄ノ末端ニ附着セル小三角
鏡ヲシテ其軸ノ四分ノ一ヲ廻轉シ得ベカラシム今喉頭ノ後壁ヲ視
ルニ方テハ鏡ヲシテ先ツ半ハ廻旋セシムベシ若シ鏡ヲ聲帶下部ニ
送入シ更ニ強ク廻旋シテ地平ノ位置ヲ取ラシムルトキハ聲帶下ノ
部分ヲ照ラシ得ルナリ但シ此鏡ヲ送入スルニハ豫メ喉頭内ニ「コカ
イン」溶液ノ塗布ヲ要ス更ニ一層明ニ喉頭ノ後壁ヲ檢スルノ必要ア
ル時ハ他ノ検査法ヲ行フベシ其方法ハ後章ニ於テ述ブベシ
喉頭検査ニ於ケル諸種ノ困難ハ多クハ檢者ノ熟練ヲ以テ之ヲ避ル
コトヲ得ベシト雖ドモ亦悉ク然ルヲ得ズ又検査ノ妙ヲ得ルハ特ニ
習練ニ在リ然レドモ初學ノ徒ハ之カ習練ヲナサントスルモ患者ハ
通例之ニ耐ヘ能ハザルヲ以テ宜シク「フアントーム」ヲ用ユルカ又ハ

自己ノ喉頭検査ヲ行フテ練習スベシ

「フアントーム」ニハ天然ノ頭骨ヲ支架上ニ安シ之ニ抽出シタル人屍
ノ喉頭ヲ附着シテ用フルヲ良トス但シ其常ニ得易カラサルヲ以テ
或ハ紙及ヒ「ギブス」ニテ造レル「フアントーム」ヲ最モ便トス就中「エル
テル氏イーゼン」シユミット氏及ビ「シエビ氏」ノ「フアントーム」ハ最モ
實用スヘキ者ナリ而シテ「シエビ氏」ノ「フアントーム」ハ(第二十四圖)
廉價ニシテ講求シ易ク其造構ハ黒紙ヲ以テ覆ヘル厚紙管或ハ金屬

第二十四圖



ニ模シタル被蓋アリ光線ヲ集メテ射入セシムルノ用ニ供ス乃チ法

○喉頭検査法特有ノ難事

九一

ニ從テ喉頭鏡ヲ管ノ口上ニ醫シテ管内ヲ照ス時ハ挿入セル喉頭像ヲ鏡面ニ映射セシメテ判然目視スルコトヲ得ルナリ此フアントムニ附屬スル圖書ハ其數三十個アリテ通例ノ喉頭病全數及ビ稍々稀ナル者數個ヲ有ス而シテ圖上ノ番號ハ之ニ屬スル圖解號數ニ合ス余ハ當地ノ醫療器械師白井松之助ニ命ジテ模造セシメシガ其製作頗ル美ニシテ畧ホ實用ニ適ス

ライプス氏
頭コフアソト
ム

自己喉頭検査

カール氏カ改良セルライプス氏ノ喉頭フアントムアリ此器ハ電氣裝置ト連絡シテ頗ル巧妙ノ器械的作用ヲ有ス之ヲ用フルトキハ検査ノ際過テ觸ル可カラザル一定ノ部分ニ鏡或ハ器械ノ抵觸スルトキハ乍チ小鐘子自鳴シテ検査ヲ警戒シ以テ注意ヲ促ス「フアントム」ノ練習ノ要ハ器械ノ送入法ト喉頭検査上所見ノ識別ニ熟スルトニアリト雖ドモ固ヨリ獨習ナルヲ以テ其鏡ヲ送入シ及ビ之ヲ保持スルノ間ニ於ケル過誤ニ就テハ一々充分ニ習得スルコト能ハズ是ヲ以テ此等ニ就テ精細ニ學バント欲セバ自己喉頭検査

ヲ以テスルニ如カズ即チ反射鏡ヲ自己ノ額ニ固結シテ平面鏡ニ對坐シ其ノ平面鏡ノ後側方ニ光源ヲ置クベシ此ノ如クシテ反射鏡ト平面鏡トノ位置ヲ適當ナラシムルトキハ自己ノ咽喉腔内ニ光束ヲ射入セシムルコト容易ナリ此ニ於テ喉頭鏡ヲ常法ニヨリテ自己ノ咽喉内ニ送入スルトキハ其鏡上ニ喉頭ノ映像ヲ生ズルヲ以テ之ヲ平面鏡中ニ寫映シテリ検査ノミナラズ側方及ビ後方ノ人モ亦之ヲ目撃スルヲ得ルナリ

第八項 喉頭鏡検査ノ映像

喉頭検査ノ所見ヲ辨識スルニ方テハ先ヅ其鏡像ヲ注視シ且ツ映像タルヤ光學上ノ源則ニ從テ物體ト鏡面トノ距離ニ應ジテ鏡後ニ顯出スル者ナルヲ知ラザルベカラズ而シテ鏡ノ傾斜角度ハ地平ニ對シテ凡ソ四十五度ナルガ故ニ聲門ノ平面ニ在ル物體ノ映像ハ鏡中ニ於テ殆ド鉛直ノ方向ニ現ハル、ナリ故ニ實際上前方ニ位スル者

鏡中ニ顯ル映
像ハ殆ド鉛直
トナル

聲帶

(會厭軟骨及ビ前連合)ハ鏡中ニ於テハ上部ニ在リ又後方ニ存スル者(披裂軟骨及ビ後壁)ハ下位ヲ占ムベシ但シ倒像ヲ現ハス者ニ非ザルガ故ニ右側ニ存スル者ハ左方(檢者ヨリスレバ左方)ニ左側ニ位スル者ハ右方(檢者ノ右方)ニ映ズルナリ健體ノ喉頭ニ就テ最初ニ注目スベキ者ハ聲帶ナリ聲帶ハ白色ニシテ光澤ヲ有シ且ツ自ラ運動スルヲ以テ其微トナス但シ初學ノ徒ハ動モスレハ單ニ聲帶ノミニ注意シ只タ之ヲ視ルコトヲ得ルヲ以テ足レリトスルコト間々之アリト雖ドモ検査ヲシテ完全ナラシムルニハ鏡中ニ現ハル、者ハ細大トナク悉ク明視スベク殊ニ喉頭ノ前壁及ビ後壁ヲ最要トス蓋シ喉頭ノ後壁ハ之ヲ檢スルコト最モ難シト雖ドモ亦病的變狀ヲ辨ズルニハ最モ緊要ナリ

安靜ノ呼吸ヲナス時ニ於テ聲帶ヲ視ルトキハ喉頭ノ側壁ニ於テ細キ線ヲ現ハシ聲帶間ヨリノ深部ニハ常ニ環狀軟骨ノ前部及ビ多クハ數個ノ氣管輪ヲ見ル又時トシテハ氣管ノ分岐部ニ至ル迄視フベ

聲門

會厭軟骨

モルガニ一氏

キコトアリ聲門即チ聲帶間ノ空間ハ等脚三角形ヲナシ其ノ脚ハ聲帶突起ノ尖端ニ於テ少シク鈍角ニ屈曲ス此際患者ヲシテ發音セシムルトキハ聲帶ハ其正中線ニ向テ近ヅキ殆ト互ニ接着ス但シ既ニ第一章第二項ニ述ブルガ如ク或ハ聲帶ノ全長ニ亘リ或ハ單ニ其膜様部ノミ接近スルコトアリ而シテ膜様部及ビ軟骨部ノ境界ハ黃色ノ小點ヲ呈ハス此標點ハ聲帶突起ノ尖端ニ彈力纖維ノ集止スルガ爲ニ生ズルナリ検査ノ際ハ聲帶ヲ以テ常ニ検査ノ起點トナシ之ニ依テ諸部ノ方位ヲ辨ズベシ即チ聲帶前連合ノ上部ニ於テハ會厭結節圓形ノ隆起ヲ呈シ會厭軟骨ハ喉頭口上ニ聳ヘ其形狀甚々種々ナレトモ動搖スベキ辨狀ヲナス而シテ此軟骨稍々直立スルトキハ其喉頭ニ向ヘル面モ亦視ルベシ之ニ反シ其強ク後方ニ傾クトキハ舌ニ對スル一面ノミ目撃スヘシ聲帶ノ直上ノ兩側ニハ前方ヨリ後方ニ向テ狭キ凹窩ヲ呈ス是レ即チモルガニ一氏竇ニシテ單ニ眞假兩聲帶間ニ存スル黑色ノ線條トナリテ現ハル、コト屢々之アリ假聲

假聲帶

帶ハ厚キ粘膜襞ニシテモルガニー氏竇ノ上界ヲナシ前方ハ會厭軟骨ヨリ斜メニ後方披裂軟骨ニ向ヒ聲帶ト共ニ運動スベシ但シ其兩側互ニ觸接スルハ嚙下ト努力トノ際並ニ疾病ニヨリ代償的ニ發音ノ作用ヲ營ムノ場合ニ於ケルノミ而シテ假聲帶ノ上方ハ判然タル境界ナクシテ喉頭側壁ノ最上部ニ移リ以テ喉頭口ノ上縁トナル此上縁ハ披裂會厭軟骨ヨリナル所ニシテ多少銳縁ヲナシ會厭軟骨ヨリ斜メニ後下方ニ向テ披裂軟骨ニ達ス側壁ノ上縁ト咽頭壁トノ接際ニハサントリニー氏軟骨アリテ小圓形ノ隆起ヲナス此軟骨ノ前方披裂會厭軟骨ノ後部ニハ楔狀軟骨ヲ有ス又サントリニー氏軟骨ノ所在ハ即チ披裂軟骨尖頭ノ存スル所ナリ此二個ノ軟骨ハ聲帶ト共ニ運動ス而シテ聲門閉鎖スル際ハ兩者相共ニ接近スヘシト雖ドモ時トシテハ互ニ相反スルコトアリ是ヲ健態ニ比スレバ病的ニ於テ屢々目撃スル所ナリ兩側サントリニー氏軟骨及ビ披裂軟骨ノ間ニハ披裂間截痕アリ此截痕ハ聲門ノ廣ク開ク時ハ最モ見易クシテ

サントリニー氏軟骨

喉頭後壁

舌根及ヒ梨子狀窩

聲門閉鎖スルトキハ單ニ狹キ破裂ヲナスノミ又截痕ノ下方ハ喉頭ノ後壁即チ兩披裂軟骨ノ間ニ連ナル而シテ其間ハ鏡像中ノ下方ニ於テ視學的ニ短縮シ狹キ粘膜皺襞ノ觀ヲナス其他直接ニ喉頭ニ屬セザルモ喉頭鏡像中ニ現出スル者ハ舌根及ヒ梨子狀窩ナリ舌根ハ既ニ鏡ヲ送入スルノ間乃チ尙ホ其地平ノ位置ヲ保テルノ際ニ於テ見ル可クシテ此部ニハ配布セル許多ノ線ヲ現ハシ基底ニハ中線ニ於テ會厭軟骨ニ達スル中舌會厭軟骨アリ軟骨ノ兩側ニハ凹窩ヲ呈シ凹窩ノ外側ハ側舌會厭襞ヲ以テ界トナス又病ニ依テ舌根ノ囊狀線著シク肥大シ舌根ト會厭トノ間ヲ全ク掩蔽シテ會厭軟骨ハ稍々舌根ニ偏倚スルノ觀ヲ呈スルコトアリ梨子狀窩ハ内方ニ披裂會厭軟骨外方ニ甲狀軟骨ヲ現ハシ一ノ窩ヲナシテ披裂軟骨ノ後方ヨリ食道ニ亘ル

察病ノ際正シキ斷ヲ下ダサンニハ常ニ必ズ各部ニ現ハルベキ正規ノ色澤及ビ諸部ノ關係ヲ審ニセンコトヲ要ス而シテ粘膜ノ色ハ聲

粘膜ノ色澤

帶ヲ除ク外概ネ硬口蓋ニ類似スト雖ドモ之ヲ細説スレバ尙ホ少シク之ト異ナルヲ知ルヘシ即チ會厭軟骨ノ上面ハ蓋薇色ニシテ微ニ曇リ時トシテハ軟骨ノ本色ヲ透見スルガ爲ニ黃赤色ヲ現ハスコトアリ殊ニ其上縁ニ於テ然リトス又此軟骨ノ下面ハ鮮紅色ニシテ會厭結節ニ於テハ最モ然リ楔狀軟骨及ヒサントリニ一氏軟骨ノ部ニ於テハ間々軟骨透見シテ黃色ヲ呈ハスコトアリト雖トモ更ニ濃色ニシテ鮮紅ナリ聲帶ハ白色ニシテ眞珠色ヲ帶ヒ稀ニハ稍々紅色ヲ帶ブルコトアリ但シ紅色ヲ帶ブルモノト雖ドモ敢テ發聲上障礙ヲ呈スル者ニアラズ即チ聲音ヲ使用スル業ヲ執ル者ニ在テハ微ク赤色ヲ呈スルコト多シ

第九項 喉頭検査法特異ノ改良

喉頭鏡ヲ始終一定ノ位置ニ保ツトキハ喉頭ノ全像ヲ通覽シ能ハザルハ上項已ニ述ブルガ如シ是故ニ鏡ヲ少シク上下シテ各部ヲ映寫

○喉頭鏡検査ノ映像

チユルク氏法

セシメザル可ラズ但シ此ノ如クスルモ尙ホ其映像ノ遺漏ヲ脱レザルガ故ニ更ニ患者ノ頭位ヲ種々變易シテ之ヲ補ハンコトヲ勉ムベシ其方法左ノ如シ

(甲) 頭首ヲ正直ニ保チ検査スル法

此式ハチユルク氏ガ創メテ實行セシ所ニシテ頭ヲ後方ニ反張スルコトナク正直立ノ位置ニ保チ其上齒列ヲシテ鉛直ノ方位ヲ取ラシメ上切齒ノ下縁ト懸壜垂ノ中部ト殆ト同一ノ地平面ヲ保タシメ且ツ喉頭鏡ヲ稍々地平ノ位置ニ保ツトキハ殆ト喉頭後壁ノ正面圖ニ等シキ映像ヲ見ルコトヲ得ベシ此際氣管ノ後壁及ビ其分歧部モ亦明視スルコト屢々之アリ

(乙) 頭首ヲ強ク反張シテ検査スル法

此式ニ於テハ喉頭ハ自ラ上昇シテ聲帶ハ正規ニ於ケルガ如キ第五頸椎ニ對スルコトナク第三頸椎ノ部ニ在リ且ツ聲門ノ軸ハ上後方ヨリ前下方ニ向ハズシテ前上方ヨリ後下方ニ亘ル此位置ニ於テ鏡

○喉頭検査法特異ノ改良

ヲ頗ル鉛直ナラシムルトキハ能ク聲帯ノ前連合部ヲ視ルコトヲ得ルナリ

(丙)頭首ヲ前屈シテ検査スル法(キリアン氏法)

此式ニ於テハ頭首前方ニ傾クガ爲ニ喉頭氣管腔ハ前方ニ屈曲シ喉頭モ亦下降シ大ニ地平ニ向テ傾キ光線ハ會厭軟骨縁ヲ過キテ射入シ喉頭後壁ニ向テ反射ス此位置ニ於テ検査スルニハ軀體ヲ正直ニシテ其頭首ヲ前方ニ屈シ口ヲ開テ頤尖ノ胸骨ニ接スルニ至ラシム之ヲ要スルニ患者ノ頭ヲ屈スル度ハ患者及ヒ檢者ノ身長ノ比例ニ應シ兩者ノ體勢ヲ調ヘ以テ患者ノ口内ヲ窺ヒ易カラシムルヲ以テ適トス而シテ通例ハ第二十五圖ノ如ク患者直立シ檢者ハ椅子ニ坐シ或ハ蹲踞スレドモ時シテハ患者ヲシテ臺上ニ立タシムルコトアリ又小兒ハ高キ椅子ニ倚ラシムルヲ佳トス而シテ檢者ハ多少其頭首ヲ後方ニ反張シ額帶反射鏡ヲ以テ下方ヨリ上方ニ向テ(殆ト鉛直ノ方向ヲナスコト屢々之アリ)照明スルヲ要ス又光源トシテ燈火ヲ

圖五十二第



用フルトキハ其燈ニ反射鏡ヲ附セザルヲ良トス是レ檢者ハ却テ運動自由ナラズシテ不利ノ體勢ヲ取ラザル可ラザルノ弊アレバナリ故ニ茲ニハ前章直射光線照明法ノ項下ニ述ベシガ如キ電氣燈ヲ用フレバ大ニ益アリ喉頭鏡ハ

可及的大ナル者ヲ撰ブベシ而シテ尋常ノ喉頭検査ニ於ケルヨリモ稍々前方ニ於テ懸壺垂ニ接シ可及的之ヲ上方ニ壓スベシ會厭軟骨長ク突出スルガ爲ニ検査ヲ妨ゲ甚シク頭首ヲ屈スルモ尙ホ僅ニ検査シ得ルカ或ハ至ク不充分ナルトキハ先ツ會厭軟骨ニ「コカイン」ヲ塗布シ探子ヲ以テ高ク掲ゲテ検査スベシ此際鏡ヲ斜メニ保持シ且ツ頭首ヲ前方ニ屈スルニ隨ヒ傍ラ廻旋セシムルヲ以テ利アリトス

此法宜シキヲ得ルトキハ喉頭ノ映像ハ恰モ頭上ニ存スルガ如ク且ツ通例ノ喉頭鏡像ニ於ケルガ如前後ノ位置ヲ轉ズルコトナシキリアン氏ノ説ニ此法ハ氣管ノ検査ニ於テハ從來ノ方法ヲ以テスルモ完全ニ検査シ能ハザル者ニ適シ又喉頭後壁ニ於ケル用器手術モ頗ル容易ニ行ヒ得ベシト云ヘリ

(丁) 頭首ヲ傾斜セシメテ検査スル法 (アブリエス氏法)

患者ノ頭ヲ一側ニ傾カシムルトキハ咽頭部ノ鉛直軸ハ喉頭腔ノ軸ニ對シ會厭軟骨線ノ高サニ於テ鈍角ニ屈曲ス故ニ若シ頭ヲ右方ニ傾クルトキハ右方ノ聲帯ハ左方ヨリ低下シ全喉頭ノ縱軸ハ左上方ヨリ右下方ニ向フナリ故ニ喉頭鏡ヲ左側ノ口蓋ニ沿フテ送入スルキハ光線ハ左上方ヨリ右下方ニ射入スルガ故ニ當ニ眞假聲帯ノ上面ノミナラス其緣端ヲモ照明スルヲ得若シ喉頭ノ左側ヲ檢セント欲セバ頭ヲ反對ノ方向ニ屈曲セシメ同法ヲ行フベシ此検査法ハ聲帯緣聲帯突起ノ正面及ビモルガニ一氏竇ヲ檢スルニハ特ニ緊要ナ

(戊) 頭首ヲ廻旋シテ檢スル法

頭首ヲ廻旋スルトキハ喉頭モ亦共ニ同側ニ向テ廻旋ス而シテ氣管ハ之ト固ク結合スルガ故ニ同ジク側方ニ傾キ就中其軸ノ上端ハ中心線ヲ離ル、コト最モ遠シ又頭ノ廻旋ニ應ジテ聲門ノ軸ハ或ハ左後方ヨリ右前方ニ喉頭腔ノ軸ハ左下方ヨリ右上方ニ向フ反對ノ方向ニ廻旋スルトキハ各軸ノ運動亦全ク之ニ反スベシ此廻旋ノ際鏡ヲ送入スルニハ側方ヨリスルニアラザレバ其益ナシ蓋シ此検査法ハテユルク氏ノ創メテ賞用セシ所ニシテ甲状腺腫ニ因スル氣管狭窄ヲ檢スルニ最モ利アリ

第十項 喉頭及ビ氣管直達検査法

上項ニ記載セシ検査諸法ハ皆ナ喉頭鏡ヲ以テ行フ所ナレドモ此項ニ述ブル直達検査法ハ全ク鏡ヲ藉ラズシテ一種ノ裝置ヲ用ヒ直チ

直達検査法

○喉頭及ビ氣管直達検査法

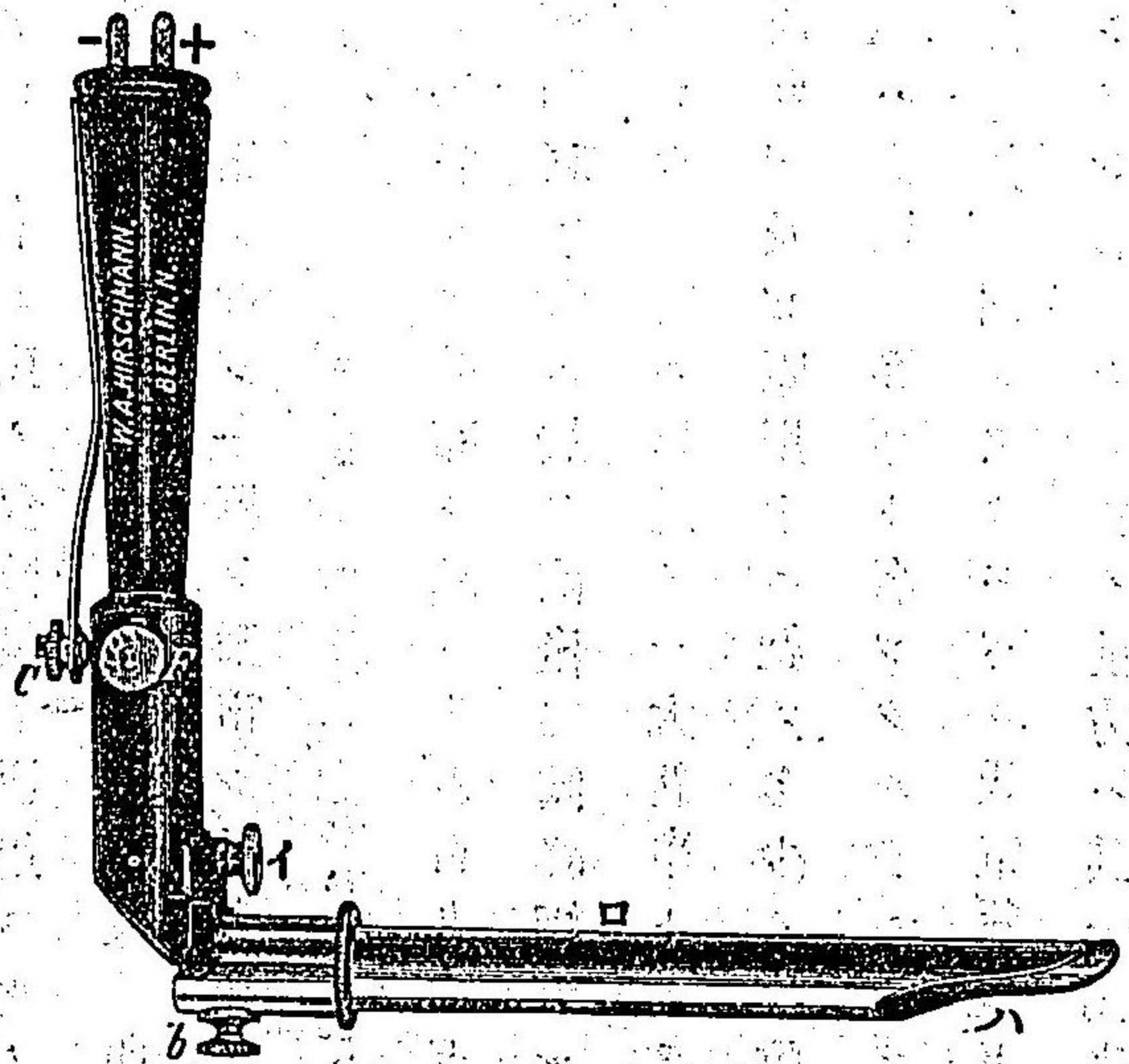
ニ喉頭内ヲ檢スルノ法ナリ彼ノ唱歌師ガルシア氏ガ會テ尋常ノ平
面喉頭鏡検査法ニ就テ述ベシガ如ク此方法ハ既ニ千八百六十四年
トボルト氏ノ診察室ニ來タリシ一女優ニヨツテ開發セラレタリ則
チ女優ハ喉頭ニ乳嘴腫ヲ生ゼシガ自ラ舌ヲ壓下シ兼テ同時ニ頭部
ヲ充分ニ反張シ落射光線ヲ受ケテ直チニ披裂軟骨、聲帶及ヒ腫瘍ヲ
明瞭ニ検査セシメタリ然ルニ當時學術未ダ進マザルヲ以テ世人ハ
敢テ之ニ意ヲ注グコトナク女優ハ却テ奇人ノ嘲ヲ得ルニ過ギザリ
シハ亦以テ遺憾トナスニ堪ヘタリ次デ千八百六十五年ホルトリニ
||氏ハ一老女咽頭ノ深部食道ノ上口ニ魚骨ノ刺留セル者ニ就テ喉
頭鏡ヲ用ヒズ單ニ舌根ヲ壓下シテ直達検査ヲ行ヒ之ヲ適出シタル
コトアリ又千八百八十四年クラウゼ氏ハ動物殊ニ犬ノ喉頭ニ於ケ
ル直達検査ヲ論ジ之ヲ解剖及ヒ生理學實函第二〇四頁ニ載セタリ
則チ氏ハ尖端屈曲セル細キ探子ヲ會厭軟骨上縁ノ喉頭面ニ接シテ
之ヲ釣起シ同時ニ舌ヲ大ニ前方ニ挺出セシムルトキハ日光ヲ以テ

クラウゼ氏ノ試
驗

キルスタイン氏
ノ發明

直チニ喉頭深部ヲ目撃シ得ベシト云ヘリブルンス氏モ亦屢々動物
ニ就テ試験ヲ行ヒタレドモ未ダ人類ニ之ヲ應用セシコトナカリシ
然ルニ伯林醫科大學内科部ノ助手アルフレッド・キルスタイン氏ハ
ローゼンハイム氏ノ食道鏡ヲ使用スルノ際鏡器ノ尖端ヲ以テ舌根
ヲ壓迫セシニ偶然咽頭深部及ヒ食道ヲ明視スルヲ得タルヲ以テ茲
ニ始メテ案ヲ起シ一器ヲ製出シ其大要ヲ述ベテ之ヲ千八百九十五
年ノ *Allge. med. central-Zeitung* No34 及 *Berliner klinischen Wochen-schrift*
No22ニ掲載シテ公布シ且ツ千八百九十五年五月伯林内科學會及ビ
伯林喉頭科學會ニ於テ前後二回詳細ナル演述ヲナシ併セテ術式ノ
供覽ヲナセリ實ニ斯道ノ一大新事トシテ賞揚セラレト同時ニ亦
其發明狀況及ビ應用上ニ就テ多少ノ攻撃批評ヲ免レザリシ則チ氏
ノ器械ハ直達喉頭鏡ト名ツクル者ニシテ(第二十六圖)ローゼンハイ
ム氏食道鏡ト同ジクカスベル氏電氣燈(F)ニ短キ圓管(ロ)ヲ直角ニ連
結セシメシ者ニシテ管ノ前方ハ其一側半月形(H)ニ缺ク而シテ電氣

圖 六 十 二 第



セバ第二十七圖ノ如ク患者ヲ垂頭位トシテ背臥セシムルカ或ハ椅子ニ倚ラシメテ頭首ヲ強ク反張セシメ可成的喉頭部ヲ前出セシメテ圓管ヲ口腔ヨリ咽頭後壁ニ沿フテ喉頭部ニ送入シ直チニ槓杆運

燈ニ附スル把柄ハ檢者之ヲ左手ニ把リ圓管ヲ喉頭ニ向テ口中ニ送入スルナリ此器ハ其把柄ヲ除クノ他凡テ金屬製ニシテ且ツ把柄ヨリ分離シ得ベキヲ以テ頗ル消毒ニ便ナリ又圓管ハ小兒及ビ大人ニ對シテ大小數箇ヲ具フ此器ヲ使用シテ検査セント欲

圖 七 十 二 第



動ヲナシテ舌ヲ強ク壓シ同時ニ會厭軟骨ヲ舉上セシメ以テ口腔ヨリ喉頭ニ至レル行路ヲ真直トナスベシ若シ器械ノ正シク送入サルトキハ患者ハ圓管ヲ通シテ安靜ニ呼吸シ得ベキヲ以テ檢者ハ把柄ニ附シタル鈕子(○)ヲ壓シテ電光ニヨリ圓管ヲ通ジテ喉頭部ヲ照明スベシ此際檢者ハ必

ズシモ眼鏡ヲ要セザレドモ屢々患者ノ咯出液ニ對シ自己ノ眼ヲ注意セザル可カラズ

右ノ方法ニヨリテ検査スルトキハ咽頭深部ハ固ヨリ喉頭氣管ヲモ完全ニ照明シ得ベシ且ツ檢者ノ眼下患者ノ喉頭ハ其距離尋常ノ喉頭鏡検査ニ於ケルヨリモ近キガ故ニ頗ル明瞭ナリ但シ此検査法ニ於ケル一ノ缺點ハ喉頭前部ヲ検査セントスルニ際シ間々目的ヲ失スルコトアリ又此器ヲ使用スルニハ豫メ舌根及ヒ會厭軟骨ニ一〇%乃至二十%ノ「コカイン」溶液ヲ塗布シテ局所麻醉ヲ充分ナラシメザルベカラズ尙ホ注意スベキハ上顎ノ門齒トス之レ乃チ舌ヲ壓スルニ際シ其槓杆運動ノ支點トナレバナリ故ニ門齒ハ全ク健全ナルカ然ラザレバ寧ロ脱落セルヲ良トス
又キルスタイン氏ノ直達喉頭鏡ニシテ電氣裝置ヲ有ゼザル者アリ全部金屬製ニシテ頗ル消毒ニ便ナリ即チ一ノ把柄ニフレンゲル氏壓舌子ノ稍々長キ者ヲ直角ニ連結シ之ニ方形ノ管ヲ箱入セシ者ニ

シテ法ノ如ク壓舌子ヲ舌根部ニ送入シ檢者ハ額帶反射鏡ニヨツテ管中ヲ照明スベシ

第十一項 他ノ検査法

喉頭鏡検査法ニ依テ喉頭病ヲ確診シ得ルニ及デハ古來施行セル自餘ノ検査法ハ殆ド聲價ヲ失セリト雖ドモ亦診斷上多少ノ益ナシトセズ殊ニ小兒ニ於ケルガ如ク喉頭鏡検査法ヲ行ヒ能ハザル者在テハ古法モ亦之ヲ應用シテ大ニ益スル所アルヲ以テ茲ニ之ヲ畧述セントス

視診

喉頭ヲ外方ヨリ視診スルハ稀ニ重劇ノ炎症殊ニ軟骨炎ニ於テ必要トナスコト時トシテハ之アリ而シテ此症ニ於テ軟骨周圍ノ増大スルヲ見ルベシ又甲状腺腫ニ於テモ之ト同ジキ觀ヲ呈スルコトアリ喉頭及ヒ氣管上部ノ變位ハ多クハ大ナル甲状腺腫若クハ頸部腫瘍ニ依テ起ル者ナリ此等ノ症ニ在テハ喉頭ハ中央線ヨリ一側若クハ

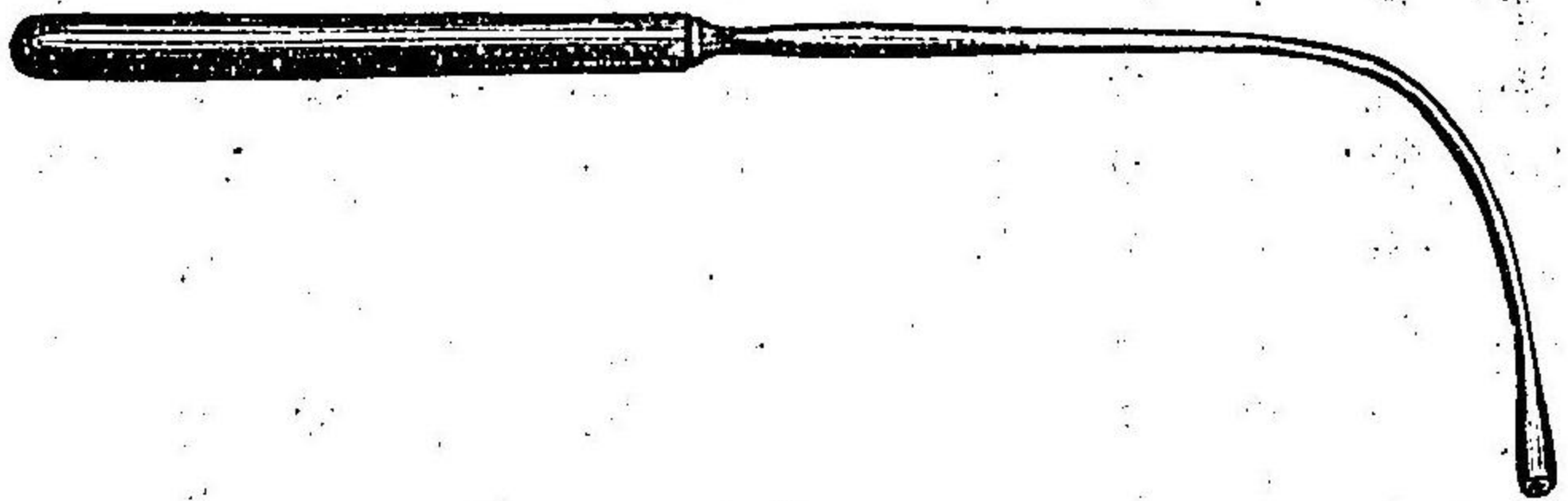
他側ニ壓却セラル、ヲ觸知スベシ喉頭及ビ氣管ノ狹窄ニ於テ鏡ヲ用フルモ之ヲ認定シ能ハザルニ方テハ決シテ此法ヲ忽ニスベカラズ其他喉頭ノ按壓ニ依テ疼痛ヲ覺ヘ或ハ壞死セル軟骨片ノ動搖ニ依テ捻髮音ヲ覺受スル等ハ大ニ診斷ノ補助トナルモノナリ

觸診ニ於テハ聲音震顫ニヨリテ聲常ノ震動機能ヲ徵知シ得ベシ又喉頭内部ノ觸診ハ示指及ビ中指ヲ快手ク喉頭上口ニ送入ベシ此法ハ小兒ニ於ケルガ如ク喉頭鏡検査ヲ行ヒ難ク且ツ會厭軟骨及ビ披裂會厭皺襞即チ喉頭上部ニ疾患殊ニ腫瘍或ハ異物ノ存在アルノ疑アル症ニ限リテ應用スルコトアリ聽診及ビ打診ハ診斷上敢テ必要ナラズ

探子検査法

探子検査法 ハ以上諸法ニ比スレバ更ニ緊要ナリ即チ腫瘍ノ發生部及ビ硬軟粘膜ノ感覺潰瘍底ノ深淺及ビ其軟骨ヲ侵スヤ否ヤ等ヲ確診シ且ツ前項ニ述ブルガ如ク會厭軟骨過度ニ傾倒シテ聲帶ノ照明ヲ防クルカ或ハ喉頭上口部ノ隆起物若クハ肥大ノ爲ニ内部ノ

第二十八圖



視診ヲ防グル者ヲ提起シ或ハ側方ニ排去スル等是ナリ

探子ハ「カテ」テル狀ニ微曲シ若クハ直角ノ方向ニ彎曲シテ其角部ハ圓ク木柄ヲ有スルカ或ハ單ニ握部膨大シタル者アリ就中其銀製ノモノハ用ニ應ジテ曲直隨意ノ形狀ヲナサシメ得ルヲ以テ最モ良トス(第二十八圖)

探子ヲ送入スルニハ固ヨリ喉頭鏡ノ扶ヲ要スル者ニシテ就中鏡ヲ左手ニシ探子ヲ右手ニ把テ送入スベシ特ニ粘膜ノ感覺ヲ檢セント欲スル時ノ外ハ探子ヲ送入スルニ先ダチ十乃至二十%ノ「コカイン」溶液ヲ塗布シ粘膜ノ知覺ヲ奪フベシ但シ探子送入ハ頗ル注意シテ之ヲ行ヒ粘膜ノ損傷ヲ避ケンコトヲ要ス故ニ檢者ハ常ニ此法ニ熟練セザルベカラズ

第四章 症候總論

喉頭ハ發音ノ器ニシテ兼テ呼吸ノ門タルヲ以テ若シ其病ニ罹ルトキハ關係亦隨テ大ナリ

發音ノ障礙

(一)發音ノ障礙 即チ發聲困難ハ其種類ト輕重トニ於テ種々アリト雖トモ多クハ雜音ヲ交ヘテ正音ヲ亂シ聲音常性ヲ失テ鈍濁嘶嘎トナル而シテ雜音ノ正音ヲ掩蔽スルコト多キニ從ヒ聲音ノ嘶嘎スルコト益々大ナリ就中發聲ノ困難ハ聲帶ノ振動正然タラザルニ基クモノニシテ乃チ聲帶ノ加答兒性腫脹、粘液ノ堆積、ポリーブ發生等ニ因ルナリ時トシテハ發聲時ノ雜音甚ダシク増加シテ殆ド聲音ヲ辨ズベカラザルコトアリ加之發音ニ緊要ナル聲帶震顫部ノ緊張性ヲ失フトキハ則チ聲音絶止ス全然聲音絶止スル時ハ聲帶及ビ之ヲ擦スル空氣ハ毫モ正調ノ震動ヲナスコトナク恰モ私語ト同一ノ狀況ヲ呈ス

聲音絶止

無聲症

所謂無聲症ハ喉頭後壁ノ新生物或ハ其肥厚若クハ聲帶諸筋ノ麻痺ニ依テ聲門收閉スルコト充分ナラザルニ基クナリ又他症ニアリテハ聲音嘶嘎セズト雖ドモ餘音ノ乏キガ爲ニ曇濁シテ響ヲ失フコトアリ而シテ此ノ如キ濁聲ハ主トシテ一側ノ聲帶麻痺スルニ因ルコトアルガ故ニ聲音ノ變狀ヲ以テ既ニ其疾患ノ概畧ヲ豫知スルヲ得ルコト屢々之アリ

重複音

過度ノ高調音即チ假不全聲音ハ屢々病的ニ發スルコトアリ此音ハ胸音ヲ發スルニ必要ナル聲帶ノ緊張ヲ營ミ能ハザル人ニ起ル者ニシテ通例男子ニノミ見ル所ナリ
重複音ト名ヅクル者ハ喉頭内ニ於テ同時ニ二音ヲ成形スルニ基クモノニシテ時トシテハ一側ノ聲帶麻痺スルカ若クハ小腫瘍ヲ生ズル者ニ見ルコトアリ而シテ其腫瘍ハ發音ノ際聲帶縁ノ間ニ在テ恰モ聲門ヲ前後ノ二部ニ分チ以テ各別ニ振動セシムルニ因ルナリ聲帶密閉スル間ハ全ク音聲ヲ發スルコト能ハズ此ノ如キ絶對的無

音ハ時トシテ發音的聲門痙攣症ニ於テ見ルコトアリ然レドモ全ク
 正規ノ氣流缺如スルモ尙ホ明カニ聽取サルベキ言語即チ假性發音
 ヲ發シ得ルコトアルハツエルマツク、ストリユビング氏等ノ實驗セ
 ル所ニシテ乃チストリユビング氏ノ證明セシ如ク此言語ハ口腔及
 ビ咽頭諸筋ノ習練ニ因ル一種ノ作用ト及ビ同時ニ聲門ニ於テ裂隙
 ヲ成形シ狹窄雜音ヲ發シテ正規ノ發音ヲ代理シ以テ子音ト母音ト
 ヲ強カラシムルニ因ルナリ

(二)呼吸ノ障礙

ハ一ニ喉頭性呼吸困難、喉頭狹窄若クハ格魯布性

呼吸等ノ異名アリ其障礙ハ喉頭腔狹窄ニ起因スル所ニシテ輕重一
 様ナラズ而シテ其重症ハ危險ニシテ往々死ヲ招クコトアリ此狹窄
 ハ會厭軟骨、披裂會厭變或ハ自餘ノ喉頭部ニ於ケル急慢二性ノ炎症
 腫脹浮腫或ハ癩痕、聲門開張筋ノ麻痺、聲門閉鎖筋ノ痙攣異物若クハ
 新生物ニヨツテ起因ス就中新生物ハ其增大スルカ若クハ其位置ノ
 聲門破裂内ニ存スル等ニヨリテ著シキ障礙ヲ致ス其他周圍組織或

呼吸ノ障礙

壓迫性狹窄

ハ近隣諸器ノ疾病等ニ依テ喉頭ヲ外部ヨリ壓迫シ所謂壓迫性狹窄
 ヲ起スコトアリ即チ喉頭周圍ノ蜂窩織炎、咽頭後膿瘍、甲狀腺腫若ク
 ハ頸部水脈腺ノ腫瘍ナリ

中等度ノ狹窄

中等度ノ狹窄症ニ於テハ單ニ呼吸延張シ且ツ呼氣ノ終ニ輕度ノ腹
 筋緊張ヲ呈スルニ過ギズト雖ドモ若シ談話、歩行、昇階、叫喚或ハ小兒
 ノ啼泣ニ於ケルガ如キ劇シク呼吸機能ヲ營ムトキハ始メテ一時性
 呼吸困難亢進ス之レニ反シテ高度ノ狹窄ニ在テハ肺臟内ノ瓦斯交
 換ヲ障ゲテ呼吸中樞ヲ刺戟シ爲メニ呼吸短促シ空氣ノ缺乏ニ依テ

高度ノ狹窄

苦惱ノ容貌ヲ呈ス即チ吸氣ノ際鼻翼開張、肩胛舉上、胸廓擴張ヲ司ル
 諸筋努力スルガ故ニ胸鎖乳嘴筋、斜角筋、肩胛舌骨筋ハ著シク緊張シ
 胸骨上窩鎖骨上窩及ビ肋間ハ深ク陥没シ大胸筋、前大鋸筋及ビ菱形
 筋ハ著シク皮下ニ隆起シ心窩及ビ季肋部凹陷ス其ノ他呼吸ニ從テ
 喉頭劇シク運動ス但シ氣管狹窄ニ於テハ多クハ喉頭靜止シテ動搖
 セズ

空氣ノ狹窄セル喉頭ヲ通過スルトキハ鋸スルガ如ク吹クガ如ク又叫ブガ如キ高調ノ雜音ヲ發シ吸息頗ル困難ニシテ次テ休憩時ナク直チニ長キ呼吸ヲ營ム此ノ如ク深呼吸ヲ營ムニ多時ヲ要スルカ故ニ呼吸ノ數ハ自ラ減少シ且ツ呼吸中樞ノ力ヲ鈍麻セシメテ其刺衝機沈衰シ以テ假死ニ陥ル而シテ此期ニ至レバ呼吸淺弱トナリテ其數ハ却テ増加ス

吸息呼吸困難

喉頭性呼吸困難

ハ多クハ吸息性ニシテ單純呼吸性ノ者ハ甚タ稀ナリ則チ吸息性ノ者ハ喉頭内ニ隆起スル部分會厭軟骨破裂會厭襞聲帶若クハ新生物恰モ辨狀ヲナシテ内方ニ壓下セルラ、ニ因テ起ル之ニ反シテ單純呼吸性ノ者ハ下喉頭腔内ニ生ズル移動性新生物呼吸ノ爲ニ聲門ニ向テ壓上セラレ之ヲ閉塞スルニ因ル所ニシテ間々粘膜炎或ハ格魯布等ニ合併スルコトアリ

呼吸困難ハ必ズシモ狹窄ノ輕重ニ關スルモノニアラズシテ急發ノ狹窄ハ慢性疾患ニ依テ徐發スル同大ノ狹窄ニ比スレバ強劇ナリ又

呼吸性呼吸困難

狹窄ノ經過轉歸及ヒ豫後

呼吸障礙ノ單ニ喉頭上口ニ存スルモノハ頗ル強硬ニシテ延張性乏シキ喉頭下部則チ聲門下部ニ於ケルモノニ比スレバ危險ナラズ

其他小兒ハ其狹窄假令大人ニ比シテ頗ル輕度ナリト雖ドモ呼吸困難ヲ起スコト大ナリ

狹窄ノ經過轉歸及ヒ豫後ハ其原病ニ關シテ一樣ナラズ而シテ狹窄ハ元來一個ノ症候ニ過ギズト雖ドモ亦大ニ原病ノ經過ト轉歸トニ影響スル者ナリ則チ其急性ト慢性トニ拘ラズ經過中著シキ變動ヲ呈スル者ニシテ其中等症ニ於テハ或ハ僅ニ自覺上ノ異常ニ止マリ或ハ筋ノ勞動若クハ偶發性ノ肺疾患ニ依テ呼吸困難ヲ急發スルコトアリト雖ドモ高度ノ狹窄ニ於テハ絶ヘズ呼吸困難ヲ現ハシ狹窄セル聲門破裂ハ分泌物若クハ義膜片格魯布ニ依テ閉塞セラル、ガ爲ニ時々眞性ノ窒息發作ヲ致スコトアリ又重劇ノ狹窄久シク持續シテ窒息發作反覆スルトキハ炭酸中毒昏睡心臟衰弱等ノ

喉頭及ヒ氣管
狹窄ノ區別

症ヲ發シテ死期ヲ促スニ至ル
 故ニ豫後ハ常ニ疑ハシキ者ニシテ其輕症ト雖ドモ原病増悪スルカ
 或ハ狹窄部分泌物等ノ爲ニ全ク閉塞スル時ハ乍チ假死ニ陥リ醫師
 ノ救療ヲ俟タズシテ遂ニ鬼籍ニ登ルコトアリ
 氣道上部ノ狹窄ハ既ニ述ブルガ如ク固有ノ症狀ヲ現ハスガ故ニ敢
 テ診斷シ難カラズト雖ドモ其狹窄果シテ喉頭ニ存スルヤ將タ氣管
 若クハ氣管枝ニ在ルヤヲ判定スルハ亦容易ナラズ此際診斷ヲシテ
 最モ確實ナラシムル者ハ喉頭鏡検査法ナリ然レドモ此法モ亦未ダ
 以テ必ず完全ナル者トナシ難シ故ニ此ノ如ク疑ハシキ症ニ在テハ
 他ノ方法ニ依テ補助センコトヲ務ムベシ蓋シ喉頭狹窄ハ多クハ聲
 音ノ變化ヲ呈スル者ナレドモ若シ聲帶侵サレザル時ハ聲音敢テ正
 調ヲ失ハズ之ニ反シテ氣管狹窄ニ在テハ腫瘍ノ爲ニ氣管壓平セラ
 レ同時ニ反廻神經ノ壓迫セララル、時ハ聲音ノ變化ヲ致スベシ又喉
 頭狹窄ニ在テハ吸息ノ際喉頭甚ダシク下降スレドモ氣管狹窄ナル

喉頭狹窄ノ治
法

自覺症

トキハ全ク否ラザルカ或ハ呼吸困難ノ甚ダ強度ナルモ尙ホ僅カニ
 喉頭ノ下降ヲ視ルニ過ズ其他喉頭狹窄ニ於テハ患者頭首ヲ後方ニ
 反張セシムト雖ドモ氣管狹窄ナルトキハ全ク否ラズ
 喉頭狹窄ニ固有ノ治法ハ其原病ノ不治症ナルカ或ハ其治法効ナキ
 時ニノミ施ス所ナレドモ時トシテハ偶發性ノ窒息症ヲ療スルノミ
 ヲ以テ其目的トナスコトアリ例之閉塞セル分泌物ヲ除去センガ爲
 ニ吐劑ヲ投ズルガ如シ又稀ニハ百方効ナク爲ニ氣管切開術ヲ施シ
 人工氣道ヲ造リテ氣息ヲ通ゼシムルヲ要スルコトアリ又慢性諸症
 ニ於テハ狹窄ノ擴張法ヲ試ムベキコトアリ乃チ第六章治法總論ノ
 條下ニ於テ説述セントス
(三) 疼痛ノ感覺ハ各種ノ喉頭疾患ニ伴フ者ニシテ殊ニ言語及ビ
 嚥下ヲ妨グ時トシテハ殆ド之ヲナスコト能ハザラシムルニ至ル然
 レドモ輕度ノ者ニ在リテハ單ニ癢痒灼熱微痛壓重等ヲ覺ルニ過ギ
 ズ而シテ微痛灼熱ノ感覺ハ既ニ單純性加答兒殊ニ其急性症ニ於テ

見ル所ニシテ重劇ナル疼痛ハ喉頭ノ破潰性疾患アルニ及ンデ起ルモノトス且ツ刺痛狀ニシテ屢々病側ノ耳ニ波及ス是レ恐クハ迷走神經ノ傳搬ニ由ルナリ但シ頗ル大ナル潰瘍ヲ生ズルモ全ク疼痛ナキコトアリ之ニ反シテ喉頭ニ於テハ一モ病的異狀ヲ見ズシテ遠隔ノ器官(胃、肺、腸、咽頭、鼻腔)ノ疾患ニ因テ交感性ニ一種固有ノ感覺ヲ喉頭ニ現スコトアルハ屢々實驗スル所ナリ

咳嗽

(四) 喉頭咳嗽

ハ氣管若クハ肺臟ノ疾患ニヨツテ起ル咳嗽ト毫モ辨別スベカラザルコトアリ然レドモ亦間々一種固有ノ音響ヲ帶ビテ一種特異ノ性ヲ現ハスコトナキニアラズ抑々咳嗽ノ種類ハ一様ナラズシテ一二回ノ短咳ヨリ長時間持續スル發作性痙攣咳ニ至ルノ間頗ル相異ナリ而シテ其音響ハ疎裂ナルアリ銳利ナルアリ嘶嘎セルアリ無響ナルアリ或ハ又吹クガ如ク喘クガ如ク吠ユルガ如キ者アリ又咳嗽ハ極メテ種々ノ喉頭疾患ニ因テ發スト雖ドモ其侵ス所ノ部位ニ隨テ自ラ趣ヲ異ニス之ヲ試驗的或ハ臨床的ニ徵スルニ

故意ノ咳嗽

喉頭後壁及ビ披裂軟骨間截痕ヲ刺戟スルトキハ最モ迅速且ツ確實ニ咳嗽ヲ發スト雖ドモ會厭軟骨後面、假聲帶、聲帶ノ上面、及ビ披裂會厭襞ノ刺戟ハ殆ド否ラズ故ニ喉頭ノ疾患ニシテ咳嗽ヲ發スル者ハ直接若クハ間接ニ此等ノ部分ヲ侵ス者タルヲ知ルベシ而シテ其咳嗽ノ音調ハ固ヨリ聲帶ノ狀態ニ關ス此ノ如ク喉頭ノ反射作用ニ因レル咳嗽ノ外異常ノ感覺アル時之ヲ防ガンガ爲ニ患者故ラニ咳嗽ヲ營ムコトアリ其狀ハ自ラ同一ナラズ而シテ此異常感覺ハ喉頭内ニ異物ノ存スルガ如クニシテ故ラニ咳嗽ヲ營デ之ヲ排除センコトヲ求ルナリ且ツ此感覺ノ因ハ或ハ粘液ノ凝塊附着スルニ因リ或ハ粘膜ノ變性ニ依テ恰モ異物ノ存スルガ如キ異常ノ感覺ヲ起サシムルニ因リ或ハ毫モ物質的ノ原因ナクシテ單ニ感覺ノ障礙セララルニ基クモノアリ

咳嗽ノ音調ハ氣管若クハ肺臟等ノ疾患ニ依テ發スル咳嗽モ固ヨリ聲帶ノ健否ニ關スルモノナルガ故ニ別ニ喉頭咳嗽ニ於テハ亦一定

咯痰

ノ音調アルヲ見ズ

(五) 咳嗽ニヨリテ排除セラル、咯出物ハ其喉頭ヨリスル
 ヤ否ヤヲ識別スルニ敢テ著シキ特徴ナシ但シ此ヲ概論スレバ喉頭
 ノ痰ハ少許ノ空氣ヲ混ジ無色透明ニシテ硝子様ヲナシ時トシテハ
 帶緑黄色ヲ呈シ往々膠様ノ圓塊ヲナシ其狀恰モ蛙卵ニ髣髴タルコ
 トアリ又點狀ノ色素球ヲ交ヘテ分泌物帶黒綠色トナルコト屢々之
 アリ或ハ分泌物中ニ血液ヲ混ジ鮮紅若クハ暗紅色ノ線狀又ハ塊
 ヲ現ハスコトアリ但シ喉頭ヨリ多量ノ出血ヲナスコトハ經驗上決
 シテナキ所ナリ
 又痰中ニ膿ヲ混ズル者ハ喉頭内ニ生ズルカ若クハ氣道ノ深部ヨリ
 來レルガ常ニ疑ヲ免レザル者トス

第五章 疾患試験法

前章既ニ喉頭疾患ニ於ケル緊要ノ検査法及ビ諸症候ヲ説ケリ故ニ

今疾患試験法ニ於ケル一二ノ要點ヲ論ゼントス

確實ニ診斷上及ビ豫後上ノ誤謬ヲ免レント欲セバ當ニ局所ノ所見
 ヲ以テ直チニ斷定スルコトナク更ニ臨床上ノ諸症狀ヲ悉ク明カニ
 セザルベカラズ就中既往症ハ全般ニ亘テ之ヲ涉獵シ殊ニ患者ノ年
 齡、職業、疾患原因、持續生活法及ビ自覺的諸候ノ狀況ヲ知悉センコト
 ヲ要ス

喉頭疾患持續ノ長短ハ診斷上屢々有要ナリ但シ疾病ノ真正

ナル初起ハ患者及ビ傍人ニ於テモ多クハ知ルコト能ハズ何トナレ
 バ總テ病勢ノ進デ現著ノ症狀ヲ呈スルニ及デ初メテ患者自ラ病ア
 ルヲ悟ル者ナレバナリ例之俄然小兒ノ格魯布ニ罹ルヲ訴ル者アル
 ニ方テ更ニ綿密ニ之ヲ問求スル時ハ其兒ハ既ニ數日前ヨリ聲音啞
 嘶シ其全身異和ノ狀ヲ呈シタルヲ發見スルガ如シ而シテ醫ハ之ニ
 依テ大ニ格魯布若クハ假性格魯布ナルヤヲ判知スルノ補助ヲ得ル
 コトアリ其他或ハ聲音ノ嘶啞セルコト月餘ニ亘リシ者ニ就テ喉頭

誘因

ヲ檢スルニ加答兒症狀ヲ呈スルトキハ其豫後ノ頗ル注意セザル可
ラザルヲ知リ又其別ニ遺傳病アリテ之ガ原因ヲナセルニアラザル
ヤヲ判定セシコトヲ要スルコトアリ

誘因

ヲ確定スルコトモ又緊要ナリ但シ患者ノ告グル所ハ必シモ
信ズベカラズ例之患者ハ感冒ニ依テ此疾病ヲ得タリト云フモ診察
上其果シテ感冒ニ起因スルコト判然タル時ニノミ之ヲ信ズベシ又
患者ノ職業、生活法、塵埃多キ氣中ノ住居或ハ勞働若クハ「アルコホル」
類ノ濫用ノ如シ大氣ノ作用、流行諸病、不良ノ氣候、遺傳性素因若クハ
嘗テ急性或ハ慢性ノ疾患ニ罹リシコトアルヤ否ヤニ注意セシコト
ヲ要ス現症ニ就テハ童ニ患者ノ自覺的徵候ト検査法殊ニ喉頭鏡檢
査法ニ依テ得タル成績ヲ以テ之ヲ判定スルノミナラズ其全身及ビ
近隣諸器線若クハ大血管ノ状態ニ注意スベシ就中肺臟ノ状態ハ殊
ニ緊要ナリ之ヲ要スルニ喉頭疾患ヲ診斷シテ豫後ヲトスルニハ呼
吸氣系ノ全部乃チ鼻腔、鼻咽腔、ヨリ肺臟ニ至ルノ諸部ニ於テ悉ク十

現症

分ニ検査スルニアラザレバ之ヲ斷定シ能ハザル者トス

第六章 治法總論

喉頭病ノ治療法ハ或ハ直チニ喉頭ニ行ヒ(局所療法)或ハ内用藥若ク
ハ皮下注入法ニヨリテ先ヅ藥ヲ血中ニ送り次テ患部ニ其効力ヲ逞
フセシムルニアリ而シテ局所療法ハ喉頭部ノ皮外ヨリ行フアリ又
喉頭内面ニ於テスルアリ

第二項 外局處療法

外局處療法

喉頭外局處療法ハ之ヲ喉頭鏡検査法發見以前ニ比スレバ大ニ其用
ヲ減ジタリ而シテ此ニ屬スルモノハ瀉血法、寒罨法、溫卷法、誘導藥ノ
塗擦及ビ塗布皮上電氣等是ナリ

(い) 瀉血法ハ方今尙ホ稀ニ用フル者アリ其ヲ行フベキ部ハ胸骨把
柄部トス往時ハ多血強壯ナル小兒ノ格魯布症ニ於テ屢々行ハレタ

リ
 (ろ) **冷罨法** ハ水囊ライテル氏ノ寒冷装置或ハ寒冷壓抵巾ヲ以テス
 則チ炎症性滲出物アル症ニ於テ局處ノ血行ヲ制シテ物質代謝ノ機
 ヲ遅慢ナラシメテ滲出機ヲ減却スルヲ主旨トナス但シ冷却長キニ
 過グル時ハ爲ニ却テ血管ノ弛緩ヲ招キ炎症部ニ重度ノ鬱血ヲ起サ
 シムルノ害アリ故ニ最初ヨリ攝氏十度乃至十五度ノ水ニ浸シテ絞
 搾セル布片ヲ以テ冷纏絡法ヲ行ヒ或ハ單ニ炎症ノ初期凡ソ六時乃
 至十二時間ニ水罨法ヲ施シ後チ他ノ罨法ニ代フルヲ良トス
 (は) **温罨法** ハ熱湯中ニ浸セル壓抵巾又ハ綿海ヲ用ヒ若クハプリユ
 ーシユニツ氏罨法ヲ行フヲ良トス殊ニ此法ハ吸收機ヲ催進スルノ
 効大ナルガ故ニ一般ニ急性炎ノ經過中既ニ冷罨法ノ時期ヲ過グル
 カ若クハ之ニ耐ヘ能ハザル者其他次急性炎症ニ適當ナリ又時トシ
 テハ慢性炎ニモ之ヲ用フルコトアリ
 (に) **誘導法** ノ用ハ往時ノ如ク多カラズト雖ドモ就中芥子ハ急ニ臨

デ皮膚ニ反對刺戟ヲ行フニ頗ル緊要ナリ發泡劑ハ其頸部ノ皮外ニ
 滲出物ヲ生ゼシムルガ故ニ喉頭内ニ存スル同種ノ滲出物ヲ減却シ
 得ベシト云フ者アレドモ著シキ効ヲ奏スル者ニアラズ塗布法及ビ
 塗擦法(殊ニ灰白水銀軟骨及ビ沃度丁幾等)ハ吸收ヲ催進セシムル目
 的トシテ應用スルコトアリ
 (ほ) **皮上電氣用法** ハ兩極ノ導子ヲ共ニ甲狀軟骨板上ニ貼シテ麻
 痺セル神經及ビ筋ヲ刺衝シ又時トシテハ滲出物及ビ肥大組織ノ解
 凝ヲ促スニ用フルコトアリ而シテ之ヲ用フルニハ中等若クハ強力
 ノ電流ヲ撰ビ頻回開閉スルカ又ハフオルター氏ノ轉換器 *Volta'sche*
Alternativ ヲ用ヒ若クハフアラデー氏強流ヲ横ニ喉頭ニ通ゼシムルコ
 トアリ或ハ導子ヲ兩側反廻神經ノ徑路ニ貼シ或ハ一側ノ麻痺ニ在
 テハ之ヲ共同則ニ貼スベシ其他一極ヲ結候ト環狀軟骨トニ貼シ他
 極ヲ頸椎ニ貼スルコトアリ蓋シ喉頭ノ諸筋ハ平流電氣又ハ感傳電
 氣ヲ皮上ヨリ通ズルモ共ニ能ク興奮スル者タルハ試驗上既ニ疑ナ

キ所ナリ

第二項 内局處療法

内局處療法

内局處療法

ハ主ラトロンウ氏及ビペルロツク氏等ノ功勞ニ依テ喉頭鏡検査法以前早ク既ニ世ニ行ハレタリト雖ドモ其鏡ノ發明以來益々發達シテ完全トナリ正當確實ニ行ヒ得ルニ至レリ而シテ喉頭内療法ハ喉頭内ノ疾患ヲ局所的ニ攻ムルヲ目的トナスガ故ニ或ル藥物ヲ取り之ヲ蒸氣又ハ瓦斯トナシ若クハ微細ニ飛散セシメ吸氣ト共ニ吸入セシメ或ハ一種ノ構造ヲナセル器械ヲ以テ液性若クハ固形ノ藥物ヲ喉頭内ニ塗敷シ若クハ燒灼切斷等ノ如キ手術ヲ施スニアリ

(い) 藥物蒸氣ノ吸入法

ハ肺患ニ比スレバ之ヲ行フコト稀ナリ此法中最モ單簡ニシテ且ツ最モ有効ナルハ水蒸氣ナリ而シテ熱キ水蒸氣ヲ吸入スルトキハ分泌物ノ粘稠ナルカ若クハ粘膜上ニ乾燥

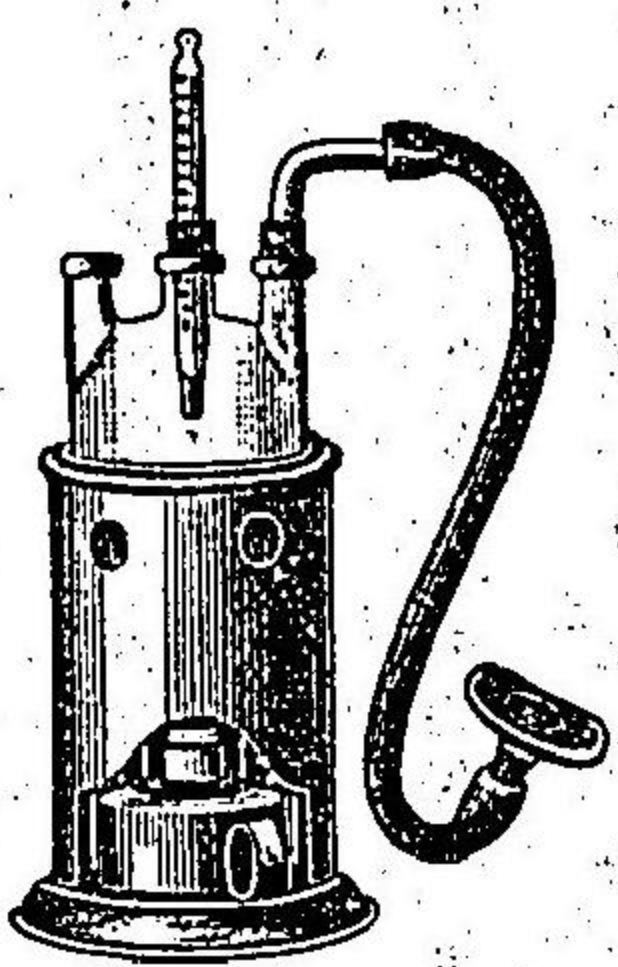
セル者ヲ融解シ又ハ義膜ヲシテ疎脱シテ之ヲ排出シ易カラシム是レ蓋シエルテル氏ノ證明セシ如ク熱蒸氣ハ纖維性滲出物ヲシテ化膿性變化ヲ催進スルノ効アルニ基ク者ナリ而シテ此法ヲ行フニハ通例罐ニ水ヲ盛り之ヲ火上ニ置キ昇騰セル蒸氣ヲ適當ノ漏斗ニ集メテ吸入スルヲ以テ足レリ時トシテハ水ニ代フルニ茶(加密列茶ノ如キ)ノ浸劑ヲ以テスルコトアリ或ハ水ニ藥物ヲ加フルコトアリ但シ其藥ハ流動性ナルカ又ハ高熱ニ遇フ時ハ流動性ニ變ズベキ者ニ限ル就中石炭酸「チモール」クレオソート及ビ「ペールーバルザム」等ハ最モ多ク用フル所ナリ今其處方ノ一二ヲ撰デ左ニ例セントス

- ◎石炭酸 三〇—四〇 水一〇〇〇
- ◎チモール 一五 再餾酒精 一五〇 炭酸「マグネシア」 〇.七五 水一〇〇〇
- ◎クレオソート 六〇 水 一〇〇〇
- ◎ペールーバルザム 四〇 再餾酒精 二〇 水 一〇〇〇

右各々一食匙ヲ水半リテルニ和シ吸入セシム
 蒸氣ノ熱度ハ攝氏六十度ヨリ高カラズ五十五度ヨリ低カラザルヲ
 要ス而シテ毎日數回五分時間ヅ、吸入セシメ格魯布ニハ半時毎ニ
 十五分時間ヅ、持續スベシ

ローゼンベルグ
ノ装置

第二十圖



ローゼンベルグ氏ハメントールヲ吸入セシメンガ爲ニ一種ノ装置
 ヲ實用セリ則チ第二十九圖ノ如ク三個ノ口ヲ有スル壘ニシテ中央
 一口ニハ檢温器ヲ插ミテ壘中ノ温度ヲ驗スルニ供シ一側ノ口ニ
 ハ吸口ヲ有セル管ヲ附シ他側ノ一口ハ吸引ノ際外氣ノ壘中ニ入ル
 ニ備フ而シテ壘ニハ五瓦乃至六瓦ノメ
 シントールヲ盛リテ水ヲ充テタル罐上ニ
 立テ罐下ニハ酒精燈ヲ置ク可シ此ノ如
 クシテ壘内ノ温度攝氏三十五度乃至三
 十七度ニ達スル時ハメントールハ流動
 ス此ニ於テ更ニ熱シテ大約四十度ニ至レバ瓦斯狀トナリテ空氣ト

氣狀體ノ吸入

ヤール氏ノ装置

共ニ吸入スルコトヲ得ルナリ
 (ろ)氣狀體ノ吸入法 松葉油、テルペンチン油、二%貌魯謨及ビ貌
 魯謨加里溶液五乃至十%石炭酸溶液等ノ如キハ之ヲ綿球ニ浸シ一
 種ノ器中ニ納レテ口前ニ保チ吸入スルコトヲ得ベシ則チクルシユ
 マン氏ノ假面ベシユリン氏吸入器或ハハウスマン氏吸入器ノ一ヲ
 撰用スベシ蓋シ此吸入法ハ患者ニ苦惱ナク長時間行ヒ得ルノミナ
 ラズ且ツ吸入法ヲ行ヒツ、運動シ得ルヲ以テ大ニ便ナリ
 ヤール氏ノ說ニ據レバ假面ヲ通ジテ吸引セラレタル藥品ヲ含メル
 空氣ハ假令十分ニ其藥氣ヲ以テ抱和スルモ其呼吸器ニ入ルニ及テ
 ハ藥氣ハ既ニ分離シテ水蒸氣ト共ニ凝集スルコトナシト云フ是ヲ
 以テ氏ハ一種ノ装置ヲ用ヒテ藥液ヲ豫メ體温以上ニ温メタリ即チ
 其裝置ハ大小二個ノ圓筒狀罐相重層シ兩壁ノ間ハ一二仙迷ノ距離
 ヲナシ此ニ水ヲ充テ瓦斯燈或ハ酒精燈ニ上セテ適度ノ熱ヲ與フ又
 此水ヲ盛レル器底及ビ兩壁ノ間ニ數回回轉セル管ヲ納メ其一端ハ

霧散吸入法

外罐壁ヲ穿テ外氣ニ通シ他端ハ内罐中ニ入ル而シテ内罐壁ノ上部三分一ニ於テ管ノ内端ニ對セル地平ノ一管ヲ有シ茲ニ吸口ヲ設ク患者ハ此吸口ニ於テ温暖ニシテ藥液ヲ以テ飽和セル空氣ヲ吸入スルナリ此裝置ノ上方ニハ開閉自在ノ蓋アリ之ヨリ藥液ヲ内罐ニ注入スベシ其他二個ノ檢溫器アリテ吸入スベキ空氣ト兩壁間ノ水ノ溫度ヲ驗シ得ベシ若シ流動性藥品ヲ用フル時ハ吸液管ヲ内罐内ノ吸入液中ニ樹テ水蒸氣ヲ噴出スル所ノ一管ヲ之ニ結合スベシ

(は)霧散セル液ノ吸入 (霧散吸入法) 是亦喉頭疾患ニ於テ其用甚ダ廣シ霧散器ノ種類多シト雖ドモ就中ベルグソン氏ノ原理ニ據テ製シタル者ハ一般ニ外科用霧散消毒器トシテ用フル者ニシテ世ノ最モ通知スル所ナリ又更ニ之ヨリ良好ナルハシューグレ氏ノ蒸氣吸入裝置ニシテ壓縮腔氣ニ代フルニ張力アル水蒸氣ヲ以テ動力トナスモノナリ但シ霧散氣ノ寒冷ナル者ヲ吸入セント欲セバ(收斂藥止血藥等ノ如シ)ベルグソン氏ノ複球霧散器ヲ用フルヲ良トス而シテ

其吸入ハ通例一日一回乃至四回ニシテ實扶的里ニ在テハ更ニ頻回ナルヲ要ス又吸入ノ時間ハ毎回二分時乃至五分時若クハ二十五分時トス

吸入藥中其用最多キ者ハ概テ左ノ如シ

- ◎明礬 ○三乃至二〇 水一〇〇〇
- ◎硝酸銀 ○〇二乃至一〇 水一〇〇〇
- ◎過格魯兒鐵液 ○三乃至三〇 水一〇〇〇
- ◎格魯兒亞鉛 ○三乃至一〇 水一〇〇〇
- ◎單寧酸 ○二乃至一〇 虞利斯林 五〇 水一〇〇〇
- ◎石炭酸 ○五乃至一〇 水一〇〇〇
- ◎クレオソート 一〇乃至一〇〇 水一〇〇〇
- ◎クレオリン ○一乃至〇三 水一〇〇〇
- ◎テレベンチン油 ○五乃至二〇 水一〇〇〇
- ◎乳酸 ○五乃至三〇 水一〇〇〇

- 昇汞 〇、〇二乃至〇、三 水一〇〇、〇
 - 鹽酸加里 一、〇乃至二、〇 水一〇〇、〇
 - 硼酸 一、〇乃至二、〇 水一〇〇、〇
 - 鹽化那篤留謨 〇、六乃至一、〇 水一〇〇、〇
 - 重碳酸那篤留謨 〇、二乃至一、五 水一〇〇、〇
- 又麻酔藥ハ主ラ他藥ニ伍用ス則チ其處方左ノ如シ
- 苦扁桃水 〇、三乃至三、〇 水一〇〇、〇
 - 阿片越幾斯 〇、〇一乃至〇、〇五 水一〇〇、〇
 - 鹽酸モルヒネ 〇、二乃至〇、五 虞利斯林 一、〇、〇右二十滴乃至三十滴 水一〇〇、〇
 - 鹽酸コカイン 〇、二乃至一、〇 水一〇〇、〇
 - 單阿片丁幾 〇、〇五乃至一、〇 水一〇〇、〇
 - 莨菪越幾斯 〇、〇一乃至〇、〇五 水一〇〇、〇
- 以上ノ藥液ハ五瓦、十瓦或ハ四十瓦ヲ吸入一回ノ量トス

吸入藥ノ價値

霏散セル藥液ハ吸入作用ニヨリテ氣道中殊ニ喉頭ニ達スルハ固ヨリ疑ナシト雖ドモ茲ニ達スルノ量ハ極メテ微小ニシテ定量スルニ足ラズ何トナレバ水蒸氣ト霏散セル藥液トノ比例ハ裝置ノ異ナルニ隨テ自ラ相一致セズ且ツ蒸氣噴出ノ強弱器械所在ノ距離及ビ吸入力ノ強弱ニ關シテ差異アレバナリ是ヲ以テ或ハ一種ノ裝置ヲ用ヒ其小管ヲ咽頭ニ送入シ口内ニ於テ藥液ヲ霏散セシメ其方向ヲ氣道ト相一致セシメ以テ此弊ヲ除カンコトヲ企タル者アリト雖ドモ此ノ如クナストキハ徒ラニ患者ヲシテ苦惱ニ耐ヘザラシムルノミニシテ十分ノ良効ヲ得ズ蓋シ今日一般ニ吸入法ノ行ハル、ノ多キハ醫師及ビ患者ニ於テ之ヲ用フルニ敢テ巧致ヲ要セザルガ故ニ必ズシモ局處療法ヲ要セザル症ニ在テモ先ヅ之ヲ處スルニ因ルナリ凡テ吸入ニハ濃厚ナル藥液ヲ用フルコトナク且ツ喉頭内ニ有力ノ局處作用ヲ需ムル症ニ於テハ吸入法ノ特ム可カラザルハ諸家ノ等シク主唱スル所ナリ是ヲ以テ霏散藥液ノ作用ハ概テ高熱水蒸氣ニ

歸スベク之ニ含メル藥品ノ量ハ僅微ニシテ其作用モ亦自ラ微々タルニ過ギズ由是觀之バ喉頭病ニ霏散氣ヲ用フベキ症ハ決シテ多カラズ唯々醫師ノ屢々患者ヲ訪フコト能ハザル時ニ際シテ患者自身ヲシテ幾分ノ治方ヲ施サシメ以テ醫治ノ助ヲナサシムルニ於テハ亦稍々益スル所アルベシ

含嗽劑

喉頭疾患ニ於ケル含嗽劑ノ確効ヲ望スベキ者ニアラザルハ敢テ喋々ヲ俟ズシテ明ナリト雖ドモ醫家中或ハ尙ホ聲音啞嘶症ニ之ヲ處スルモノアリ眞ニ誤レリト云フ可シ但シ會厭軟骨上部ノ疾患ニ對シテハ全ク効ナシトセズ此症ニ在テハ患者ハ頭首ヲ大ニ反張シ舌ヲ可成的平坦ニシ藥液ヲシテ深ク喉頭上口ニ達セシメントナ務ム可シ

以上述ブル所ハ間接ニ藥ヲ喉頭内ニ送ルニ過ギズシテ効用自ラ確實ナラズ故ニ局處療法ノ確効ヲ要スル症ニ在テハ必ず特別ノ裝置ヲ用ヒテ流動性若クハ固性ノ藥品ヲ直チニ喉頭ニ貼センコトヲ要ス總テ喉頭内ニ直チニ藥ヲ貼シ若クハ手術ヲ施サシムルガ爲ニ器械ヲ使用スルニハ必ず喉頭鏡ノ扶ヲ要ス則チ術者ハ鏡ヲ左手ニシ器械

喉頭内藥液塗布

毛筆

海綿球

ヲ右手ニ執リ患部ヲ明視シテ施術スベシ而シテ器械ハ「カテーテル」狀ニ彎曲スルカ或ハ殆ド直角ニ曲折スル者ヲ良シトス總テ器械ヲ喉頭内ニ送入スルニハ頗ル熟練ヲ要ス否ラザレバ喉頭諸病ノ確實ナル治法ヲ行フコト能ハズ而シテ之ガ習練法ハ既ニ述ベタル「フアントーム」練習或ハ探子使用法ニ倣フベシ

(ニ)液性藥品ノ用法之ニハ毛筆小海綿或ハ特ニ構造セル柄ニ固拮セル小綿球若クハ注射器ヲ用フ可シ

喉頭毛筆ハ細微ノ駱駝毛若クハ栗鼠毛ヲ以テ作り亞爾密紐膜若クハ銀管ニ植ヘ更ニ木柄或ハ金屬柄ヲ有シ毛端ハ尖銳トナリ若クハ截斷ス又穂ト莖トノ接際ハ硬護膜ヲ以テ包ム者ヲ良トス

喉頭用海綿球ハ殆ド大豆大ニシテ卵圓形ヲナシ之ヲ莖ニ附ス其構造ハ毛筆ニ異ナラズ

毛筆及ビ海綿球ハ共ニ液性藥ヲ浸シテ喉頭腔ニ送ルニ用フル者ニシテ各々一得一失アリ即チ海綿ハ其表面粗糙ナルガ爲ニ時トシテ

ハ使用ノ際喉頭上口ニ固止シテ深部ニ達シ難キコトアリ又毛筆ハ

液ヲ含ムコト海綿ヨリ少ナシト雖ドモ

喉頭腔ノ深部ニ達シ易ク殊ニ末端尖銳

ナル者ヲ用フルトキハ細小ナル部分ト

雖ドモ隨意ニ藥液ヲ塗敷スルヲ得ベシ

又「ピンセット」狀ヲナセル特別ノ海綿柄

ヲ造テ用フル者アリ之ヲ用フルニハ安

全鎖鑰ヲ以テ嘴端ヲ固收シ以テ海綿ノ

脱墜ヲ防グベシ此ノ如クスルトキハ毎

回新鮮ノ海綿ヲ用フルヲ得ルノ利アリ

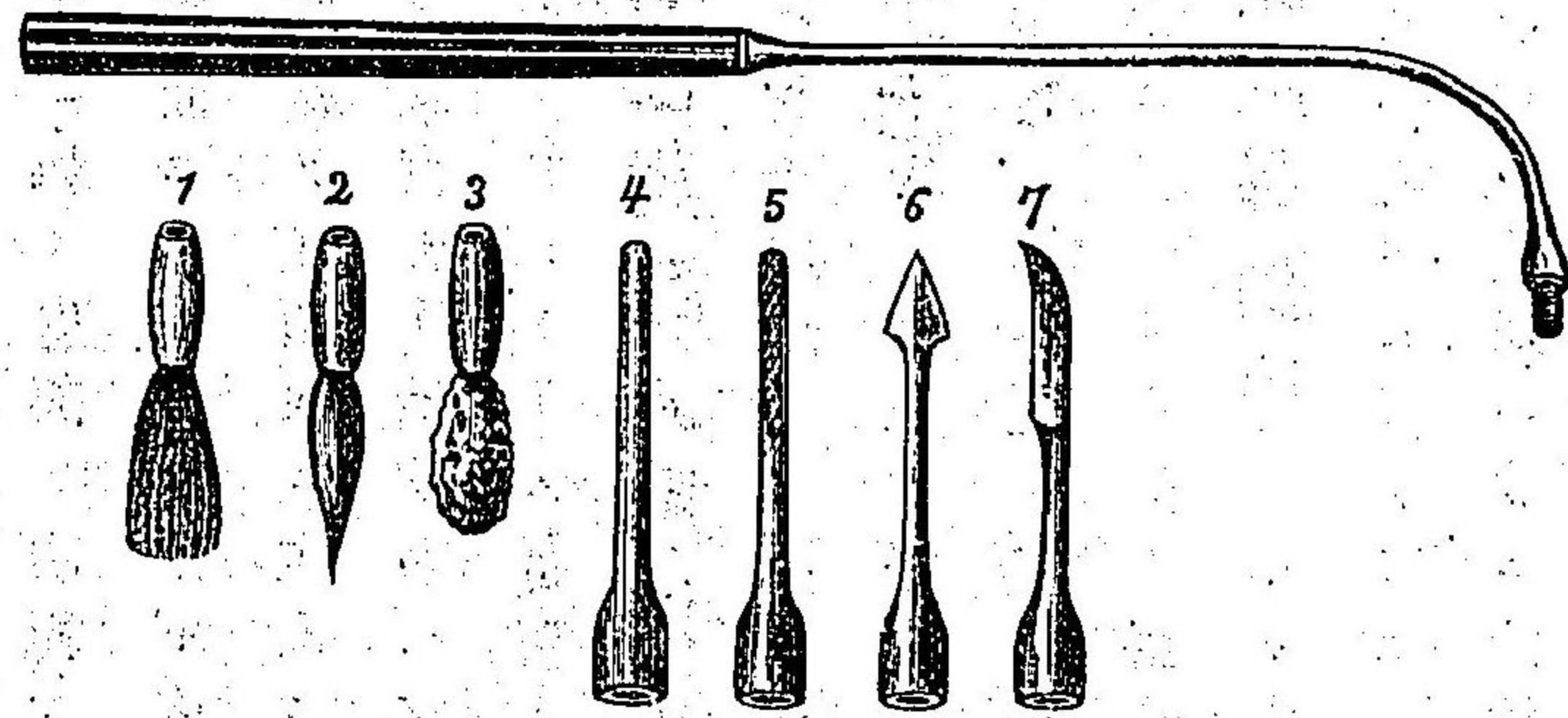
更ニ一層簡便ナルハ毛筆ト海綿球トヲ

一莖ニ附着スルナリ(第三十圖「二三」)

海綿球及ビ毛筆ハ使用後毎回注意シテ

之ヲ清洗スベシ特ニ沸湯ヲ以テ洗ヒ兼

第三十圖



綿球

注入器

テ消毒スルヲ最良トス但シ毛筆ハ海綿ニ比スレバ清洗シ易キヲ以テ勝レリ

海綿球及ビ毛筆ニ代フルニ綿球ヲ以テスルコトアリ則チ適宜ノ綿

花球ヲ造リ之ヲ「ピンセット」狀ノ器械(第三十一圖)ニ把

持シ綿球ノ脱落ヲ防ガシ爲ニ「ピンセット」ノ兩脚ヲ固

定セシム可キ装置ヲ設ク其他「マイエルソン」氏ノ重複

螺旋ヲ有スル者及ビ「ニツチエ」氏ノ鉗子狀ニシテ二個

ノ小撥條間ニ輪ヲ用ヒテ綿球ヲ固定スベキ者ハ更ニ

簡便ナリ之ヲ要スルニ毛筆及ビ海綿ヲ用ユルニ比ス

レバ綿花ハ使用後棄却シ去ルヲ以テ清潔ニシテ且ツ

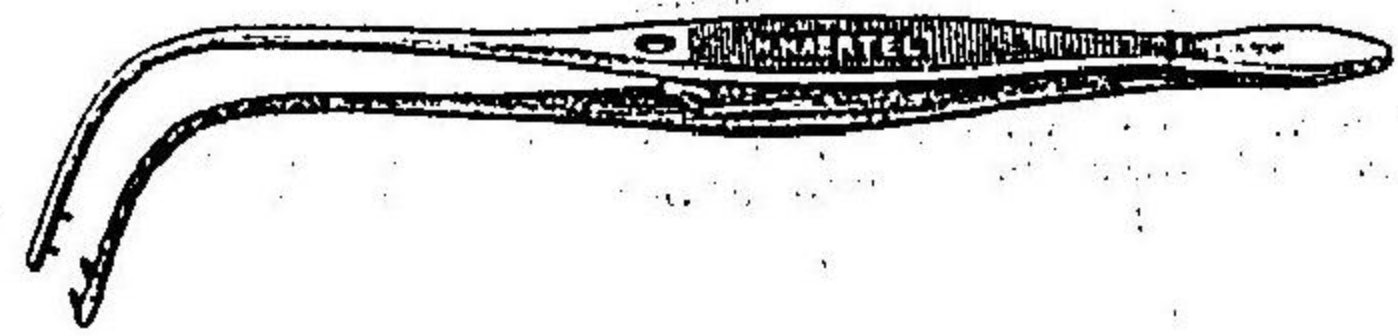
傳染ヲ防止シ得ベク又其支持者モ使用後熱湯中ニ煮

沸スレバ直チニ消毒サル、ヲ以テ大ニ勝レリ

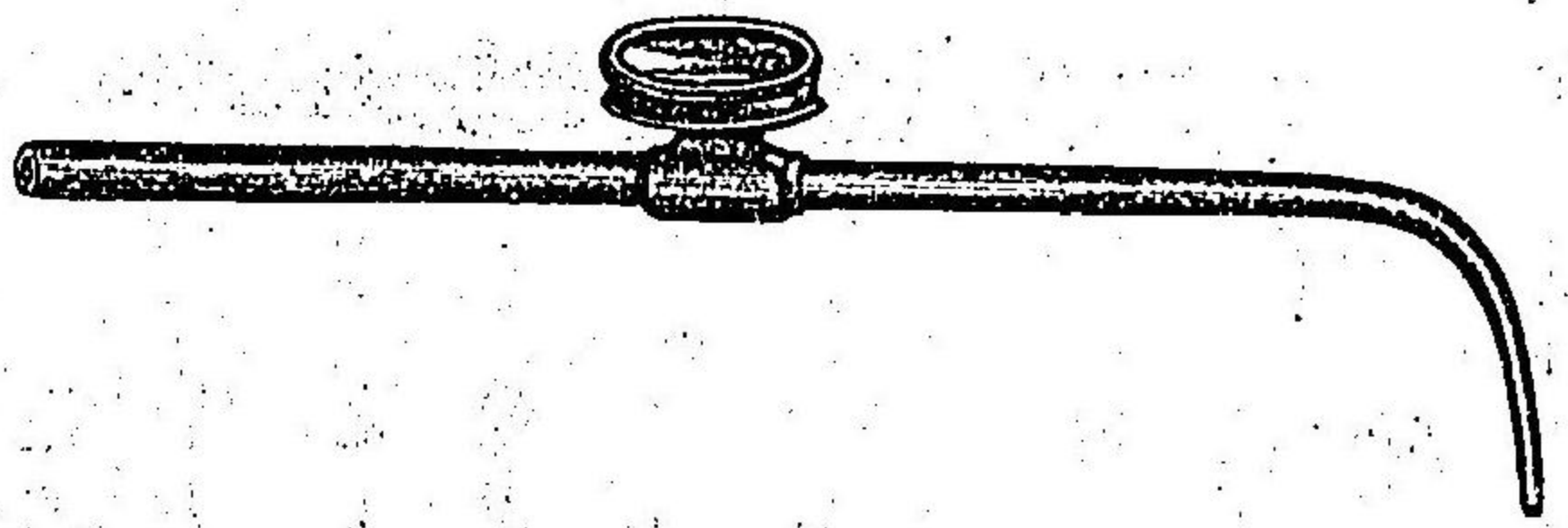
喉頭注入器ハ海綿球及ビ毛筆ニ比シテ敢テ特別

ノ利益ナシト雖トモ唯々多量ノ液ヲ喉頭内ニ送ルノ際時トシテハ

第三十一圖



第三十二圖



之ヲ用フルコトアリ而シテ其最モ單簡ナルハステルク氏及ビハルテフェルト氏ノ注入器トス(第三十二圖)此器ハ硬護膜製ノ筒ニシテ把柄及ビ彎曲セル嘴管ヲ有ス而シテ筒ト柄トノ接際ニハ筒内ニ通ズル一管アリ更ニ此管ノ上方ハ護膜片ヲ以テ密封シテ恰モ鼓皮ノ如クス而シテ此ノ護膜片ヲ壓ストキハ空氣ハ兩管ヲ通ジテ遁出スルガ故ニ用ニ臨テ嘴端ヲ藥液中ニ没ジ護膜片上ノ指ヲ去ルトキハ藥液隨テ筒中ニ入ル此ノ如クシテ此器ヲ口中ニ送り嘴端ヲ喉頭ニ向ハシメ輕ク護膜上ヲ壓ストキハ藥液線狀ヲナシテ射出スベシ

毛筆海綿球若クハ綿球ニテ喉頭ニ塗敷スベキ藥液ハ概テ左ノ如シ

- 結晶硝酸銀 〇、三乃至三、〇 餾水一〇、〇
- 單寧酸 一、〇乃至二、〇 虞利斯林 一〇、〇

藥粉吹入

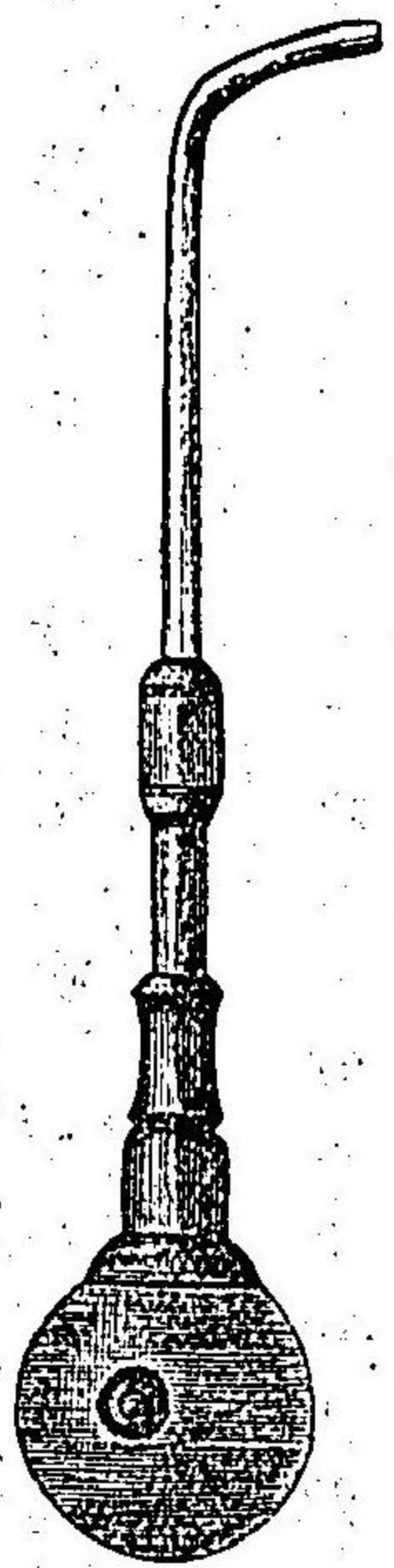
- 硫酸亞鉛 二、〇乃至三、〇 餾水一〇、〇
- 鹽酸加里 三、〇乃至五、〇 餾水一〇、〇
- 石炭酸 〇、一至〇、五 虞利斯林一〇、〇
- クレオソート 一、〇乃至三、〇 酒精四〇、〇 虞利斯林六〇、〇
- 鹽酸モルヒチ 〇、三乃至〇、五 虞利斯林一〇、〇
- 臭素加里 一、〇乃至三、〇 虞利斯林一〇、〇
- 臭化アンモニア 一、〇乃至三、〇 虞利斯林一〇、〇
- 鹽酸コカイン 〇、二乃至二、〇 餾水一〇、〇
- 乳酸 〇、二乃至八、〇 餾水一〇、〇
- メントール 〇、五乃至二、〇 オレフ油一〇、〇

喉頭注入器ヲ用フルトキハ更ニ稀薄ノ溶液トナスベシ

(ほ)固形藥用法 ハ粉末藥ヲ吹入シ若クハ腐蝕藥等ヲ特別ノ器械ニテ喉頭内ニ塗敷スルナリ

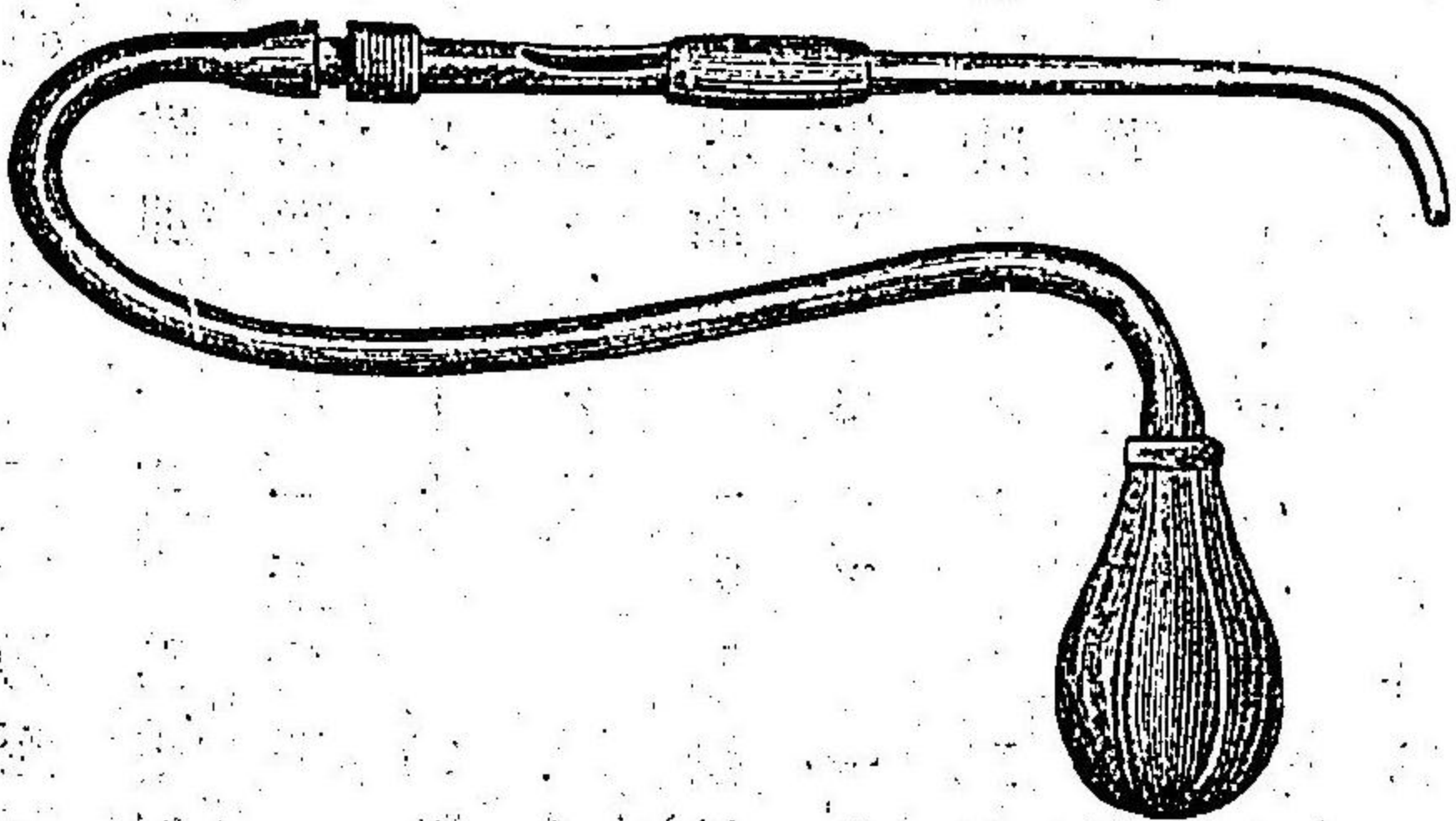
粉末藥ヲ喉頭内ニ吹入スルニハ宜シク吹入器ヲ用フベシ此器ハ(第

圖三十三第



三十三圖硝子製硬
護謨製若クハ銀製
ノ曲管ニシテ粉末

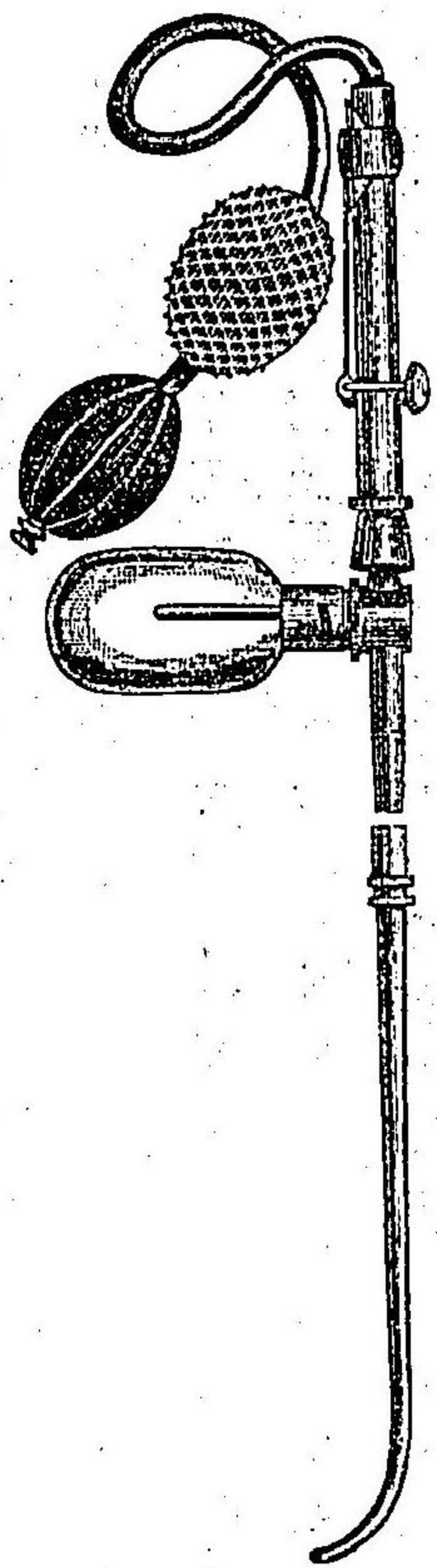
圖四十三第



ヲ受容スベキ適應ノ裝置ヲ有シ後端ノ
小護謨球ヲ握搾スル時ハ粉末喉頭内ニ
入ルナリ但シ此器ハ其護謨球握搾ノ際
嘴端往々動テ藥末ヲ他部ニ吹入スルコ
トアルヲ以テ護謨球ニ代フルニ長キ護
謨管ヲ以テシ其外端ニ硬護謨製若クハ
硝子製ノ口片ヲ附シ術者ノ口ニ接シテ
吹出スルヲ良トス但シ此器ヲ用フルニ
方テ偶々患者咳嗽スルトキハ藥末逆行
シテ術者ノ口中ニ入ルコトアリ之ヲ防
ガンガ爲ニ喉頭ニ向テノミ開ク可キ瓣

ヲ附スベシ但シ此器ハ潔癖ノ患者ニ在テハ大ニ之ヲ厭惡スルヲ以
テ亦賞用スベキ者ニアラズ蓋シ吹入器中最モ優等ノ者ハ第三十四
圖ニ示スガ如キ護謨管及ビ護謨球ヲ有スルモノトス此護謨球ハ術
者坐位ニ在テ兩膝間ニ挾テ壓縮スルナリ又重複吹球ヲ有スルカビ
エルスケ氏及ビゴットスタイン氏ノ吹入器アリ(第三十五圖)之ヲ用
フルニハ先ヅ重複球ニ空氣ヲ滿タシ護謨管ヲ術者ノ頸ニ廻ラシテ
球ヲ左肩上一ニ置キ把柄ニ附スル鈕ヲ壓スレバ柄内ノ瓣前方ニ開キ

圖五十三第



吹球中ノ空氣ハ自ラ流出シテ器中ノ藥末嘴管ヲ經テ喉頭内ニ噴出
ス此器ハ單ニ一手ヲ以テ使用シ得可ク且ツ之ヲ支持シ易ク又大ニ

清潔ニシテ用法確實ナリ而シテ吹入薬一回ノ量大約〇、一乃至〇、五トス但シ特ニ少量ヲ要スル粉末例之、モルヒ子ノ如キハ之ニ澱粉乳糖若クハ滑石少許ヲ加ヘテ用フベシ
吹入薬ノ處方左ノ如シ

○硝酸銀 〇、〇五乃至一、〇 滑石一〇、〇

○單寧酸 一、〇乃至三、〇 滑石一〇、〇

○精製明礬末 單味若クハ等分ノ乳糖ヲ和ス

○硼酸末 單味若クハ等分ノ「ヨドール」或ハ「デルマトール」ヲ和ス

○沃度ホルム 單味若クハ依的兒ヲ和ス

○沃度兒 單味若クハ等分ノ硼酸ヲ和ス

○モルヒ子 一回ノ量〇、〇四乃至〇、〇七五若クハ〇、〇一五

就中モルヒ子ハ必ズ一回量ノ處方ヲ與フルヲ佳トス而シテ之ニ澱粉〇、二若クハ硼酸〇、二五ヲ加フベシ
粉末薬吹入法ノ適症ハ藥液塗布ニ於ケルモノト異ナルコトナシ而

腐蝕藥

硝酸銀

シテ此法ハ行ヒ易シト雖ドモ通例塗布法ニ於ケル如ク効用ヲ一小部ニ限局セシムルコト能ハズ但シ塗布法ハ窒息様ノ機轉ヲ起サシムルコト吹入法ヨリモ多シ其他吹入法ハ氣管ノ疾病ニハ頗ル適當ノモノナリ

腐蝕藥ヲ用フルニハ特別ノ器械ヲ要ス而シテ其藥品ノ主タル者

ハ硝酸銀、格魯謨酸及ビ三格魯兒醋酸等ナリ其器械ハ末端ニ溝若クハ鑷子狀ノ粗糙面ヲ具フル探子(第三十圖4及5)或ハ通常喉頭探子ニシテ使用頗ル單簡ナリ之ニ硝酸銀ヲ溶着スルニハ先ヅ陶皿或ハ硝子皿ニ硝酸銀ヲ入レ酒精燈上ニテ溶融セシメ探子ノ末端ヲ其中ニ没スベシ又單ニ探子ノ末端ヲ灼熱シ之ヲ硝酸銀錠ニ接觸セシムルモ可ナリ而シテ喉頭内ノ腐蝕セントスル部位ノ異ナルニ隨テ探子ノ末端ニ其一側若クハ他側ニ溶着セシムベシ
又掩蔽腐蝕藥柄ト名クル器アリ此器ハ螺旋狀撥條ノ作用ニ依テ末端ノ硝酸銀錠ヲ掩蔽シ之ヲ喉頭内ニ送り再ビ錠面ヲ裸出セシメテ

格魯謨酸

局處ヲ腐蝕スルナリ但シ此器ハ徒ラニ複雑ナルノミニシテ敢テ益ナク加之ラズ時トシテハ其銀錠破碎シテ屑片喉中ニ散落スルコトアルヲ以テ甚ダ危険ナリ

格魯謨酸ハヘーリング氏ノ創メテ用ヒシ所ニシテ之ヲ探子ニ鍍着スルニハ格魯謨酸ノ小結晶一二片ヲ取り探子ノ末端ニ接着シ尋常ノ石油燈若クハ酒精燈上ニ懸シ小心注意シテ極メテ徐々ニ熱スベシ此ノ如クスルトキハ大約十五秒時乃至三十秒時ニシテ結晶ハ曝曬トシテ鍍化シ帶赤粘糊トナリテ探子ノ末端ヲ被フ此ニ於テ直チニ冷却シテ固結セシムベシ但シ加熱長キニ過グルカ或ハ火熱強キニ過グルトキハ帶綠黑色トナリ頗ル脆弱ニシテ碎ケ易ク且ツ腐蝕性ナキ酸化クロームトナル宜シク注意スベシ

三格魯兒醋酸モ同上ノ法ヲ以テ探子ニ鍍着スベシ但シ格魯謨酸ニ比スレバ使用ニ適セズ

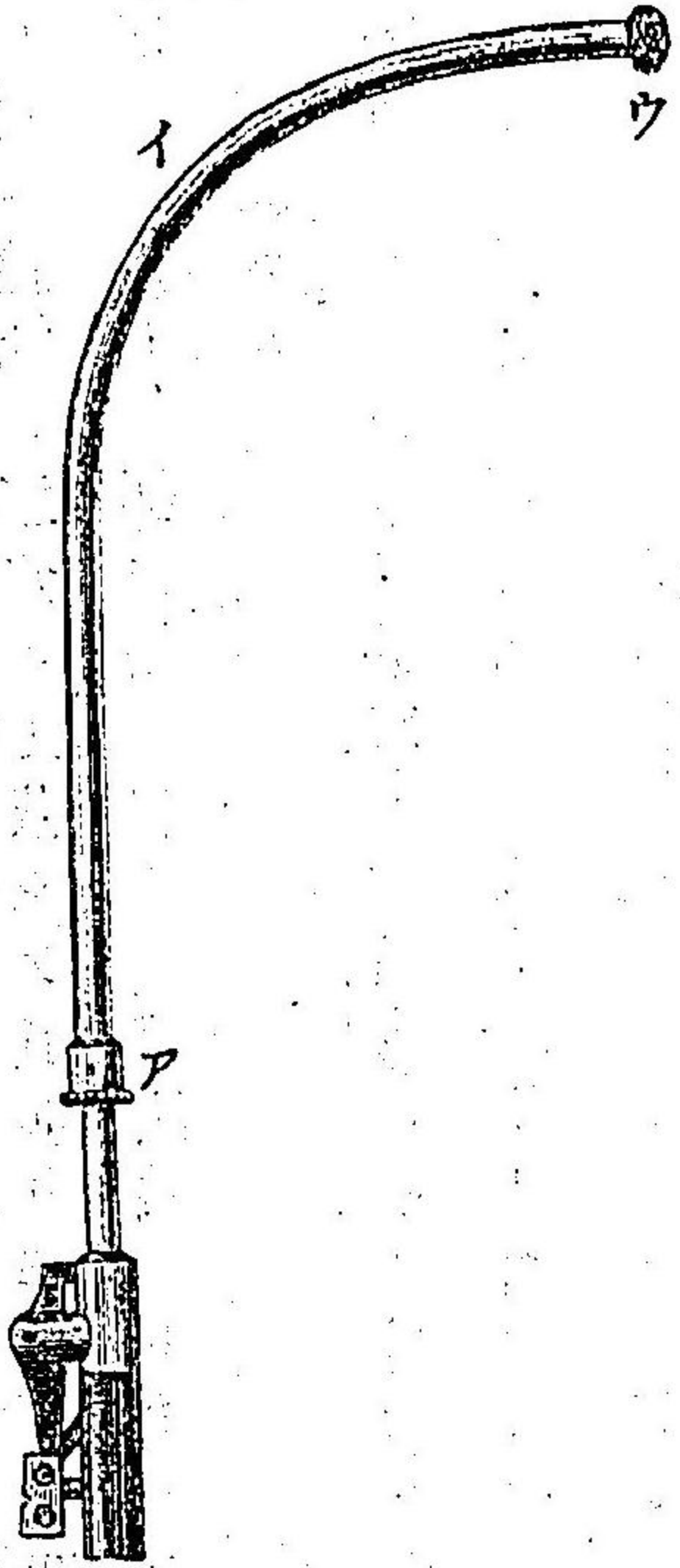
三格魯兒醋酸
喉頭内電氣療法

(ハ) 喉頭内電氣療法 此法ハ頑固ノ喉頭麻痺症ニ行フコト多シ

オイレング氏ノ導子

則チ一極ノ導子ヲ喉頭内ニ貼シ他極(通例積極)ヲ頸部ニ纏絡セル電氣帶ニ通ズルナリ之ニ用ユル導子ハ長クシテ適度ニ彎曲シ其末端球狀ヲナセル金屬桿ニシテ恰モ喉頭探子ニ似タリ而シテ其外面ハ硬護膜ヲ以テ包ミ木製ノ柄ヲ附ス又柄ニハ鉗子或ハ小槓桿ヲ具ヘ用ニ臨デ之ヲ壓ストキハ電流閉鎖シテ末端ノ球狀部ニ達ス

第三十六圖



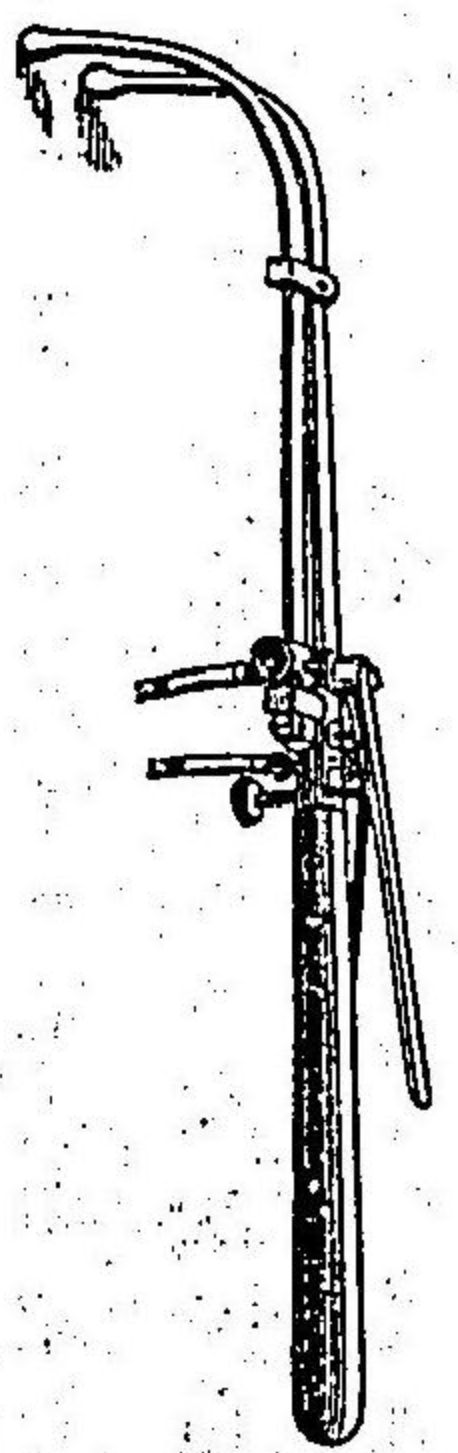
オイレング氏ノ導子ノ末端ニ白金締係ヲ附シ(第三十六圖)導子ノ外部ハ硬護膜製ノ外被(イ)ヲ覆フテ柄ニ近キ金屬輪(ア)ニ達シ推移シテ自在ニ進退セシメタリ此器ヲ用フルニハ豫メ導子ノ末端ヲ濕潤セル導體ニテ纏ハンガ爲ニ少許ノ綿花(ウ)ヲ撚テ白金締係ニ通シ兩側ニ挺出スル

チームゼン氏ノ導子

綿花ヲ殆ド同大ナラシメ水ニ浸シテ之ヲ濕ハシ次デ護膜被ヲ推進シテ全ク導線ノ縮係ヲ覆フテ僅ニ綿球ノ一小部ヲ現ハシ必要ニ應ジテハ更ニ綿塊ヲ適宜ニ剪截シテ其面ヲ平坦ニシ此ノ如クシテ喉頭ニ送入ス但シ一回使用シ終テハ護膜被ヲ退引シ以テ綿塊ヲ除去シ更ニ交新スルナリ

チームゼン氏ハ兩極ヲ同時ニ喉頭内ニ送り得ベキ導子ヲ案出セリ(第三十七圖)此器ハ兩極導子ノ末端球狀ヲナシテ相觸シ喉頭内ニ送入スルニ及ンデ柄上ノ小槓ヲ

第三十七圖



入スルニ及ンデ柄上ノ小槓ヲ壓ストキハ兩極排開シ始メテ電流ヲ通ズルナリ

内喉頭電氣療法ハ術者ノ熟練且ツ敏腕ヲ要スルモノニシテ特ニ豫メ筋及ビ神經ノ刺衝點ヲ審ニ譜記セザルベカラズ

今チームゼン氏ガ定ムル所ノ喉頭筋及ビ神經ノ刺衝點ヲ記載ス

(一) 橫披裂間筋及ヒ斜披裂間筋ノ刺衝點ハ披裂軟骨間截

喉頭筋及ビ神經ノ刺衝點

痕及ビ披裂軟骨後面ニアリ(第三十八圖I)此部ヲ刺衝スレバ披裂軟骨互ニ相接ス

(二) 後環狀披裂筋聲門擴張筋ノ刺衝點ハ喉頭後壁ノ正中

線ノ左右ニ偏シテ存ス故ニ披裂軟骨ノ後面ヨリ導子ヲ深ク環狀軟骨板部ノ後面ニ送ルベシ(第三十八圖II)此部ヲ刺衝スレバ披裂軟骨ハ其縱軸ニ沿フテ外後方ニ廻轉シ聲門擴張ス

擴張ス

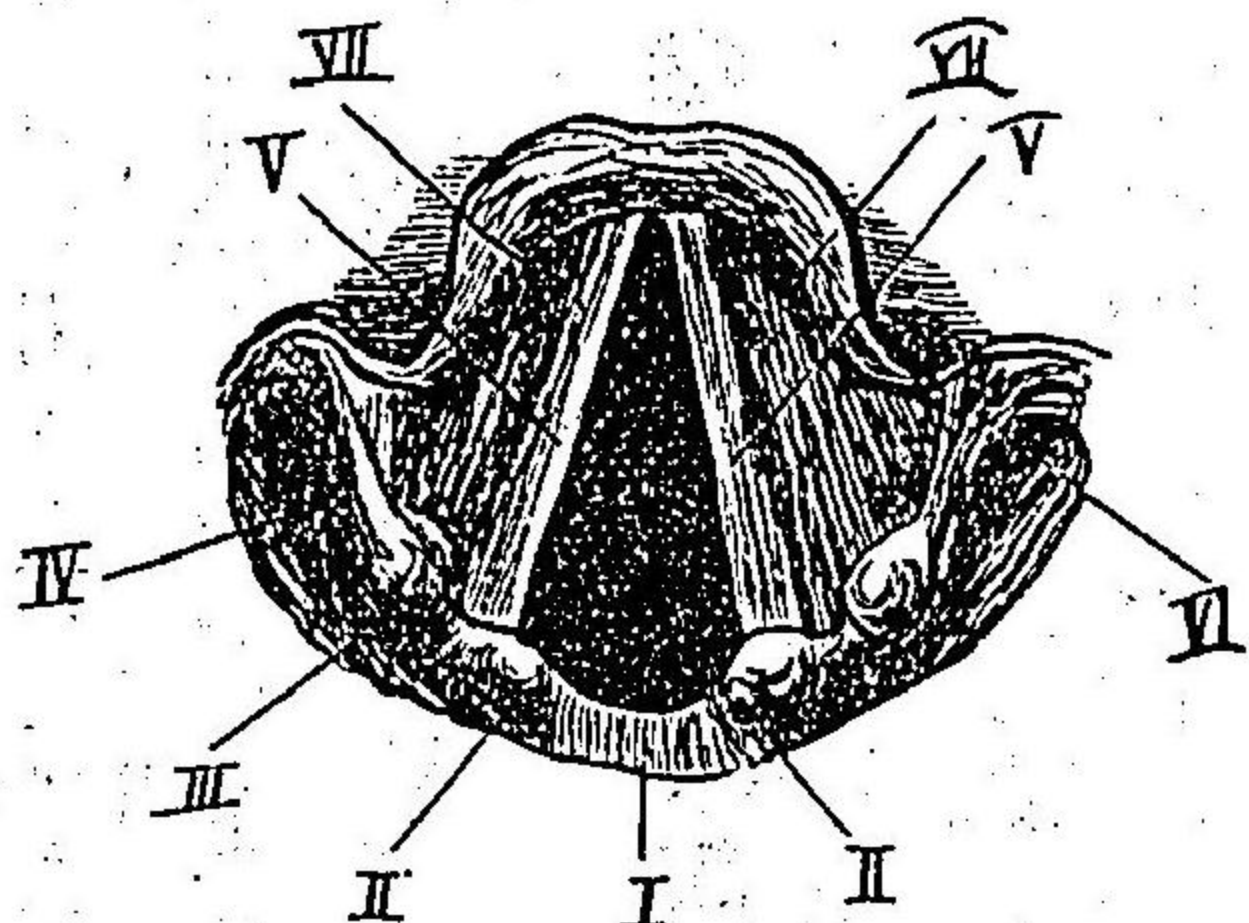
(三) 側環狀披裂筋ノ刺衝點ハ稍

々前方ニシテ梨子狀竇ノ深部ニ向ヒ環狀軟骨ノ外縁ニアリ(第三十八圖III)此部ヲ刺衝スレバ披裂軟骨ハ其縱軸ニ沿フテ微ク前内方ニ廻轉シ聲門突起及ビ聲

帶縁ハ正中線ニ向テ近接ス

(四) 内外甲狀披裂筋ノ刺衝點ハ同ジク梨子狀竇内(第三十八

第三十八圖



○内局治療法

圖IV)若クハ聲帶ニ在リ(第三十八圖V)但シ前者ニ在テハ電導子ノ把柄ヲ口角ニ對シ上外方ニ舉上シ後者ニ在テハ吸氣ノ際快手聲帶縁或ハ聲帶上ニ行フベシ此等ノ部ヲ刺衝スル下キハ披裂軟骨ハ前方ニ向テ牽引セラレベシ然レドモ後者ハ其刺戟頗ル著シキヲ以テ此法ヲ持久スベカラズ

(五)上喉頭神經ノ刺衝點ハ外方甲状舌骨膜ニ於テ此神經ノ穿通スル部ニアリト雖ドモ電氣ヲシテ確實ニ喉頭内ニ通ゼシメンニハ梨子狀竇ノ前方ニ於テスルヲ良トス(第三十八圖VI)此部ヲ刺衝スレバ會厭軟骨著ク下降ス

(六)甲状會厭軟骨筋及ヒ披裂會厭軟骨筋ノ刺衝點ハ會厭軟骨基底ノ側方(第三十八圖VII)若クハ梨子狀竇前方ニ於ケル上喉頭神經内枝ノ部ニアリ此等ノ部ヲ刺衝スレバ會厭軟骨下降ス

第三項 喉頭内外科手術

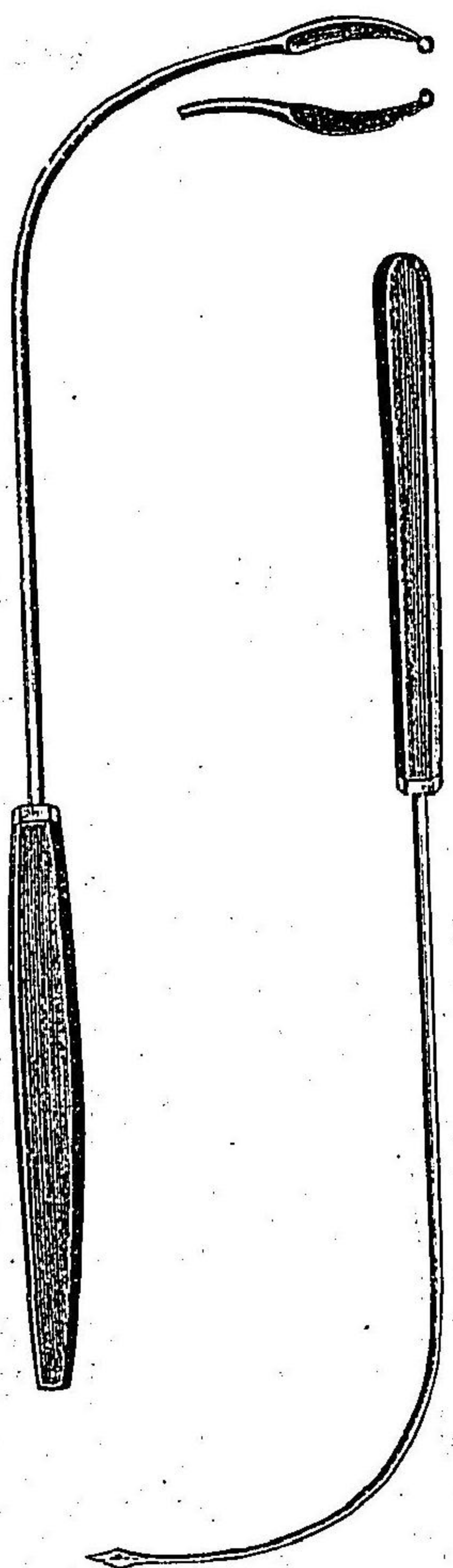
喉頭内外科手術

喉頭刀

喉頭内手術ノ目的ハ甚ダ種々ニシテ異物ノ除去、膿瘍ノ切開、新生物ノ切去等是ナリ而シテ此手術ニ要スル器械左ノ如シ

(一)喉頭刀(第三十九圖及ビ第三十圖6及7)ハ單及若クハ兩刃ニシテ鞘ヲ有スル者ト否ラザル者トアリ其鞘アル者ハ手術ノ際指ニテ柄内ノ撥條ヲ壓シテ刀身ヲ挺出セシム又縱截開或ハ橫截開ヲ行ハ

第三十九圖(一)



シテハ撥條ヲ有スル者ト否ラザル者トアリ其鞘アル者ハ手術ノ際指ニテ柄内ノ撥條ヲ壓シテ刀身ヲ挺出セシム又縱截開或ハ橫截開ヲ行ハ

圖IV)若クハ聲帶ニ在リ(第三十八圖V)但シ前者ニ在テハ電導子ノ把柄ヲ口角ニ對シ上外方ニ舉上シ後者ニ在テハ吸氣ノ際快手聲帶縁或ハ聲帶上ニ行フベシ此等ノ部ヲ刺衝スルトキハ披裂軟骨ハ前方ニ向テ攣引セラルベシ然レドモ後者ハ其刺戟頗ル著シキヲ以テ此法ヲ持久スベカラズ

(五) 上喉頭神經ノ刺衝點ハ外方甲状舌骨膜ニ於テ此神經ノ穿通スル部ニアリト雖ドモ電氣ヲシテ確實ニ喉頭内ニ通ゼシメンニハ梨子狀竇ノ前方ニ於テスルヲ良トス(第三十八圖VI)此部ヲ刺衝スレバ會厭軟骨著ク下降ス

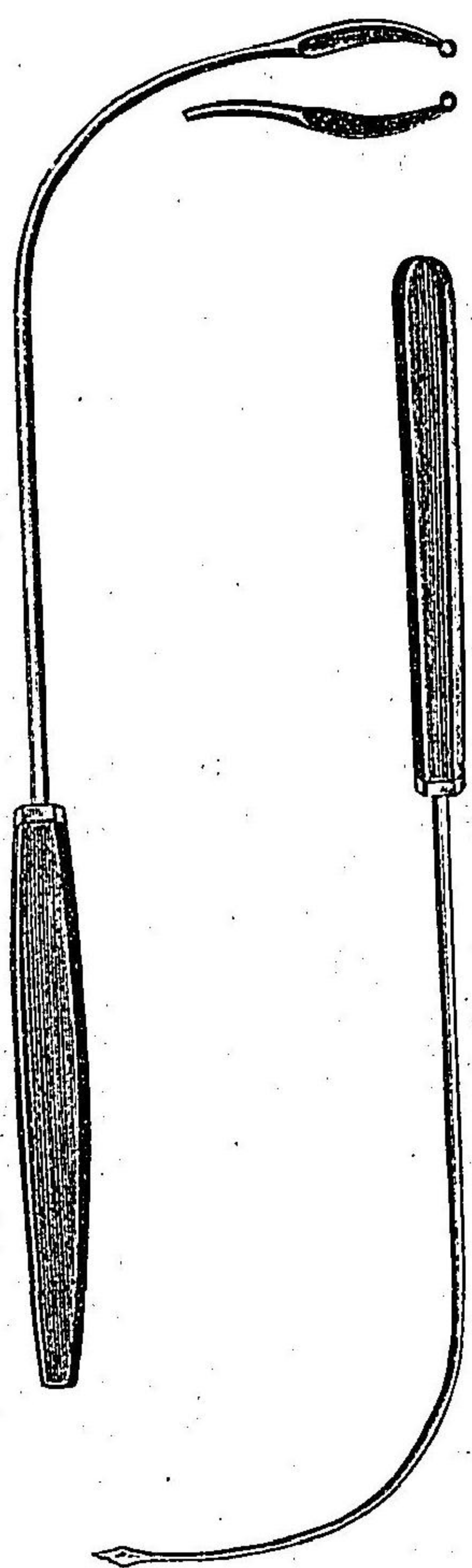
(六) 甲状會厭軟骨筋及ヒ披裂會厭軟骨筋ノ刺衝點ハ會厭軟骨基底ノ側方第三十八圖VII)若クハ梨子狀竇前方ニ於ケル上喉頭神經内枝ノ部ニアリ此等ノ部ヲ刺衝スレバ會厭軟骨下降ス

第三項 喉頭内外科手術

喉頭内手術ノ目的ハ甚ダ種々ニシテ異物ノ除去膿瘍ノ切開新生物ノ除去等是ナリ而シテ此手術ニ要スル器械左ノ如シ

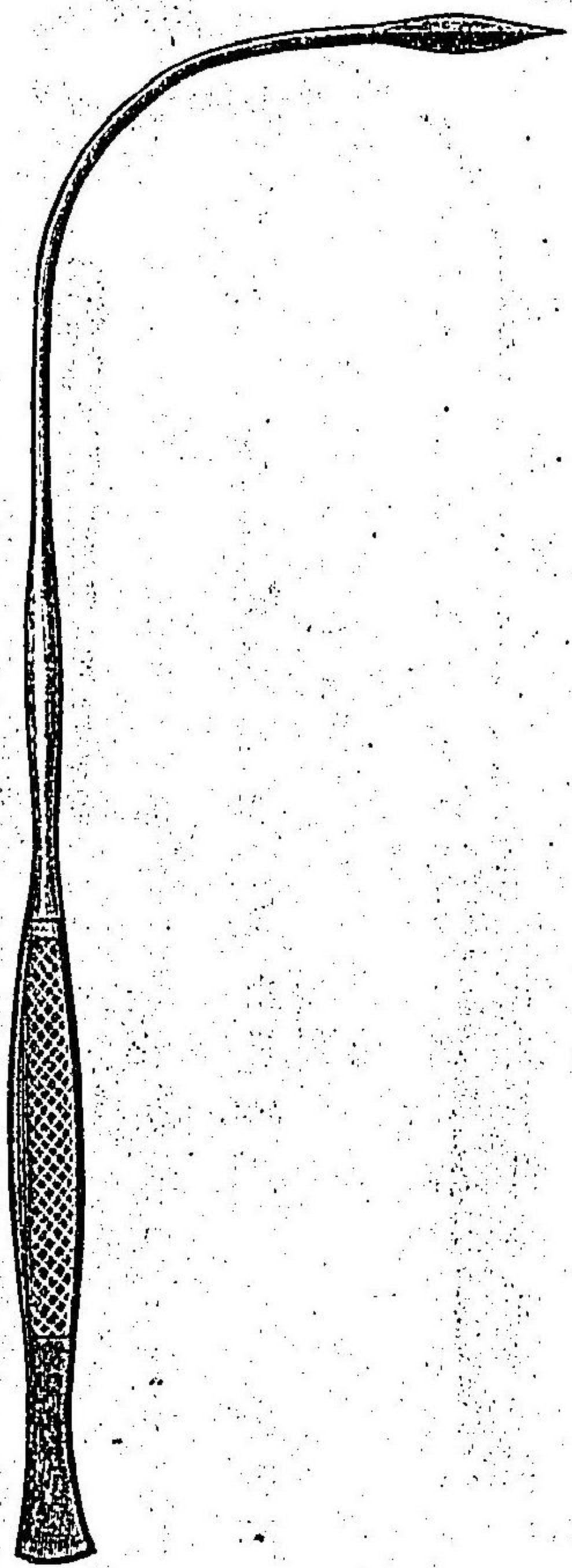
(一) 喉頭刀(第三十九圖及ビ第三十圖6及7)ハ單及若クハ兩刃ニシテ鞘ヲ有スル者ト否ラザル者トアリ其鞘アル者ハ手術ノ際指ニテ柄内ノ撥條ヲ壓シテ刀身ヲ挺出セシム又縱截開或ハ橫截開ヲ行ハ

第三十九圖(二)



ンガ爲ニ大小形狀種々ナル者ヲ備フベシ球頭刀モ又間々之ヲ要スルコトアリ蓋シ有鞘刀ハ頗ル喉頭器械ノ使用ニ熟練スル者ニ在テ

ハ敢テ必要ナラザレドモ未熟ノ徒ハ必ズ之ヲ要ス加之熟練家ト雖
第三十九圖(二)



喉頭鑷子及ヒ
鉗子

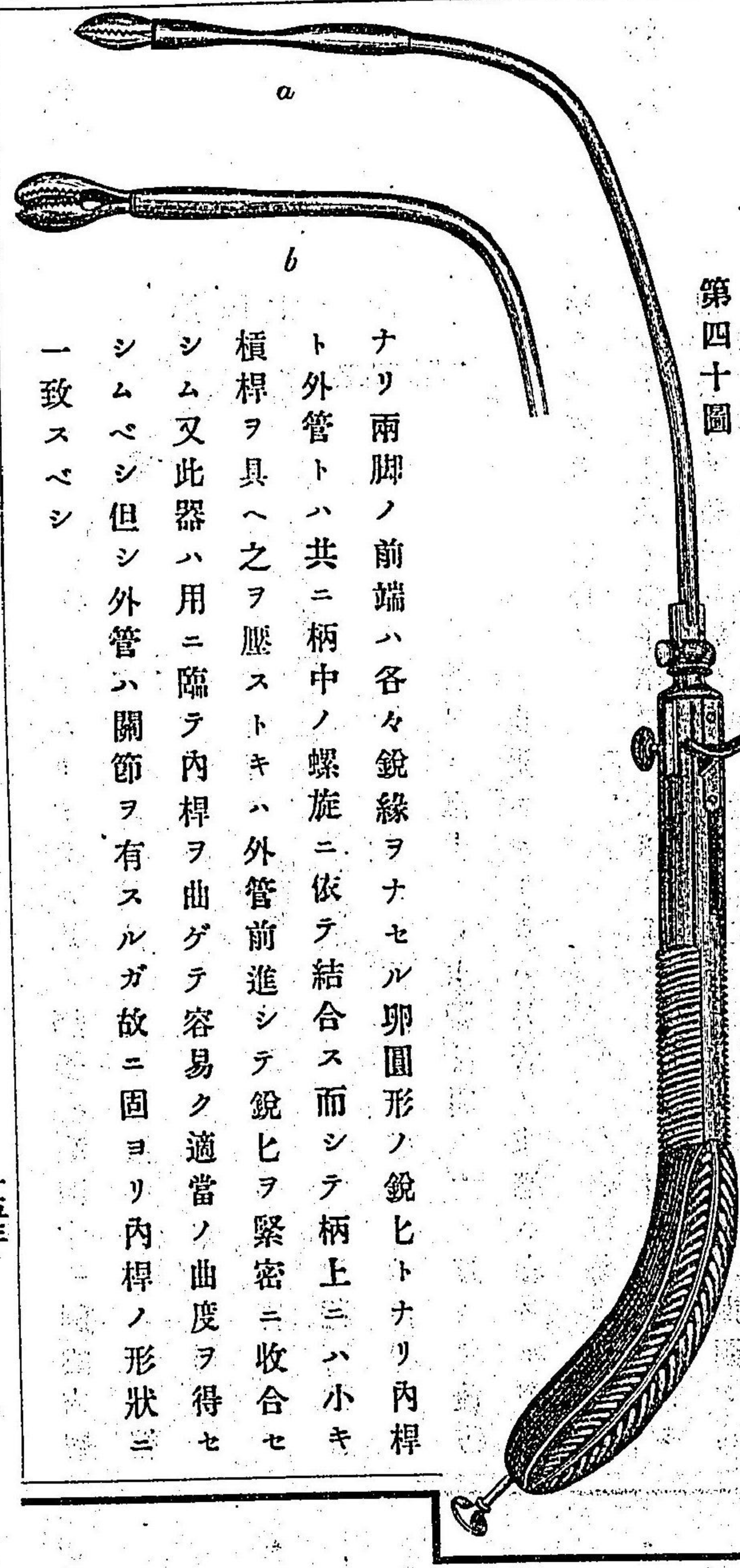
ドモ必ズ之ヲ用フル者アリ

(二)喉頭鑷子及ヒ鉗子ハ共ニ同上ノ理ニ基テ構成ス而シテ或
ル物體ヲ扼持スルニハ其兩部共ニ一ノ機器ニヨツテ收合シ得ベキ
者ヲ用フ其種類頗ル多シ就中チユルク氏ノ鑷子(第四十圖)ハ二個ノ
撥條性ノ脚ニ依テ末端離開スベキ内桿ト之ヲ被フ所ノ套管トヨリ
成リ則チ其内桿ヲ推進シテ末端套管外ニ出ルトキハ其彈撥力ニ依

チユルク氏ノ
鑷子

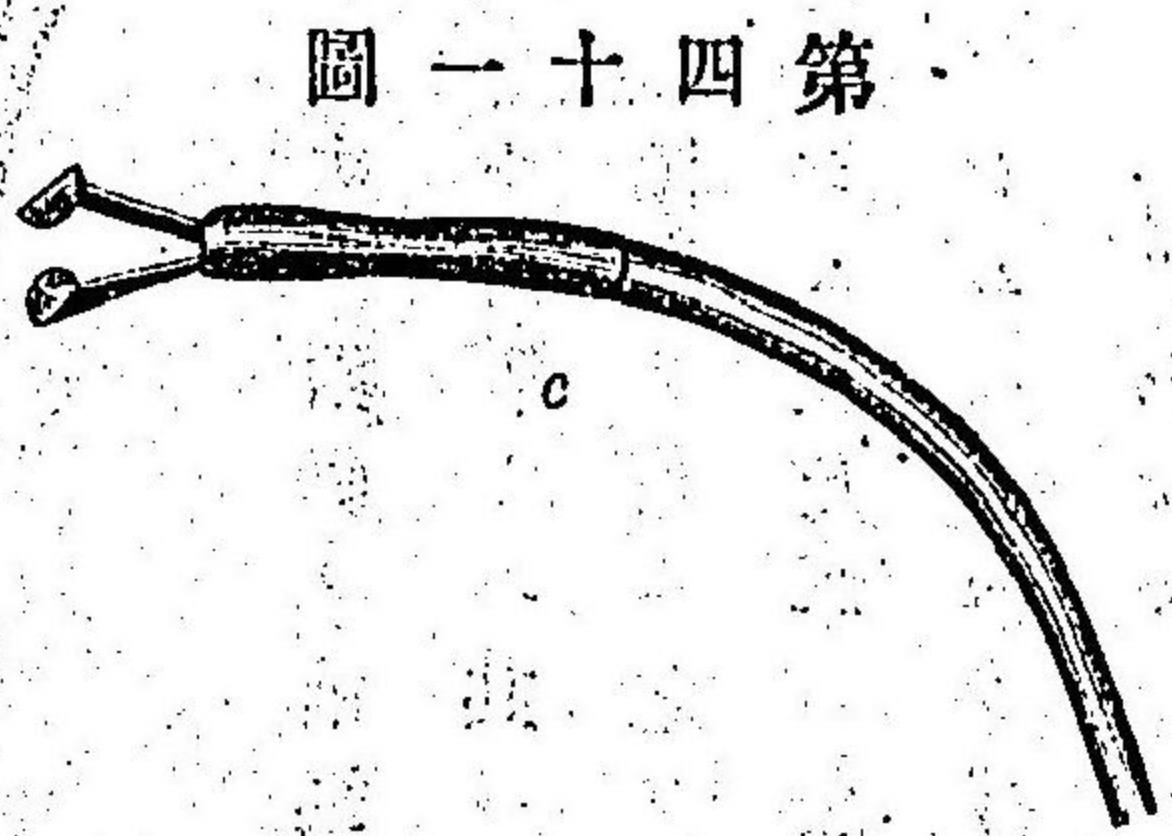
テ嘴端排開シ之ヲ套管内ニ曳キ入ルトキハ收合スブルンズ氏ノ
鑷子ハ直徑三五密迷ノ銀製ニシテ前方ニ關節ヲ具ヘタル外管ト直
徑二密迷ニシテ其前端二個ノ撥條性脚ヲナセル鐵製ノ内桿トヨリ

第四十圖



ナリ兩脚ノ前端ハ各々銳縁ヲナセル卵圓形ノ銳ヒトナリ内桿
ト外管トハ共ニ柄中ノ螺旋ニ依テ結合ス而シテ柄上ニハ小キ
槓桿ヲ具ヘ之ヲ壓ストキハ外管前進シテ銳ヒヲ緊密ニ收合セ
シム又此器ハ用ニ臨テ内桿ヲ曲ゲテ容易ク適當ノ曲度ヲ得セ
シムベシ但シ外管ハ關節ヲ有スルガ故ニ固ヨリ内桿ノ形狀ニ
一致スベシ

シユレット
氏ノ鋸子



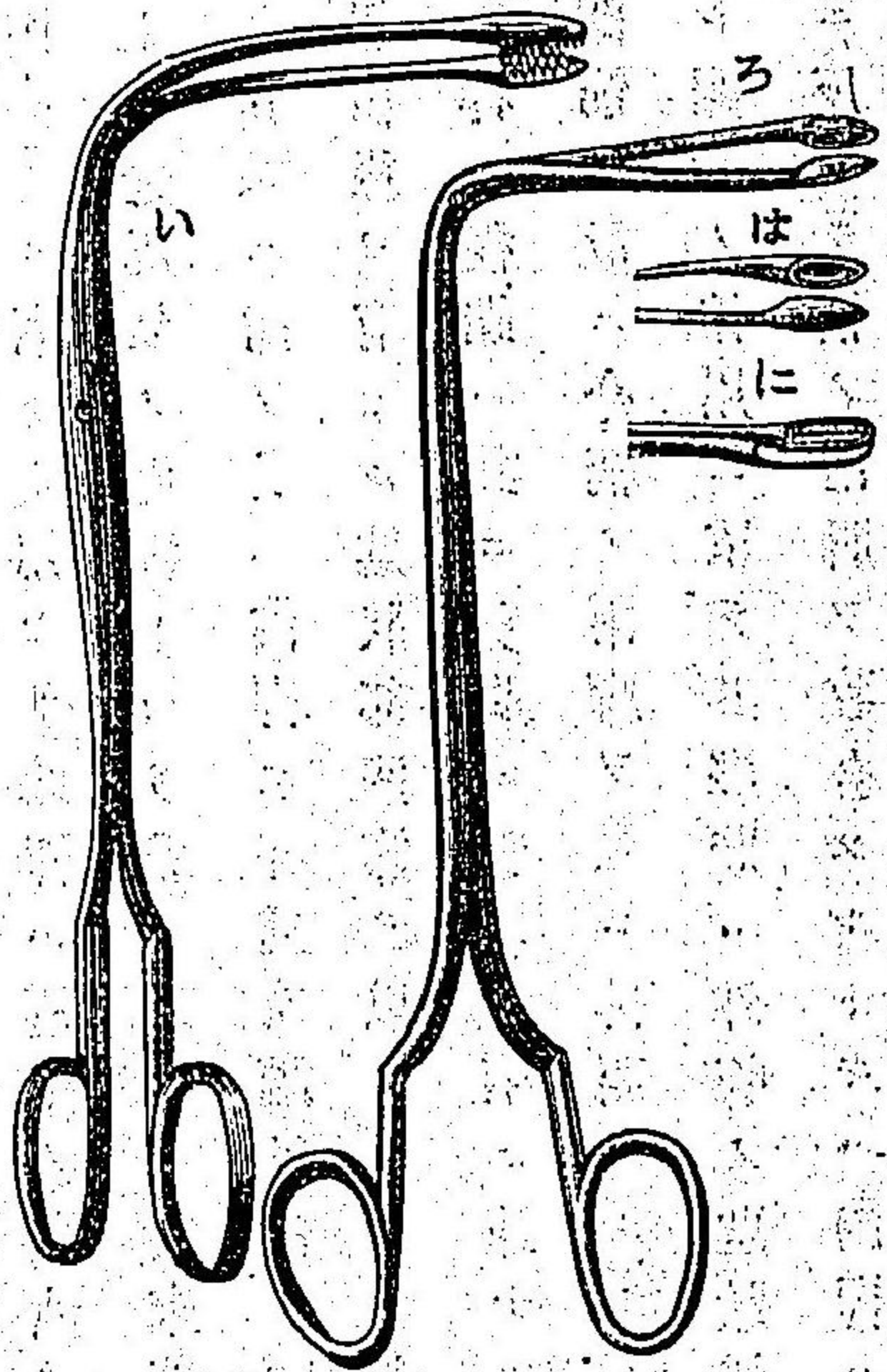
圖一十四第

シユレット氏ノ鋸子ハ(第四十一圖)其末端
 直角若クハ鈍角ヲナセル突起ヲ有スル外管
 下其前端分レテ二脚トナリ其末端ニ同ジク
 直角若クハ鈍角ノ突起ヲ有スル内桿トヨリ
 ナル而シテ内桿ハ柄ニ存スル推進器ニ結合
 スルガ故ニ之ヲ前方ニ推進スレバ内桿ハ外
 管外ニ挺出シテ兩脚排開シ之ニ反シテ後方
 ニ曳退スルトキハ外管ノ末端ニ存スル突起
 ニ依テ嘴端互ニ收合ス

マツケン
氏ノ鉗子

マツケン氏ノ鉗子(第四十二圖)ハ強キ柄ヲ具ヘ嘴端ハ細長ニシ
 テ他ノ尋常ノ鉗子ニ於ケルガ如ク側方若クハ前後ニ向テ開閉シ其
 末端ハ或ハ鋭キ鋸齒狀縁ヲ有シ或ハ鋭ヒ狀ヲナシ或ハ其一嘴ニ孔
 ヲ有シ孔縁鋭及ニ他嘴ハ滑平ニシテ平面ヲナセル者等ノ數種アリ
 フアウヅエル氏ノ鉗子ハ殊ニ佛國ノ喉頭外科家ノ使用スル者ニシ

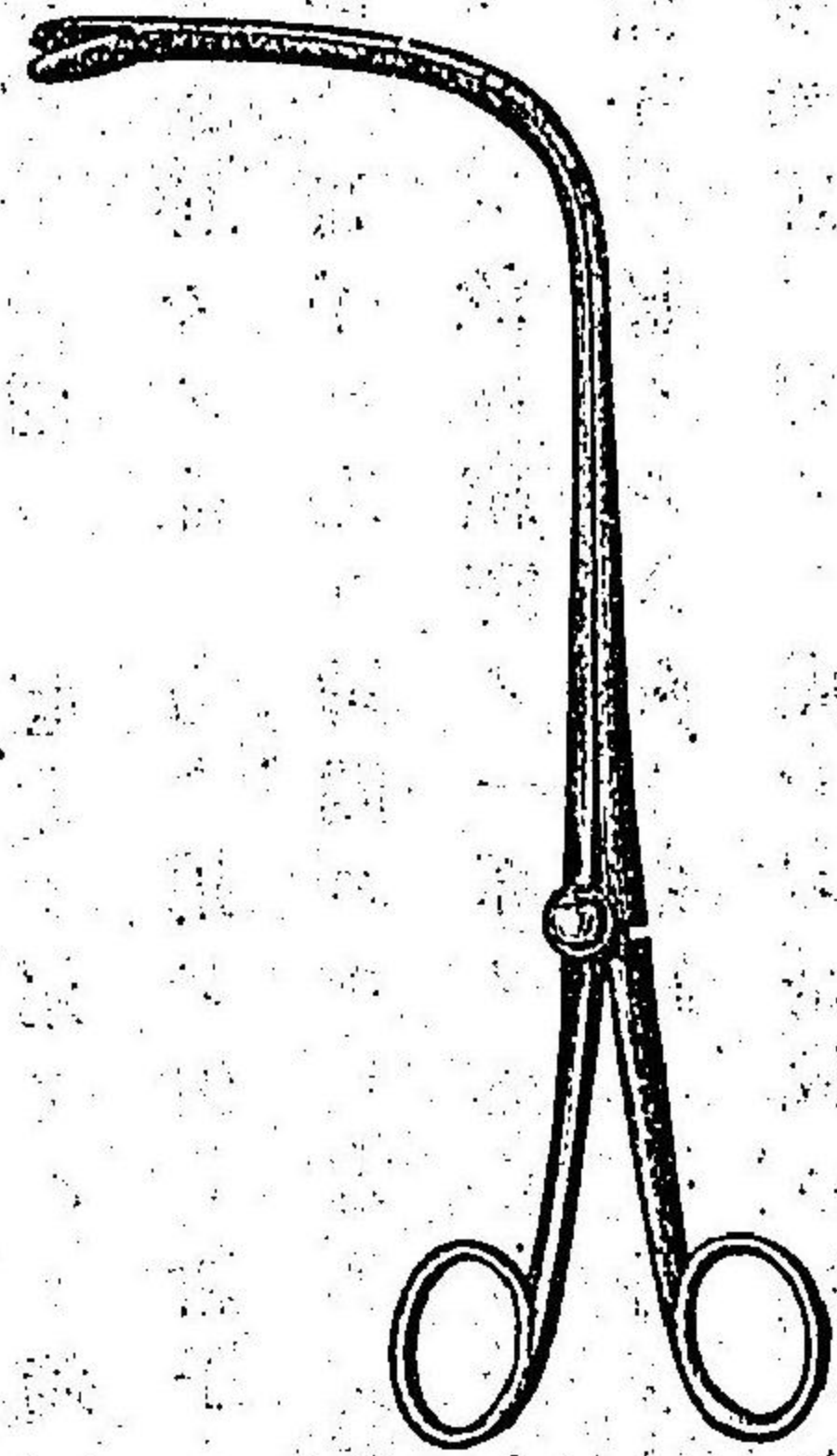
圖二十四第



テ其構造殆ド前者
 ニ同ジト雖ドモ新
 生物ヲ鉗止スルニ
 緊密確切ナラシメ
 シガ爲メニ鉗脚ニ
 鎖鑰裝置ヲ設クル
 ヲ以テ異ナリ

ユラツ氏ノ鉗子(第

圖三十四第



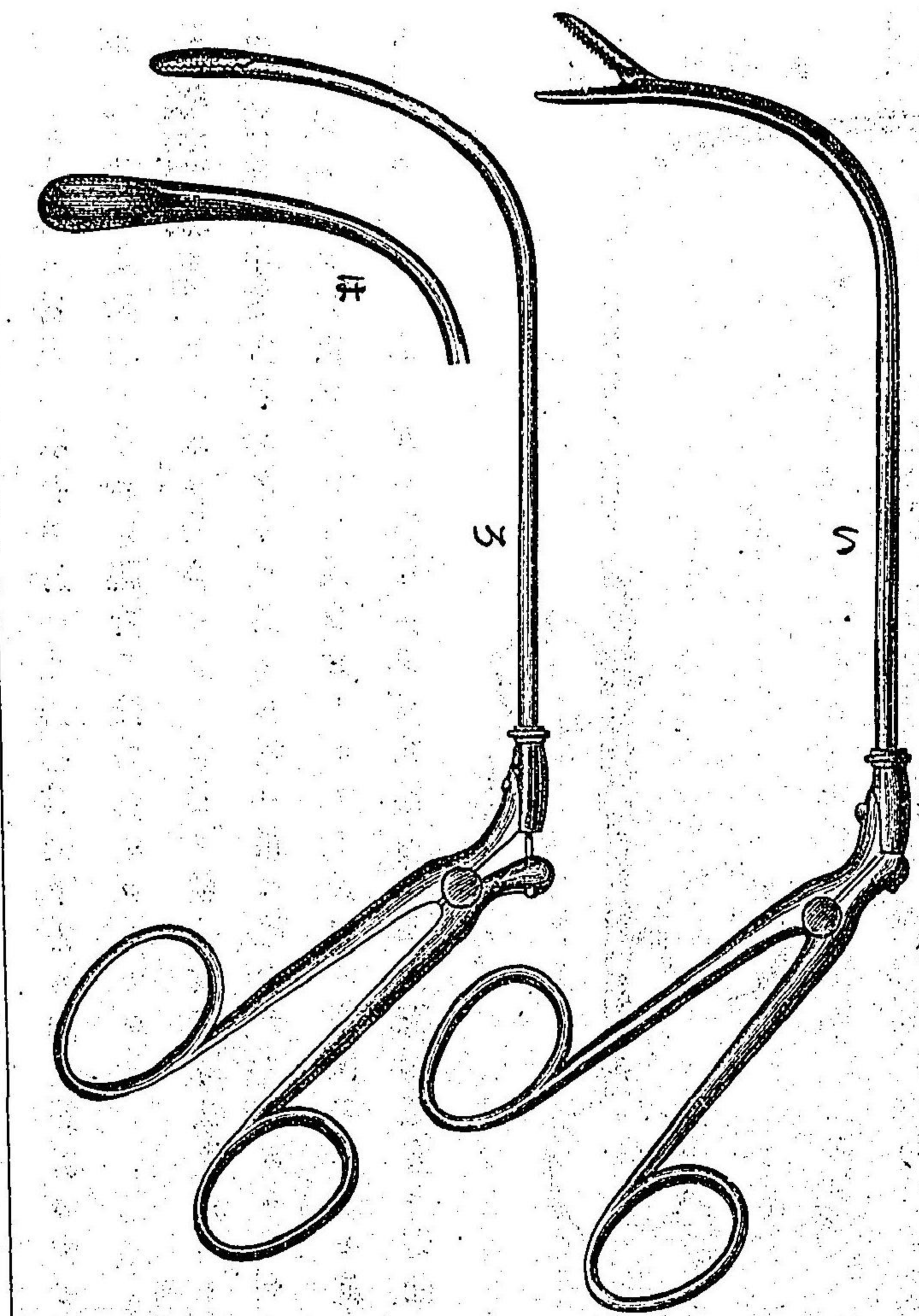
四十三圖)ハ其細長ナルヲ
 特異トス故ニ嘴端亦細ク
 シテ從テ小ナル息肉殊ニ
 其聲帶内縁ニ生ズル者ニ
 適當ス
 喉頭鉗子ナル者ハ喉頭鉗

ユラツ氏ノ鉗
子

ゴットスタイン氏ノ管狀鉗子

子ニ比スレバ固ヨリ強力ヲ用フルニ適スル者ナレバ鑷子ヲ用フベカラザル種々ノ症ニ方テ用フ但シ鉗子ハ鑷子ニ比スレバ一ノ劣點アリ則チ鉗子ハ之ヲ排開スルニ方テ其樞ヨリ嘴端ニ至ルマデ全部離開スルガ故ニ視野ノ一部ヲ掩蔽スルノ一事ニシテマツケンシ一氏ノ鉗子ニ於ケルガ如ク兩脚ノ排開スルコト少ナキ者ト雖ドモ尙ホ多少光線ヲ遮ルヲ免レズ是故ニゴットスタイン氏ハ管狀鉗子(第四十四圖)ナル者ヲ賞用セリ此器ハ適度ノ屈曲ヲナセル金屬性ノ外管ト太キ金屬製ノ内桿トヨリ成リ外管ハ其末端(嘴端)ノ一側匙狀ヲナシテ其縁ニ齒ヲ具ヘ内桿モ亦其末端外管ノ匙狀部ニ適合シテ同ジク鋸齒縁ヲ有セル匙狀部關節ヲ以テ連ナル者ヲ有ス而シテ外管及ビ内桿ノ後端ハ共ニ剪脚ニ類スル柄ニ連ナリ柄ノ兩脚ハ螺旋ヲ以テ關節ス故ニ今柄ノ兩脚ヲ互ニ排開スルトキハ内桿ハ外管内ヲ前進シ關節ノ作用ニ依テ其匙狀ハ外管ノ匙狀部ヨリ離レ嘴端膨開ス之ニ反シテ柄ノ兩脚ヲ收合スルトキハ内桿ハ後方ニ曳カルヽガ

第四十四圖



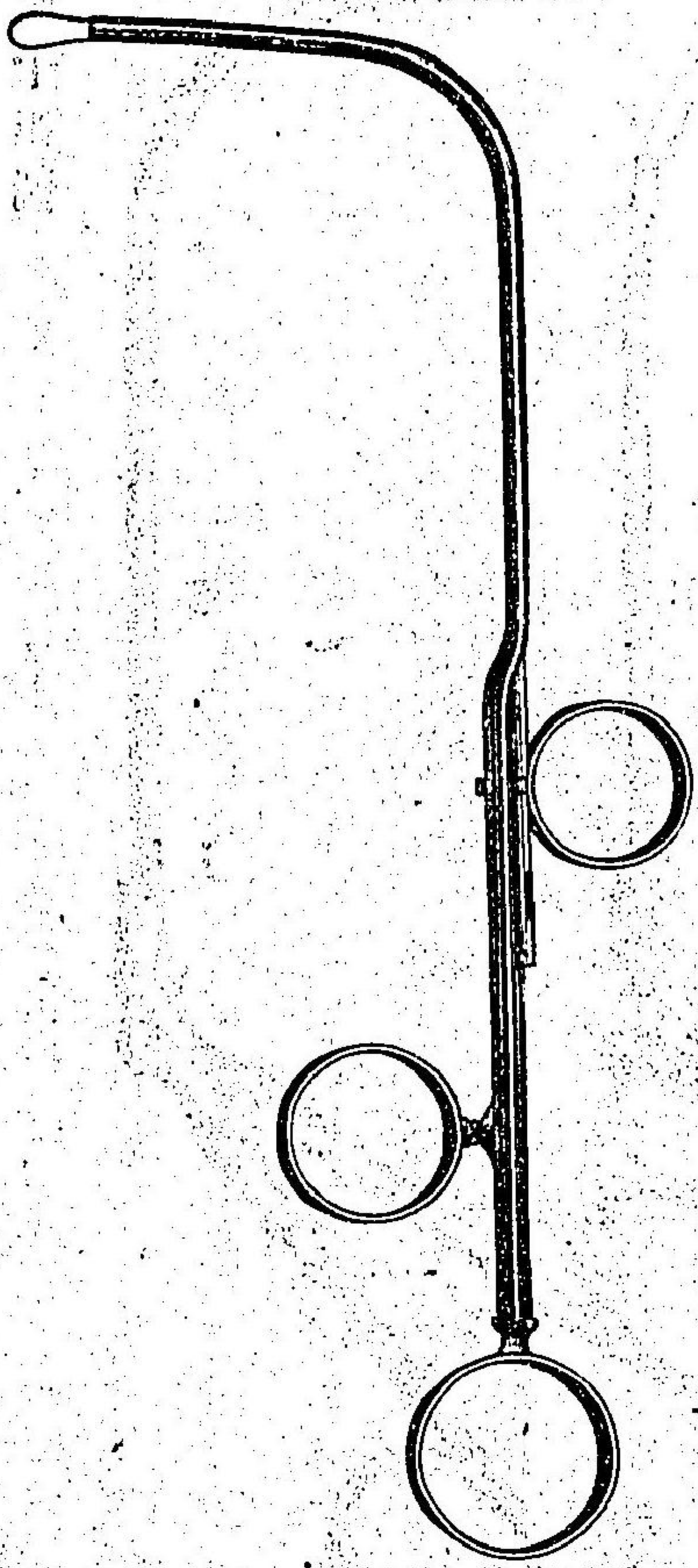
喉頭絞斷器

トホルト氏ノ絞斷器

故ニ匙狀部モ亦互ニ收合ス殊ニ此器ハ其柄下方ニ向テ曲折スルガ故ニ手術ノ際術者ノ手ニテ視野ヲ掩蔽スルコトナシ

(三) 喉頭絞斷器ハ最モ安全ニシテ容易ク新生物ヲ除去シ得ベシ殊ニ新生物中等大ニシテ莖ヲ具フル者ニ最モ適當ナリ此ニハギツベ氏ジョンソン氏ブルンス氏及ビトホルト氏等ノ器械アレドモ就中トホルト氏ノ者ハ最モ費用セラル此器ハ第四十五圖適宜ニ彎曲

圖五十四第



ステルク氏ノ絞斷器

クラウゼー氏ノ絞斷器

喉頭ゲイルロチー

セル管中ニ線ヲ通ジテ管ノ末端ニ於テ締係ヲ形成セシメ線ノ外端ハ把柄部ニ存スル有輪推移器ニ固結ス故ニ此推移器ヲ摺引スルトキハ締係ハ管内ニ退引スルガ故ニ全く新生物ヲ絞斷シ去ルナリ然レドモ絞斷器ハ一タビ之ヲ用フルトキハ壓迫ト摺引トニヨリテ線ハ屈曲シ弾力性ヲ失テ脆弱トナリ再ビ用ヒ難キノ不利アリ是故ニステルク氏ハ一種ノ絞斷器ヲ案出セリ即チ長キ線條ニ代フルニ一條ノ細キ金屬製桿ヲ管中ニ通ジ其末端ニ鋼鐵線ノ小締係ヲ螺旋シテ隨意ノ形狀トナシタリ又クラウゼー氏ハ此複雑ナル螺旋装置ヲ用ヒズ金屬桿ノ末端ヲ滑磨シ玆ニ數孔ヲ穿チテ締係ノ兩端ヲ通ジ其端ヲ鈎狀ニ屈曲セシメテ止メタリ

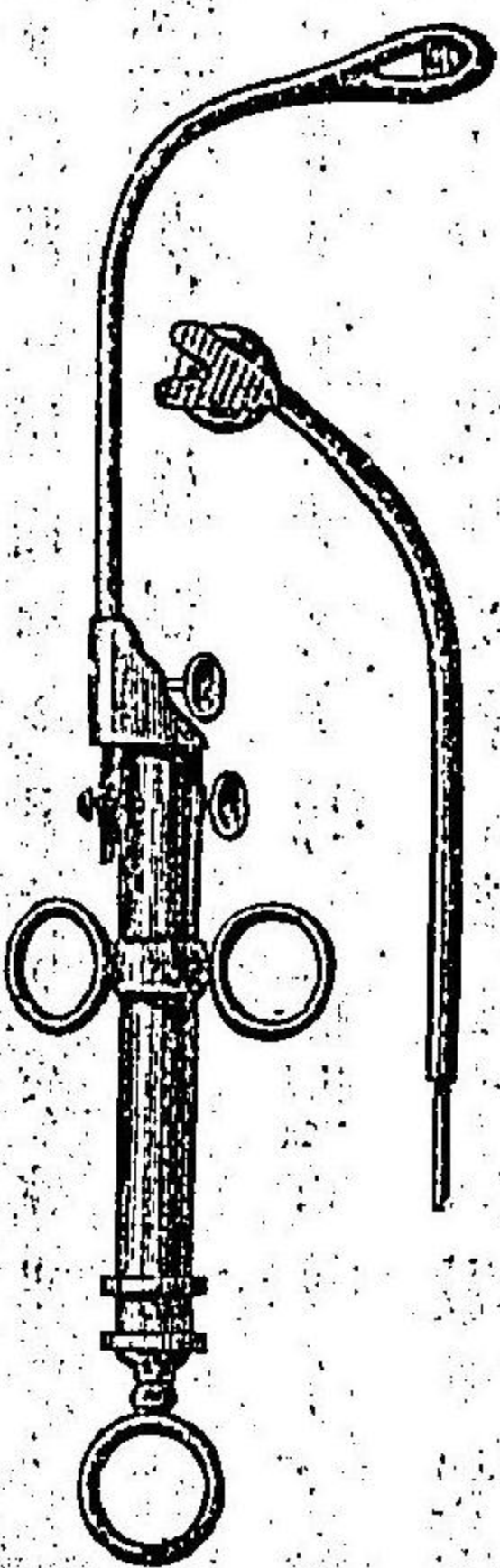
(四) 喉頭ゲイルロチー

Gillotine ハフオルトリニ

テ案出セラレタリ乃チ氏ハ喉頭ポリープヲ切去スルニ方テアラト子ンストツク氏ノ扁桃腺切去器ニ倣テ製作シ之ヲステルク氏改良シテ更ニ簡便ナラシメタリ(第四十六圖)此器ハ強キ鐵線ニ輪狀刀ヲ

喉頭キユレツ

第四十六圖



固結シ之ヲ一ノ彎曲セル導管中ニ通ジタル者ニシテ導管ハ柄ニ固ク結合シ鐵線ハ柄上ニ存スル推移器ト連結ス故ニ其推移器ヲ曳クトキハ輪狀刀ハ後退シテ

切斷ノ用ヲナシ之ヲ放ツトキハ柄内ニ存スル螺旋撥條ノ作用ニ依テ自ラ平位ニ復ス

(五)喉頭キユレツテ

ハブルンス氏ノ創用セシ所ニシテ氏ハ喉頭探子ノ如ク屈曲セル長キ銳匙ヲ造リ之ヲ搔刮子又ハ搔爬子ト名ケタリ其後シエツヒ氏クラウゼ氏ヘーリング氏等ハ之ニ改良ヲ加ヘタリ殊ニシエツヒ氏ノ賞用スル者ハ口中ニ於テ毫モ器械ノ位置ヲ變ズルコトナク特リ銳匙ヲノミ其縱軸ニ依テ廻轉シ得ベクナシタリ而シテ五種ノ異ナル銳匙ト一ノ柄トヲ以テ諸種ノ用ヲナセリ此器ハ特ニ聲帶下部ノ手術ニ適當ス

ヘーリング氏キユレツテ

複キユレツテ

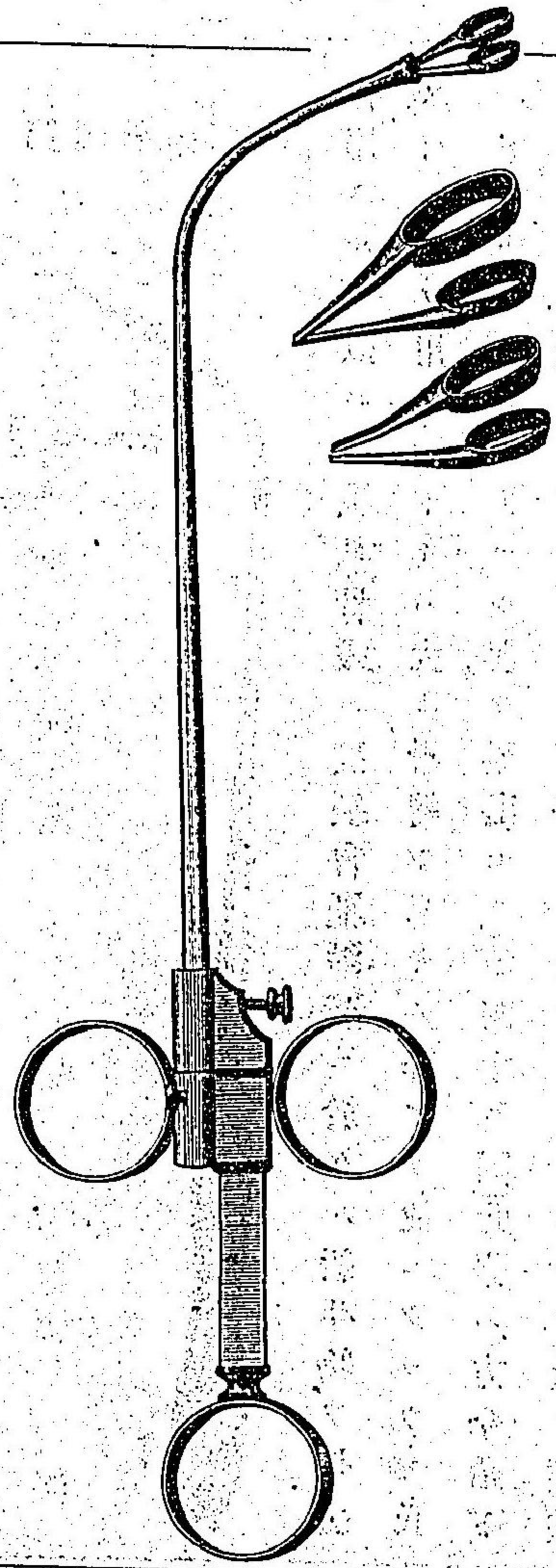
クラウゼ氏ハ子宮キユレツテ若クハランゲ氏ノ鼻咽腔キユレツテニ模擬シタル器械ヲ使用セリ(第四十六圖ア)又ヘーリング氏ハ鼻咽腔腺性息肉ヲ切去スルニ用フベキ輪狀刀ニ類スル者ヲ使用セリ(第四十七圖イウ)以上例記セルキユレツテハ悉ク皆ナ一側ニ向テノミ

第四十七圖



作用スルガ故ニ會厭軟骨或ハ披裂會厭皺襞ニ於ケル新生物ヲ切去スルニ之ヲ用フルトキハ大ニ滑轉シ易キノ弊アリ故ニクラウゼ氏ハ更ニ複キユレツテナル者ヲ製出セリ(第四十八圖)此器ハ方今殆ド之ヲ使用セザル者ナキニ至レリ則チ其構造恰モチユルク氏ノ喉頭鋸子ニ類シテ彼ノ匙狀部ニ代フルニ二個ノ強キ輪刀ヲ以テシ其兩

第四十八圖



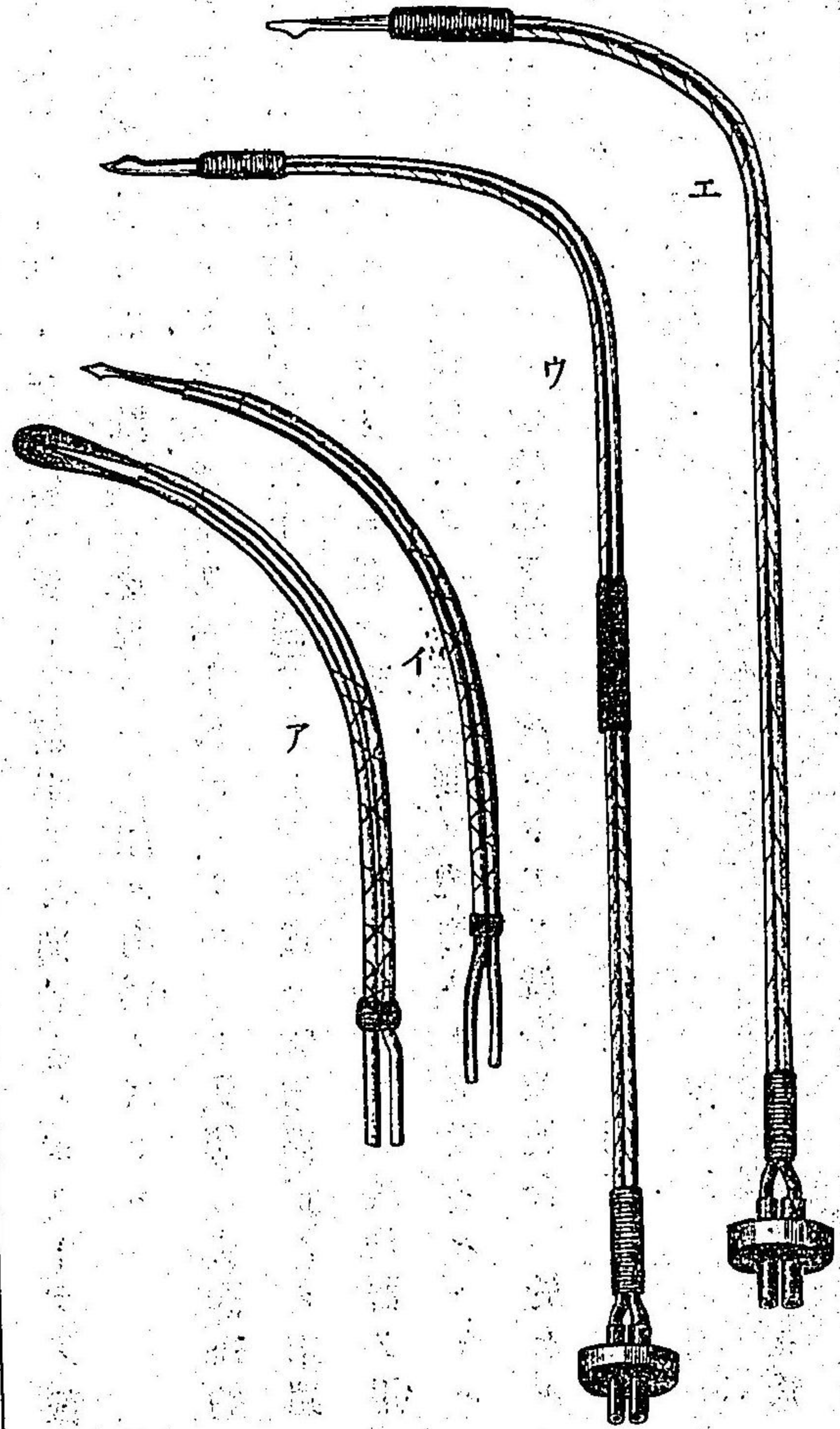
輪ハ左右若クハ前後ニ向テ相對スルヲ以テ柄ニ附シタル推移器ニ
ヨリテ内桿ヲ套管内ニ曳入ル、トキハ互ニ相收合シテ截斷ノ用ヲ
ナスナリ
「キユレツテ」ハ柔軟ナル蔓延性ノ新生物豐生肉芽甚ダ低クシテ鉗子
又ハ締係ヲ用ユルコト能ハザル乳嘴腫瘍、痕瘡、肉芽過生ノ潰瘍、結核
性滲潤及ビ其他ノ腫瘍ノ搔爬ニ用フ就中結核性滲潤ニハ之ヲ用ユ

ルコト多シ

第四項 電氣燒灼法

此法ハ大ニ賞用スル者ト亦之ヲ誹譏スル者アリ元來電氣括斷法ハ

第九十四圖



殆ト要ナシト雖ドモ燒灼ニ至テハ扁平ノ息肉若クハ「ボリープ」ノ截去後ニ於ケル殘根ヲ除クニ必要ニシテ頗ル有効ノ者トス

燒灼法ニハ「ブルンスホルトリニー氏」或ハ「シエツヒ氏」等ノ尖頭燒灼器若クハ「刀狀燒灼器」(第四十九圖)ヲ用フルカ或ハ燒灼部正シク末端ニ存セズシテ少シク上方ニ在ル夫ノ「ゴットスタイン氏」燒灼器ヲ用フベシ

喉頭ノ前壁後壁若クハ其左右側ヲ燒灼スルヲ要スルトキハ其症ニ應ジテ種々ノ燒灼器ヲ用フルコトアリ就中前連合ニ於ケル小肉芽若クハ「ボリープ」ノ殘根ヲ灼滅スルニハ彎曲ノ凹面ニ灼熱部ヲ有スル者ヲ撰用スベシ

ホルトリニー氏
電氣燒灼器把柄

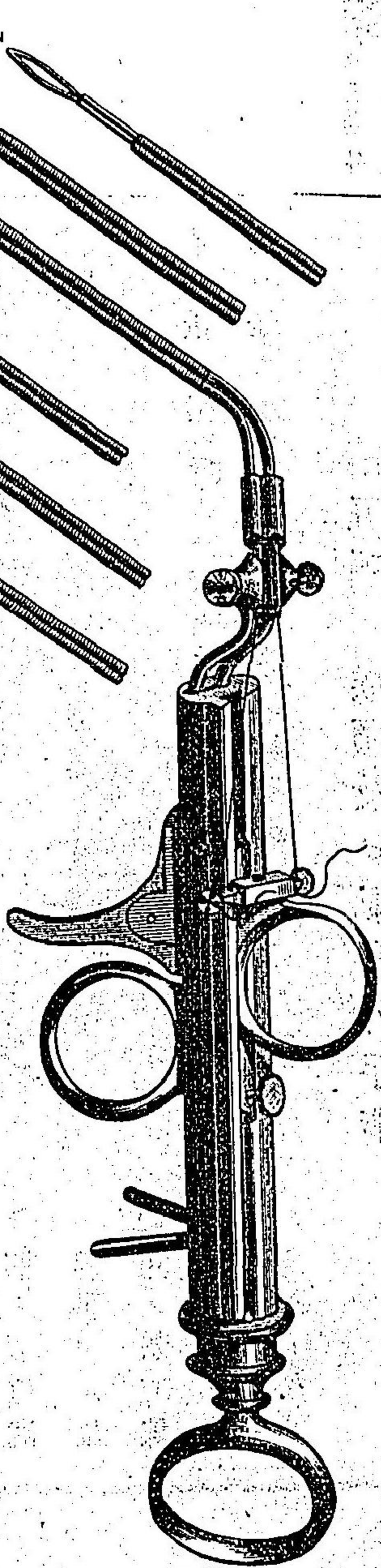


第五十圖
シエツヒ氏及ビゴットスタイン氏等ノ製式アリ就中單簡ニシテ使用ナルハシエツヒ氏ノ通用

燒灼器ノ把柄ニハ「ブルンスホルトリニー氏」第五十圖「ボエツケル氏」

シエツヒ氏
用柄

柄(第五十一圖)ナリ此柄ハ縮係器及ビ其他諸種ノ燒灼器ニ供用シ得ベシ而シテ「ホルトリニー氏」ノ柄ハ其前方三分ノ一ノ部ニ小キ象牙



第五十一圖

鈕アリテ之ヲ壓ストキハ電流燒灼器ニ通シ又シエツヒ氏ノ柄ハ其下方ニ突出セル

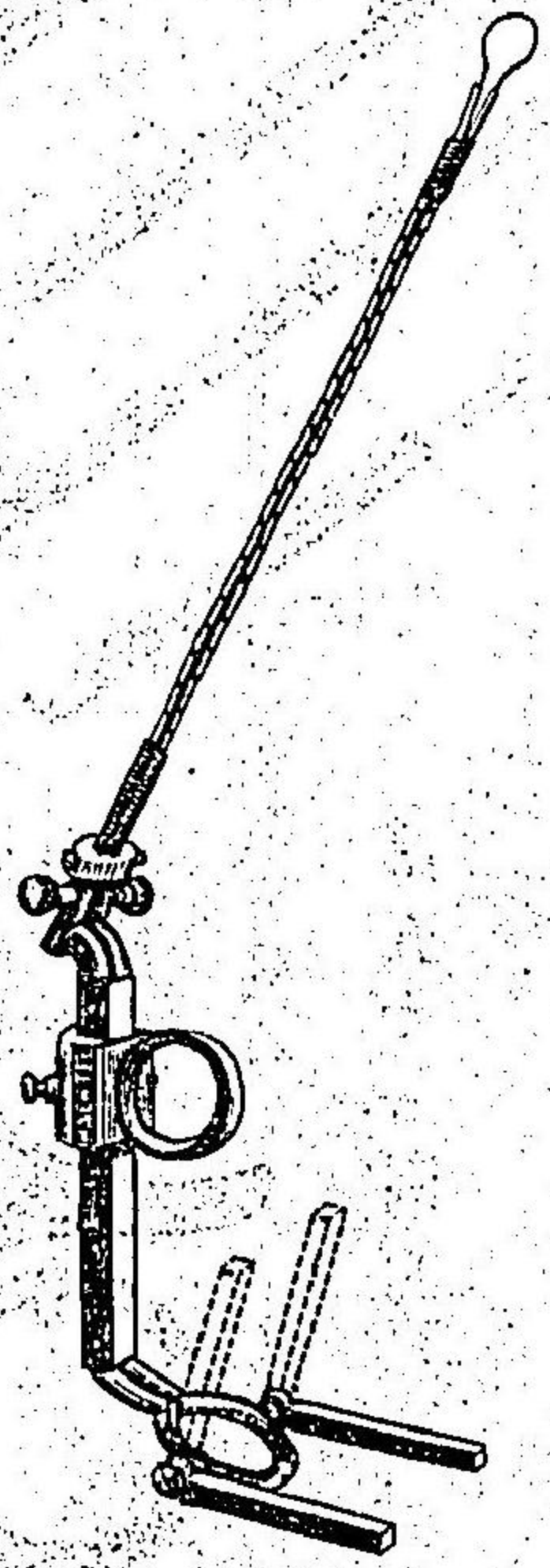
壓桿ヲ壓上スルトキハ電流ヲ通ズ

ゴットスタイン氏ノ柄ハ(第五十二圖)シエツヒ氏ノ柄ヲ改造セシモ

ゴツトスタイ
氏通用柄

ノニシテ其推移器ヲ曳クトキハ電流閉鎖ス即チ推移器ハ一種固有ノ方法ニ依テ管中ニ在ル導線ノ兩端ヲ連接セシムルガ故ニ之ヲ曳クトキハ同時ニ縮係灼熱シ兼テ縮小シテ括斷ノ用ヲナス而シテ全ク之ヲ攣キ益々縮小シテ其極ニ達スルトキハ電流自ラ開放シテ灼熱亦隨テ止ム其
他導線ヲ結合ス
ベキ柄ノ兩側端
ニハ蝶番アル故
ニ使用ノ際導線
ノ重量ト強硬トニ依テ手ノ細微ナル運動ヲ妨グルノ憂ナシ且ツ此柄ハ他ノ燒灼器ヲモ結合シ得ベシ

圖二十五第



喉頭及ヒ氣管外
手術

第五項 喉頭及ヒ氣管外手術

喉頭或ハ氣管ニ於ケル諸種ノ狹窄異物損傷炎症性閉鎖腫瘍殊ニ惡

性腫瘍聲帶麻痺等ニ在テ喉頭内手術ヲ施シ難キトキハ外部ヨリ手術ヲ行ハザルベカラズ而シテ其手術ヲ別テ左ノ諸種トス

一 氣管截開術

(一) 上氣管截開術(甲狀腺峽ノ上部ニ於テ上部ノ氣管軟骨輪ヲ截開スルカ若クハ環狀軟骨ト氣管輪トヲ共ニ截開スルノ法)

(二) 下氣管截開術(甲狀腺峽ノ下部ニ於テスル法)

(三) 甲狀軟骨截開術(甲狀軟骨ヲ截割スル法)

(四) 環狀軟骨下喉頭截開術(甲狀軟骨下際ニ於テ環狀甲狀軟骨ヲ截開スル法)

(五) 環狀軟骨截開術(環狀軟骨ヲ截開スル法)

(六) 喉頭截開術(甲狀軟骨ト環狀軟骨トヲ同時ニ截割スル法)

六 喉頭截去術

(一) 偏側喉頭截去術(甲狀軟骨及環狀軟骨ヲ分割シ病側ノ一半ヲ截去スル法)

(ろ)全喉頭截去術(喉頭ト周圍ノ組織トヲ分離シ次テ氣管ヲ橫斷シ喉頭ノ全體ヲ截去スル法)

以上諸術ノ方法ハ他ノ外科書中ニ詳論スルヲ以テ茲ニ記載スルノ要ナシ唯々注意ヲ要スベキ二三ノ點ニ就テ左ニ約述セントス

豫備氣管截開

氣管截開術ハ前項ニ述ベタル諸般ノ適症ニ於ケルノ外更ラニ口腔咽頭、鼻咽腔及ビ喉頭部ノ諸手術ニ於テ血液ノ氣道若クハ肺中ニ流下スルヲ防ガシガ爲ニ所謂豫備手術トシテ行フコトアリ殊ニ喉頭部ノ手術ニ在テハ通例殆ド之ヲ缺ク可ラズトナス但シ喉頭ニ生ズル悪性腫瘍ノ結果トシテ此手術ヲ要スルトキハ宜シク下氣管截開術ヲ撰ブベシ

總テ氣管截開術ニハ全身麻醉ヲ要セズ單ニオイカイン或ハココカイン溶液等ノ注射ヲ以テ局處麻醉法ヲ行フベシ種々ノ點ニ於テ大ニ利アリ

カニユーレ
氣管截開孔ニ插入スヘキカニユーレ種々アリト雖ドモ

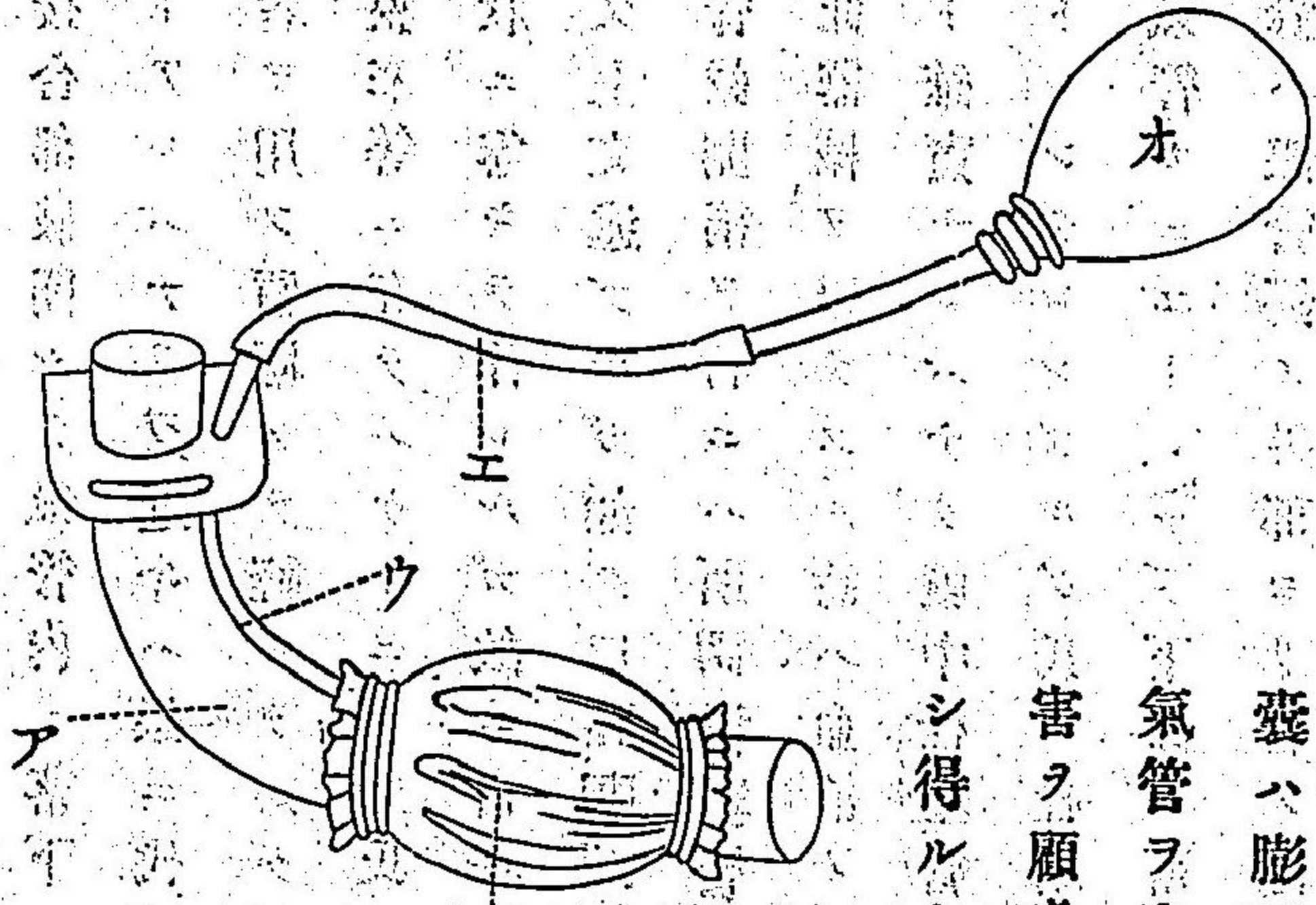
栓塞管

トレンデレンブルグ氏栓塞管

硬護謨製管ハ寧ロ廢棄スルニ如カズ是消毒ニ便ナラザルト時トシテハ接合部破開シテ氣管内ニ落下スルノ弊アルハ間々報告ニ接スルコトアレバナリ又近今ハ銀ニ代ユルニアルミニウムヲ以テ製スル者ヲ用フ質極メテ輕キヲ以テ頗ル賞用スベシ又深所ニ存スル氣管狹窄等ニ在テハケーニツヒ氏ノ長銀管ヲ妙トス此管ハ其下部螺旋狀ニ卷キテ作レルガ故ニ自在ニ撓屈シテ能ク患部ノ形狀ニ適合ス又上文述ブルグ如ク口腔咽頭若シクハ喉頭部ノ手術ニ臨テ豫備氣管截開術ヲ行ニハ所謂栓塞管 Tamponcathete ヲ用フルヲ良トス是レ此器械ヲ以テスル時ハ血液ノ氣管若クハ肺中ニ流下スルヲ防グコト確實ナレバナリ就中栓塞管中比較的良好ニシテ其用最モ多キハトレンデレンブルグ氏ノ栓塞管第五十三圖ナリ此管ハ尋常ノ銀製氣管カニユーレ(ア)ノ下部ニ薄キ護謨囊(イ)ヲ被ヒタル者ニシテ護謨囊ハ銀管鑄ノ外部ヨリ管ノ凹彎面ニ沿テ下方ニ走レル細キ空管(ウ)ヲ纏包ス故ニ護謨管(エ)ヲ此小管ノ外端ニ連結セシメ更ラニ(オ)

トレンアレン
ルク氏栓塞管ノ
缺點

ノ護謨球ヲ以テ空氣ヲ吹入シ糸ヲ以テ護謨管ヲ緊括スル時ハ護謨
 囊ハ膨脹シテ全ク氣管壁ニ密着シ以テ
 氣管ヲ密塞シ術者ハ毫モ血液吸入ノ危
 害ヲ顧慮スルコトナク平然トシテ手術
 シ得ルナリ氏ノ栓塞管ハ實地上屢々使
 用セラルト雖ドモクラウ
 スキー氏リヂキエル氏コヂ
 ンスキー氏等ノ實驗ニ徴ス
 ルニ此栓塞管ハ使用中護謨
 囊中ノ空氣漸ク漏洩シテ萎
 縮シ遂ニ血液ノ流下ヲ防グ
 コト能ハザルニ至リ又時ト
 シテハ手術中誤テ護謨囊ヲ
 毀損シ其用ヲ失フコトアリ又護謨囊ヲ吹脹スルコト過劇ナルトキ

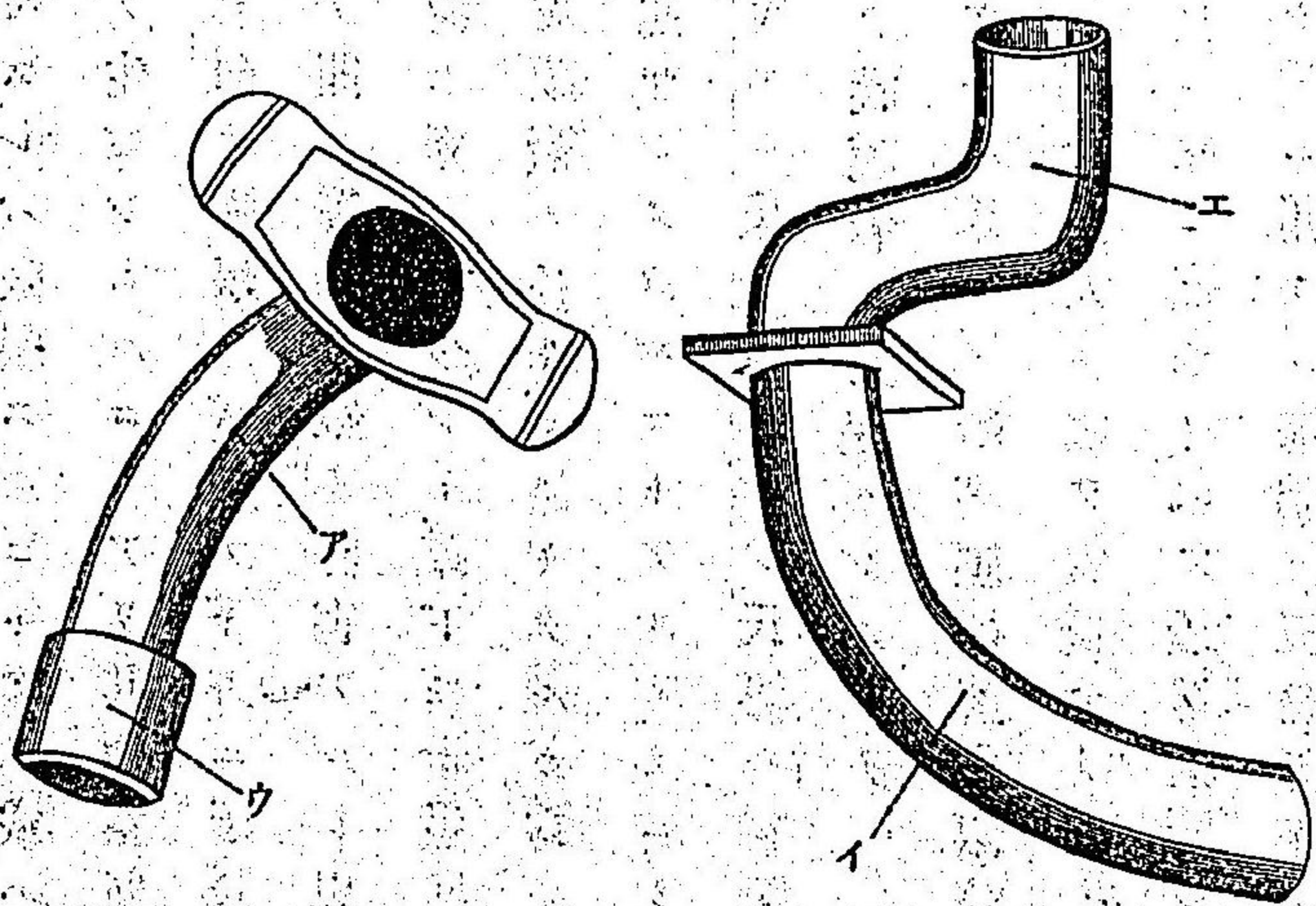


第五十圖

壓搾海綿銀管

ハ動モスレバ破裂スルコトアリ或ハ氣管粘膜面ノ壓迫ニ依テ爰ニ
 破爛ヲ生ゼシムルコトアリ其他空氣ヲ吹入スルニ方テ護謨囊ハ氣
 管壁ニ向テ膨脹セズ却テ下方ニ延長シテ銀管ノ下口ヲ閉塞シ爲ニ
 窒息ヲ催ス等ノ諸般ノ弊害アルヲ以テ大ニ之ヲ非議セリ但シ余ハ
 經驗尙ホ極メテ少シト雖ドモ十數回氏ノ栓塞管ヲ使用セシガ只ダ
 一回護謨囊ノ長キニ過ギタルガ爲ニ銀管ノ下口ヲ閉鎖シテ窒息ノ
 狀ヲ起サシメタルコトアルノミニシテ敢テ不便ヲ感ゼザリシ
 ミヒヤエル氏シユワルツ氏等ハ空氣ニ代フルニ水若クハ虞利設林
 ヲ以テ護謨囊ヲ充實セシメタリ
 ミヒヤエル氏ハ又所謂壓搾海綿銀管 Proschwamcanüle ナル者ヲ用ヒ
 シエーデ氏亦大ニ之ヲ賞賛セリ則チ適大ノ海綿ヲ取り尋常ノ「カニ
 ユーレ」ニ纏ヒ強糸ヲ以テ頻卷緊約シテ固定シ乾燥セシメタル者ナ
 リ但シ爰ニ用フル海綿ハ五倍乃至七倍ノ沃度仿兒謨依的兒中ニ蘸
 シ以テ沃度仿兒謨ヲ含マシメタル者ヲ良トス而シテ管ニ固着シタ

ハーン氏栓塞管



ル海綿ハ更ラニ薄キ「グツタペルヒヤ」紙ヲ以テ被包シ用ニ臨デ管壁ノ小孔ヨリブラワツツ氏注射器ヲ以テ撒里矢爾酸稀溶液ヲ海綿中ニ注入スルトキハ海綿膨脹シテ氣管ヲ密塞スベシ其他ハーン氏栓塞管ハ(第五十四圖)外管(ア)ト内管(イ)ヨリナリ外管ハ其下端(ウ)ノ如ク膨大ス是レ外管ヲ纏ヘル海綿ヲシテ脱落セシメザランガ爲ナリ内管ハ外管ニ比スレバ長クシテ屈曲ス故ニ之ヲ外管内ニ挿入スルトキハ其外端著シク突出シ下方ニ向テ屈曲ス(圖中エ)而

第五十四圖

クラエウスキー氏栓塞管

シテ外口則チ呼吸口ハ氣管截開孔ヨリ遙ニ下方ニ於テ宛モ胸骨柄ノ部ニ存スルヲ以テ尋常ノエスマルヒ氏假面ヲ用ヒテ麻醉ヲ行フモ手術部ヲ掩蔽シテ施術ヲ防グルノ憂ナシ又外管ニ纏ヘル海綿ハ豫メ沃度仿兒謨ヲ含マシメタル者ヲ用フ但シ此管ヲ挿入スルニハ稍々強力ヲ要スルガ故ニ未熟ノ徒ニ在テハ動モスレバ胸腔内ニ向テ假道ヲ造ルノ虞アリ且ツ内管ノ外端ハ屈曲スルガ故ニ施術中管内ニ堆積スル粘液ヲ除去センガ爲ニ屢々之ヲ拔去セザルベカラザルノ不便アリ此故ニクラエウスキー氏ハ第五十五圖A Bノ如キ栓塞管ヲ賞用セリ此管ハ(一)外管(二)導管(三)内管(四)S字管ノ四部ヨリナリ外管ハハーン氏管ト異ナリテ其膨大部ハ下方ニ向テ斷頂セル圓錐形ヲナシ導管ハ外管ヨリ長クシテ下端ハ狹小トナリテ側面ニ橢圓形ノ孔ヲ開ク之ヲ外管中ニ挿入スルトキハ圖中Bノ如キ形ヲナスヲ以テ氣管中ニ挿入スルニハハーン氏管ニ於ケルガ如キ不快ヲ見ルコトナシ又内管ノ尋常ノ「カニユーレ」ニ異ナルハ其外端微シク